



IEHE TOHOKU Report 80
Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

第30回東北大学高等教育フォーラム
新時代の大学教育を考える [16] 報告書

入試制度が変わるとき

令和元（2019）年10月
東北大学高度教養教育・学生支援機構

第30回東北大学高等教育フォーラム（新時代の大学教育を考える [16]）

入試制度が変わるとき

- ◇ 日 時 : 令和元年5月15日(水) 13:00～17:00
◇ 会 場 : 仙台国際センター会議棟2階大ホール
〒980-0856 宮城県仙台市青葉区青葉山
◇ 主 催 : 東北大学高度教養教育・学生支援機構

プログラム

司 会	東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授	庄司 強
開会の辞	東北大学理事・副学長	滝澤 博胤
基調講演1	大学共通第1次学力試験の導入とその前後 —何が期待され何が危惧されたのか—	
	筑波大学アドミッションセンター教授	大谷 奨 氏
基調講演2	大学入試センター試験の光と影 —「平成」は「ポスト昭和」を超えたのか?—	
	東北大学高度教養教育・学生支援機構教授	倉元 直樹 氏
	(休憩)	
現状報告1	地方公立高校における整理と構え —入試制度変更への対応の成果と課題—	
	鹿児島県教育庁高校教育課指導主事	渡辺 豊隆 氏
現状報告2	入試制度の変更と現場で思うこと —今までとこれからを考える—	
	山形県立米沢興譲館高等学校教諭	廣瀬 辰平 氏
現状報告3	高等学校の現状と、今、大学に求めること	
	東京都立八王子東高等学校校長	宮本 久也 氏
	(休憩)	
討 議 司 会	東北大学高度教養教育・学生支援機構准教授 東北大学高度教養教育・学生支援機構特任教授	宮本 友弘 石上 正敏
閉会の辞	東北大学副学長	山口 昌弘

入試制度が変わるとき

目 次

第 30 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨	1
開会の辞	3
第Ⅰ部 基調講演	
基調講演者紹介	5
基調講演 1 : 大学共通第 1 次学力試験の導入とその前後 —何が期待され何が危惧されたのか— 筑波大学アドミッションセンター教授 大谷 奨 氏	7
資料	16
基調講演 2 : 大学入試センター試験の光と影 —「平成」は「ポスト昭和」を超えたのか?— 東北大学高度教養教育・学生支援機構教授 倉元 直樹 氏	23
資料	35
第Ⅱ部 現状報告	
現状報告者紹介	43
現状報告 1 : 地方公立高校における整理と構え —入試制度変更への対応の成果と課題— 鹿児島県教育庁高校教育課指導主事 渡辺 豊隆 氏	46
資料	51
現状報告 2 : 入試制度の変更と現場で思うこと —今までとこれからを考える— 山形県立米沢興譲館高等学校教諭	

	廣瀬 辰平 氏	61
資料		67
現状報告 3 : 高等学校の現状と、今、大学に求めること	東京都立八王子東高等学校校長	
	宮本 久也 氏	73
資料		78
第Ⅲ部 討 議	ーパネルディスカッションー	81
閉会の辞		99
講 評		
講評 1 : 改革の本質は何か		
	青森県立青森東高等学校 三浦 美香代 教諭	101
講評 2 : 思考力を育てるためには		
	岩手県立宮古高等学校 久保 朱美 教諭	105
講評 3 : 令和の教育に携わる者としての構えとは		
	宮城県宮城野高等学校 伊藤 雄治 教諭	109
講評 4 : 大学入試改革に思うこと		
	秋田県立横手清陵学院高等学校 照井 晴美 教諭	112
講評 5 : 何故いま入試制度改革なのか		
	山形県立酒田西高等学校 寺崎 英之 教諭	116
講評 6 : 入試制度改革の理念を踏まえた受験指導とは		
	福島県立須賀川桐陽高等学校 佐藤 章 教諭	119
アンケート・参加者統計		
アンケート集計結果		123
アンケート自由記述		124
参加者統計		146

第 30 回東北大学高等教育フォーラム企画主旨



平成 26 (2014) 年 12 月に公表された中教審高大接続答申において入試改革が提唱され、新しい入試制度に至る工程表が示された。その工程表にしたがい、現在、大学や高校では新制度に向けての準備が進められている。2021 年度に大学入学を志望する受験生が新制度における初年度の入試を受験することになる。その生徒はすでに高校に入学し、さらに 1 年が過ぎようとしている。入学志願者の準備に大きな影響を及ぼす変更については、2 年程度前までには予告・公表する努力義務が大学に課せられている。しかし、その刻限が過ぎようとしている現在、新制度の詳細については詳らかになっていない事項も多い。

過去にも大きな大学入試制度の改変がなされてきた。戦前の旧制高校の入試制度は終戦に至るまで 7 回の改定が行われた。入試制度に対する不満が噴出し、そのつど対応策を繰り返した結果とされる。戦後は共通試験に限

っても、進学適性検査、能研テスト、共通 1 次、センター試験と繰り返し導入、改廃が行われてきた。センター試験に代わる大学入学共通テストの導入は、それらに匹敵する大きな時代の転換点となる。

受験する側、入試を実施する側の双方にとって、制度変更は大きな不安要因とリスク要因として作用する。大学入試制度が大きく変わるとき、高校や大学の現場では果たして何が起こるのだろうか。進路指導を担う高校関係者にとっては、それまでの経験の蓄積だけでは新しい状況に十分対応できなくなるため、新たな対策が求められる。試験を実施する側は、時として大きな入試ミスリスクを抱えることになる。新制度導入まで 2 年を切った現在、2021 年度入試に向けて高校や大学の現場が考え、備えておくべき事柄は何か。確実な対応策を見出すことは難しいが、少なくとも、我々には過去の経験という貴重な財産が

ある。

今回、わが国の高校と大学入試の歴史に詳しい筑波大学アドミッションセンター大谷奨教授を基調講演者としてお招きした。主として共通1次導入の経緯に関する講演を予定している。主催者側からは倉元直樹教授が登壇し、主にセンター試験以後の大学入試制度変更とその影響について語る。高等学校からは、特に大きな影響を受けると予想される地方の高校の進路指導担当者2名に加え、改革の経緯をよく知る全国高等学校長協会前会長の宮本久也東京都立八王子東高等学校校長に現状報告をお願いした。以上の講演と報告を受け、フロアからの意見を交えて討論を行い、高校と大学が直面する課題と今後の展望を描くことを試みる。

高等学校および大学の先生方、関係する方々の多くの参加と忌憚なき活発な議論を期待している。

本報告書は、フォーラムの録音記録に修正を加えた原稿、「招待参加者」としてフォーラムに参加し、フロアの立場からフォーラムに対してお寄せいただいた講評、およびアンケート・参加者統計から成る。招待参加者は、東北地方6県の高等学校進路指導研究会進学指導部会等を通じ、各県1名ずつ選ばれた方々である。

本報告書は、録音テープから起こした原稿に対し、フロアからの発言を除き、発言者が校正を加え、最終的に編集責任者が表現・体裁の統一・修正を加えたものである。招待参加者の原稿の編集についても、体裁統一と誤字脱字の修正のみにとどめ、極力臨場感のある会場の雰囲気やそこに参加された方々が感じられたこと重視することにした。

尚、編集過程で生じた不具合に関しては、全て編集者の責任である。

本フォーラムの開催・運営にあたっては大変多くの方にご協力をいただいた。心より御礼を申し上げたい。

(編集担当：

東北大学高度教養教育・学生支援機構
高等教育開発部門入試開発室
教授 石井 光夫・教授 倉元 直樹・
准教授 宮本 友弘・助教 泉 毅)

開 会 の 辞

東北大学理事・副学長

滝澤 博胤

庄司強特任教授(司会)：

本日はお忙しい中、多数の皆様のご出席を頂き、誠にありがとうございます。予定の時刻となりましたので、「第30回東北大学高等教育フォーラム 入試制度が変わるとき」を開始いたします。私は、本日の全体進行を担当いたします東北大学入試センターの庄司と申します。よろしくお願いいたします。

初めに、主催者を代表し、東北大学理事・副学長、滝澤博胤よりご挨拶を申し上げます。

滝澤博胤理事：

ただいまご紹介頂きました東北大学の滝澤と申します。本日は、本学高等教育フォーラム、遠方より多数の皆様方にお集まり頂きまして、誠にありがとうございます。

本来ですと、本学の大野英男総長がここで皆様方にご挨拶申し上げる予定でございましたが、本日急務が入り、ここに来られないとのことで、私の方から開会に当たりまして一言ご挨拶を申し上げます。

この高等教育フォーラム、今回第30回目でございます。本フォーラムはこれまで年2回、春と秋に開催しており、特に春の部では、入試関係、あるいは高校と大学の関係に視点を当てて討論を行ってまいりました。4年前の第22回フォーラムでは「大学入試改革にどう向き合うか—中教審高大接続答申を受けて—」というタイトルで、本格的に始まりました高大接続改革を話題として取り上げました。それを皮切りに、翌第24回では共通試験、第26回では個別大学における入試改革、そして昨年の第28回では主体性の評価を取り上げ、皆様方と高大接続改革を巡る議論を共有させて頂いた次第です。

制度入試の導入がいよいよ秒読み段階に入



った今回におきましては、高大接続改革シリーズの第5弾といたしまして、「入試制度が変わるとき」というテーマを設定いたしました。大学入試制度が大きく変わるときに高校や大学の現場では、それまでの経験の蓄積だけでは新たな状況に十分対応できなくなる、という不安に往々にして陥りがちでございます。特に新制度導入まで2年を切った現時点において、高校や大学の現場が備えておくべき事柄を展望することは、受験生の心配を少しでも軽減するために極めて重要である、と考えている次第です。

入学志願者の準備に大きな影響を及ぼす変更については、2年前予告ということが努力義務として課せられているところでございます。本学におきましても、昨年12月に英語認定試験、それから新共通テストにおける記述式問題の活用、さらに調査書等の扱いに関しまして、その基本方針を公表いたしました。現在、それらの詳細についての公表に向けて準備を進めているところでございます。しかしながら、現時点でまた新制度の詳細について、つまびらかになっていない部分が多くあり、対応に苦慮しているところでもございます。本学のみならず、各大学が適切な意思決定をすること、またそれによって高校の不安が解消されること、そして何よりも受験者が守られること、それらに対し

て本フォーラムの議論が一助になればと切に願う次第です。

本日、基調講演としてご登壇頂きます筑波大学アドミッションセンター長の太谷奨先生は、我が国の高校と大学入試の歴史研究の第一人者と伺っております。今般の高大接続改革に匹敵する大きな入試制度改革であった共通一次学力試験導入の経緯に関する講演をお願いしております。

2人目の基調講演は、本学の高度教養教育・学生支援機構の倉元直樹教授が登壇し、センター試験以後の大学入試制度変更、その影響についてご講演を頂きます。

続きまして、3名の高等学校の先生方に現状報告をお願いしております。鹿児島県立大島高等学校、現在は鹿児島県教育庁高校教育課指導主事に異動された、渡辺豊隆先生、山形県立米沢興譲館高等学校の廣瀬辰平先生には、今回の改革で特に大きな影響を受けると予想される地方の高校の現状についてご報告を頂く予定でございます。また、3人目の東京都立八王子東高等学校校長、宮本久也先生には、全国高等学校長協会前会長であり、この改革の経緯を俯瞰できる立場からのご報告を頂戴する予定でございます。

最後になりましたが、今回 400 名近くの高校、大学の先生方をお迎えできましたこと、大変嬉しく思っております。今日は夕方5時まで、長時間に渡りますけれども、活発な議論を通じ、実りある会合となることを願ひまして、開会に当たっての挨拶とさせていただきます。私自身も今日大変楽しみに勉強させて頂くつもりでございますので、皆さんと共に今日の議論を楽しみたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(拍手)

庄司強特任教授(司会)：

ありがとうございました。

私から2点お知らせいたします。本日は、この後2名の先生から基調講演をして頂き、その後3名の先生より高校現場の現状報告をして頂きます。その後、5人の先生方にご登壇頂き、基調交換、現状報告を踏まえてご討議を頂きます。なお、基調講演、現状報告でお話しして頂きます先生方の詳しいプロフィールにつきましては、配付資料に同封しておりますので、そちらをご覧ください。また、間に2回休憩を挟みます。1回目は基調講演の後に10分程度、2回目は現状報告終了後に20分程度の2回を予定しています。

次に、お願いです。本日の配付資料には、質問票、アンケート用紙が同封されています。基調講演、現状報告についてのご質問やご意見は、質問用紙にご記入の上、2回目の休憩時間に係の者にお渡しください。討議において反映させて頂きます。また、アンケート用紙については、受付に回収箱を設置しておりますので、お帰りの際にご提出して頂ければ幸いです。なお、今年も本フォーラムの内容等を記載した報告書を後ほどご出席の皆様にお送りすることとしております。皆様のご協力を頂き、本日は有意義な会となりますよう務めさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、これより基調講演1となります。「共通第1次学力試験の導入とその前後一何が期待され何が危惧されたのかー」筑波大学教授太谷奨先生、よろしくお願いいたします。

第 I 部 基調講演

基調講演者紹介

基調講演者 1

大谷 奨（おおたに すすむ）氏

1963 年北海道生まれ

〔教員歴〕

大阪女子短期大学教職課程 助教授（7 年間）

摂南大学国際言語文化学部学部 助教授（5. 5 年間）

旭川医科大学入学センター 助教授（2. 5 年間）

筑波大学アドミッションセンター 教授（13 年間）

〔主な研究歴〕

専門は教育制度学，教育制度史（高校制度，大学制度，入試制度の研究）

〔主な著書、研究業績〕

単著『戦前北海道における中等教育制度整備政策の研究』学文社 2014

共著『現代教育改革と教育経営』東信堂 2018

共著『学校教育の戦後 70 年史』小学館 2016

共著『大学入試の多様化と進路選択・進路指導』東北大学出版会 2013

〔学会活動等〕

日本教育制度学会理事（7 年間）

つくば市教育特区学校審議会会長（5 年間）

基調講演者 2

倉元 直樹（くらもと なおき）氏

1961 年北海道生まれ

〔教員歴〕

大学入試センター研究開発部 助手	(1990 年 12 月 ～ 1999 年 3 月)
東北大学アドミッションセンター 助教授	(1999 年 4 月 ～ 2004 年 3 月)
東北大学高等教育開発推進センター 准教授	(2004 年 4 月 ～ 2014 年 3 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授	(2014 年 4 月 ～ 2015 年 9 月)
東北大学高度教養教育・学生支援機構 教授	(2015 年 10 月 ～ 現在に至る)

〔主な研究歴〕

専門は教育心理学（教育測定論，大学入試）

〔主な著書，研究業績〕

倉元直樹 (2018). 大学入試の諸原則から見た東北大学の入試改革，大学入試研究ジャーナル，No.28，119-125.

宮本友弘・倉元直樹 (2017). 国立大学における個別学力試験の解答形式の分類，日本テスト学会誌，No.13，69-84.

倉元直樹 (2017). 大学入試制度改革の論理——大学入試センター試験はなぜ廃止の危機に至ったのか——，東北大学高度教養教育・学生支援機構編，「大学入試における共通試験の役割」，高等教育ライブラリ 12，東北大学出版会，47-82.

Kuramoto, N. & Koizumi, R. (2016). Current issues in large-scale educational assessment in Japan: focus on national assessment of academic ability and university entrance examinations. *Assessment in Education: Principles, Policy & Practice*, in press.

倉元直樹 (2014). 大学入試制度の変更は何をもたらしたのか？——昭和 62 年度改革の事例——，大学入試研究ジャーナル，No.24，81-89.

日本テスト学会編 (2007). テスト・スタンダード——日本のテストの将来に向けて——，金子書房（共同執筆）

〔学会活動等〕

日本テスト学会，日本教育心理学会等
日本テスト学会理事（2005 年より）

〔その他の特記事項〕

全国大学入学者選抜研究連絡協議会企画委員会委員（2010 年 5 月より [継続中]）
日本行動計量学会 林知己夫賞（優秀賞）受賞（第 27 号）（2007 年）
日本教育心理学会 城戸奨励賞受賞（第 37 号）（1995 年）

基調講演 1：大学共通第 1 次学力試験の導入とその前後 —何が期待され何が危惧されたのか—

筑波大学アドミッションセンター教授

大谷 奨 氏

〔講師紹介〕

庄司強特任教授(司会)：

それでは、これより基調講演 1 となります。

「共通第 1 次学力試験の導入とその前後—何が期待され何が危惧されたのか—」，筑波大学教授 大谷奨先生，よろしくお願いいたします。

(拍手)

大谷奨教授：

皆様，こんにちは。筑波大学アドミッションセンターの大谷と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私に与えられましたのは，1979 年 1 月に開催された共通 1 次の導入前後についての話をということでした。

この話をいただいたときに，真っ先に頭に浮かんだ漫画がありまして，それは 1970 年の「がんばれ!! タブチくん!!」の第 3 巻で，私は高校 1 年生のときに見たわけです。このときはいわゆる一般社会ではコンピューターを使ったテストが行われるのだという点がすごくクローズアップされて，いしいひさいちのこういうギャグ漫画を見て，どんなものになるのかなと考えたことがありました。ある意味，作者自身の期待と危惧が反映されているかなと思うのですけれども，私はこのコマにある昭和 57 年度の入試を受験したものですから，ちょうど 4 回目の共通 1 次を受験した経験者という形にもなります。

どうしても受験の話を考えるときに，自分の経験をベースにしてしまうというのは，実は高校の先生もそうでしょうし，大学教員もそういう傾向にあるのですけれども，もう昔のこと



なので，少しきちんと調べ直して，今回お話しできればと思っております。

共通 1 次導入前と導入後につきまして，大きく分けてお話をさせていただきたいと思うのですけれども，導入して間もなく，臨教審が発足して，共通 1 次からセンターへの動きというのが割と早目に出てくる分もありますので，今回の発表は，導入前の話が大きめの話になるかなと思います。

能研テストから共通 1 次試験に移行していくという形になるわけですが，当初狙っていたのは，共通試験を行うことで高校から出てくる調査書の格差を処理してしまっただけで，できればそこでもう学力を見るのは終わりにしてしまっただけで，後は 2 次試験で個性とか，適性を見ましようというあたりから始まってきたのですが，途中で話が変わっていったところを見たいと思います。

そこに一期，二期校制の話も加わり，いわゆる一発勝負という形になってしまい，当初の期待から外れ，既に開始前にして失望という状態で，実際に第 1 回目がスタートするということまでお話できればと思います。

私は不勉強で、ご承知の先生方もたくさんいらっしゃると思うのですが、この共通1次導入に際して、一番大きなポイントの一つだなどと思いながら作業していましたのは、大学入試センターが発足するものですから、国立学校設置法という法律を変えなければならない、ということなので、結果的に共通1次がどういう入試なのか、どうあるべきなのかが、国会でかなり掘り下げて論議されました。我々の代表が話し合っているということですので、言ってみると共通1次というのは擬制的であれ、国民的な議論、あるいは国民的な合意の中からスタートしたということも確認していきたいと思います。

あとは、実施時期の変更が高校からの強い要望で実現したというあたり、共通1次導入前の話になります。導入後につきましては、2次試験での工夫という話、それからその挫折という形で話を進めていきたいと思っております。

よく知られていますように、共通1次の前に進学適正検査、1954年か55年ぐらいまで行われたものと、それから能研テストというものが2回試みられて、いずれも短命に終わっております。皆様の手元に資料があるかと思うのですが、ここに69と書いてあるかと思うのですが、68年度の間違いですので、ご訂正をお願いします。大変申しわけございません。能研テストは1963年度から1968年度にかけて行われたと。

研究者から指摘されているのは、例えば能研テストのスタートというのは、中教審で大学入学試験についての中間報告が出たら、すぐに発足しているという非常に早いスピードで、もっと言うと早過ぎる、悪く言うと非常に拙速な形でスタートしてしまったというのが、能研テストがうまくいかなかった原因だということは、よく指摘されていることであります。この能研テストが廃止された直後から、中教審で大学入試の合同小委員会であるとか、あるいはその上部にある第26特別委員会あたりで大学入試に関する論議が進んでおります。

スライドは公文書図書館などに残っているものから取り上げてきたやつなのですが、例えば高等学校の調査書を選抜の基礎資料とする。そのため、各学校間の評価水準の格差を補正するための方法も考える必要があると。そのためには、広域的な共通テストの利用も検討すべきであろう。大学側が特に必要とする場合には特定の能力テスト、論文テスト、または面接の結果を総合的な判定の資料とすることも差し支えないということが謳われております。同様にして、その上部機関である26特別委員会でも大体似たようなことが言われております。

ここで一つ目を引くのが、ここで論議されている共通テストというものが、各高校が作成する調査書の補正に使えないかと考えていることです。つまり、ここでの論議としては、入学者選抜は高校の調査書とその共通テストをメインとして使い、大学の個別検査を補助的に使っても良いというところからスタートしているというところであります。これが四六答申にも反映されるのですが、既に1970年から文部科学省が設置した大学入試改善会議がこの共通テストについて言及して、1972年には国大協が全国共通第1次試験に関するまとめというものを行っております。

例えば、これが出たときの石川県の新聞であります北國新聞には、こういう形で紹介されています。これについては資料に載せておりませんので、この場でご覧いただければと思うのですが、社説としてこの改善会議の改善案というのは、特徴としては共通テストを課そうとしていることであると。その校長会側から共通テストを行ったらいという提案は、広域的なテストの結果によって、内申書の学力格差を是正するという中教審と同じような発想ですね。一方、国大協の場合は、この提案に対しては、個々の大学の学力テストに先立つ第1次テストとして位置づけているという風な、その第2次学力テストの有無というのは、大学当局の選択に任せているという論評が載せられております。

中間報告を経て最終報告が、その後 1971 年に出るのですけれども、ここでも共通テストの実施というのが最終報告で出ました。これもやはり対応する社説が出ていまして、学力共通テストを実施する、調査書を重視する、各大学独自の第 2 次テストをするという最終報告は支持されてよいと。こういうきめ細かい評価とすることで、受験生を一発勝負で振り落とすという弊害が是正されていく可能性がある。比較的好意的な論評を行っています。

これは中教審から改善会議、そして国大協へ論議の場が移っていきます。次の約 1 年後の国大協の第 1 次試験に関するまとめというのが出されるわけですが、これについて北國新聞の論評は「理念なき技術の改革」と述べ、一転して余り肯定的な評価はしないような社説になっています。国大協の具体素案には、内申書の問題は別途に考えるとして空白にしてあるということで、これはもう技術論になってしまっているということ。それから、共通 1 次のテストを 12 月または 1 月に実施して、試験の成績については公表しないという、その構想に反対する。なぜなら、こういう理由があるからという話をしております。

このあたりから内申書と共通テストと適性を見る 2 次試験というのが、国大協の議論になるにつれて、内申書の問題が、調査書の問題というのが、だんだん議論から抜け落ちていく形になります。

国大協に話の舞台が移っていくと、今度は 1 期、二期校制の廃止と共通 1 次の導入がくっつくという段階になってきます。まず、1974 年 4 月に中間報告書が出るのですけれども、これについて、今度は、北國新聞社説は国大協の共通テストに望むという形で、中間報告は入試センターを創設するということを言っている。これが大学入試センターにつながっていくという形ですね。今まで共通テストというのは成功しなかったんだけど、結局それは大学も高校もどういうふうになんかそれに対応するかという対応観が

なかったからであると。今度はしっかりやってほしいものだという形で、再び少し期待する論調なんですけれども、大学入試は受験生のためにあるのであって、大学人自身が主導権を持つのではないという基調をはっきり打ち出すべきであろうという釘も刺しております。

これに並行しながら国会でも論議が進んでいます。例えば 1974 年の内藤誉三郎の質問に対する奥野誠亮の対応というので、内藤からの質問で、もし共通テストができるとすると、そして標準学力テストをおやりになるなら、私はそれ一本でやってほしいと思うと。それで、2 倍、3 倍まで選抜した後、それはもう内申書とか、作文、または小論文とか面接をやったらいいいという質問をしたのに対して、文部大臣は、誠にごもっともな意見だと思うと。詳しい学科試験をもう一遍やるのでは、統一学力テストをやる意味がないと思いますと。同じようなことを二度やるという愚は犯さないようにしていかなければならないというので、共通テストの後で行う大学の 2 次テストというのは、同じ学力試験であってはだめだという認識で、国会の論議が進んでいたというのがわかるわけです。

奥田誠亮の次の永井文部大臣も同様に、また共通テストからくる画一性も出てきますから、やはり 2 次テストというものをやりましてと、それぞれの学校で小論文をやるし、将来は面接テストというものをやればよいと思うというので、やはり共通テストで学力を見て、2 次は小論文とか面接というもので行われるのが望ましいということを言っています。それから、結局は昭和 54 年 1 月にずれ込むわけですが、大体このあたりから実施したいという展望を述べているということになります。

ただ、これとはもともと別の話であった、1 期、2 期校制の廃止が、この段階で国大協の方からも出てくるし、それから入試改善会議もそれを支持するという事態になりまして、ここで共通 1 次の発足とともに、1 期、2 期校制をやめて、全部一緒くたにするという話がこの点でまとま

ります。

ですので、よく共通1次は一発勝負という形を言いますけれども、一発勝負という批判は、少なくともこの段階ではまだ出ていなくて、むしろそれ以前は、従来が、学力試験一発勝負であったのに対して、今度は調査書と1次試験と2次試験といったようなきめの細かい評価で行うから、一発勝負でなくなるはずだという前提だったのですけれども、内申書の話は、余り国大協はしなくなると。それから、この後言及するように、だんだん2次テストで学力試験をしなきゃだめなのではないかというふうに進み、そして、1期、2期校制がなくなるということになって、別な意味での一発勝負という批判を浴びる形になるわけです。

ですので、この一本化の実施について、高校側の反発は非常に強かったと。それに対して、推進派の国大協は、大学選択が慎重になって、第1志望の倍率が低下するから、むやみな競争が行われなくなるからという形で説得した。結局、共通1次テストをやるということと、それから内申書重視と絡ませての実施ならと学校が折れたということですから、高校側が折れたのは、2次テストは適正を見るのでしょうか。それから、自分たちが出す内申書を重視してくれるんでしょう。だったら、一本化に応じましょと、応じざるを得ないんだという話だったと理解できるわけです。

次のフェーズが、この大学入試センターが設置されるまでであります。1976年に入試改善調査委員会の報告書を国大協が出しました。それについては、また北國新聞が結構否定的でありまして、2次テストのあり方の提案をこの報告で行ったと。出題に当たっては、共通1次テストで課せられていない科目に限ること。同一科目の出題に当たっては、記述力、考察力、表現力などをテストする論文形式にするといった一応2次試験のあり方についての報告があったんだけど、しかし学力テストはしても構わないという例外がここから出てくる。しかも歯止めには

はないと。各大学にそうしてくれと要望するという表現にとどまっていると。したがって、新しい2次テストの形を期待していた高校側、受験生については非常に失望の多い提案だという批判をしています。

同じように、山梨日日新聞も似たような時間、日付ですけれども、メリットについて国大協の言い分を聞くと、こういうことになる。ただ、国大協の入試方法自体、改善方法自体にもいろんな問題があつて、足切りに使われるかもしれない。それから、重複して受験生の負担増にならないか心配だということなので、2次試験では論文とか、面接とか、実技といったような適宜な組み合わせが望ましいのだという論評をしています。

結局、1979年の入試から共通1次を行うということ。そして、1期、2期校制もこの時点で廃止すると。公立大学もそれに参加するということが決まって、次の段階として大学入試センターの設置が1977年5月に行われるわけです。

出だしでも申し上げましたように、国立学校設置法を改正するという作業を、この大学入試センターの設置には伴いますので、第80回国会ですね、1977年春に行われた国会では、国立学校設置法の改正が議題になります。本会議から各衆院、参院の文教委員会に降ろすわけですが、3月4日から3月23日にかけてかなり徹底した論議が行われております。その最終に近くなりますと、国立大学設置法を本委員会では審議してきたけれども、実質的に本委員会において問題となったのは、大学入試センターだけであると言っても過言ではないというぐらい、大学入試センター、ひいては共通1次試験のあり方について、かなり詰めた論議が行われました。さらに、その文教委員会の下部組織として、入試問題に関する小委員会で、さらに集中的な議論が行われています。また、参院の文教委員会でも同じように、非常に熱心な論議が行われました。

この辺りで、いつやるかということ、大体12月

下旬ごろにやるという大まかなスケジュールがここで明らかにされております。

このようにとても熱心に、大学入試が非常に激化している、受験戦争と言われているぐらい激しいと、それを改善するために何とかしなきゃならないというのは、政党を問わず、それからこの法案を提出した文部省側に限らず、思いとしてはこの厳しい受験競争を何とかしなきゃならないという前提が共有されているということが、論議を見るとよくわかるのです。このように国民の代表である国会議員による詳しい検討が行われたということは、我々としては押さえておきたいと思うわけであります。

ただ、その一方、2次試験での学力試験の問題、当初は共通1次で学力を見るのだから、2次ではそういう学力は原則見ないで、適性とか興味とかを小論文とか面接で見ようという原則に対して、先ほどの国大協のように、共通1次で課さないものについては見てもいいみたいな話になってきたのを、結局国会の先ほどの議論の中でも追認するような形で、例えば1次試験をもう1点同じようなものを重ねるのは全く無意味だけれども、自然科学系統の大学に学科試験を全部やめると言い切れるかどうかという意見が議員側からも出てきた。文部省の回答としても、工学部であれば数Ⅱ、数Ⅲといったような共通1次で課さないものをやるというのは、やってもいいんじゃないだろうかという答弁になってきて、2次で学力試験をする余地が徐々に拡大していくというのが読み取れるわけであります。

最後が、共通1次試験、1979年1月13日、14日に行われる共通1次試験までの流れということですが、1年前予告になってしまうのですね、これ。各国立大学が共通1次等に合わせた実施要項を発表するのが1977年7月1日から30日にかけてです。実際、それで各国立大学がどのような形で2次試験を課すのかというのが発表されるわけですが、それに対して山梨日日新聞社説はかなり辛辣な批評をしています。

1つは、高校側とか世間が恐れ、なるべくやらないでほしいと思っていた、2段階選抜といういわゆる足切りを実施する国立大学が非常に多いというのがわかった。これは非常に問題であると。

それから、山梨県には山梨大学と都留文科大学があるのですけれども、その2つの大学を見ただけでも、各大学の科目数であるとか、2次募集をやるかやらないとか、推薦入試をやるかやらないかといったように選抜方法は非常に多様であって、全国的に考えると、受験生には非常に煩雑感を与えるという評価をしています。確かに1期校と2期校といったような言われなき差別感はなくなる。そのかわり、国立大受験志願数は1回に減り、しかも、共通1次と2次という二重苦を強いられ、高校3年2学期の文化祭行事等にも圧迫感が加わるであろうという負担増を非常に心配するような社説を流しております。

まとめのところでもう一度お話ししますが、理想としてはというところから、結局共通1次試験をどういうふうにするかという中で、内申書、調査書の問題が後退していき、それから2次試験ではやはり見るべき学力は見たいという形で学力試験を課すところが増えた、減らなかった、あるいは面接とか小論文を導入するところが増えなかったということになっていくのですけれども、1点強調していいのかなというのは、では全部が全部世間一般の受け止めとか、あるいは高校側の意向を途中でバサッと切り捨てる形で共通1次が導入されたのかというと、それだけではないのではないか。それが、この試験の期間の日程をずらすということであります。当初は1978年12月23、24日というので、年末に行うということを実施要項で公表までしていたのですが、実施期日については発表直後から高校側の2学期の授業や学校行事を圧迫する。受験生が負う入試の重圧が長期化するなどの不満が続出したために、日程を次の年の1月に変更しております。

これには国会も関与してしまっていて、1977年11

月 16 日に文教委員会が大学入試改善に関する決議を行っております。実際にできなかったものもあるわけなのですけれども、いの一番に共通 1 次学力試験の実施期日については、なるべく遅い時期にずらしてもらうことをすべきだと言ってます。それから、ほかにも足切りは避けるべきだ、あるいは 2 次試験の学力の科目数を最小限にすべきだといういろんな提言を行って、最後に国民各層の理解を求めることが非常に重要だという決議を行ってしまして、先ほど国民的な議論だと話をしましたけれども、その勢いというのは、まだこの時点でも続いていることが言えるかなと思います。

その結果、これはまた国立公文書館にあった昭和 54 年度以降における大学入学者選抜実施要項の一部改正についての原本なんですけれども、ここにありますように、当初は昭和 53 年 12 月 23 日と 24 日にやると要綱では示したけれども、それを改正して、昭和 54 年 1 月 13 日から 14 日に改正しますというお達しが出て、第 1 回目の共通 1 次は年明けの中旬に行うということが決まるわけです。

それと並行して、例えばもう決まっちゃった以上はどうしようもないのでという形で、国大協の話が進むに連れて、批判的になっていた各新聞も、非常に実用的な記事内容に変わっていった、コンピューター相手だから、まず誤記入を防げといったような記事が出てきたりします。直前になると、こういうシンポジウムが行われています。新聞の記事を抜き書きしたわけなので何とも言いようがないのですけれども、どの大学も好き勝手なことしか言っていないという感じがします。ただ、後からお話するように、2 番目の宮教というのは宮城教育大学ですけれども、宮教はこの共通 1 次はかなり前向きに捉えていて、学力評価は共通 1 次だけで十分だと。2 次は総合力、表現力の特性を見ると言ってます。しかし、おしなべて自分たちの都合を言っているように見えます。したがって、高校側からは、そのシンポジウムでは、大学は高校現場の意見

を聞かずに入試を進め過ぎるという批判が出てます。直前ではありますけれども、高校側の受けとめ方は、このあたりに端的にあらわれているのかなと思います。

いよいよ直前になると共通 1 次がうまくいくかどうか、あるいは共通 1 次の導入によって大学入試はどうなるかを占うような記事が出てくるようになります。山梨日日新聞は、直前の秋にどうなるかという、予備校関係者が言うには、大学の序列化が強まるのは必至だと、これは見事に当たるということになりますし、多くの人はそれを想像していたわけですから、こういう予測、危惧が示された。それから、5 年しか持たないのではないかと、そういう説がささやかれていて、それに対してそんなことはないかと大学入試センターは長い目で見てくれと火消しに走るコメントも紹介されています。

実際に 1979 年 1 月 13 日、14 日に最初の共通 1 次学力試験が行われます。新聞は、受けてみての感想として受験生の声とか、あるいは高校の声や声を挙げていますので、ちょっと見てみますと、終わった人たちに対してインタビューしたら、共通 1 次は 4、5 年やって終わりになるのではないですかとか、いずれ廃止されるのではないのでしょうかといったような、そんなに長持ちしないのではないだろうかとという予測が示されました。これは逆に見事に外れると。共通 1 次自体はセンターに代わっていくのですが、この形式の国立大学入試の形態というのは、現在まで続いているということになるので、これは逆に外れた予測といえるかなと思います。

あとは、2 次試験がどうなるか非常に気にしているということでもあります。高校からは相変わらず一発勝負になるということ、それから今までの進路指導の実績をもう一度組みかえ直さなければならぬというのが、少し大変だという声も聞かれるわけでもあります。

私も余り記憶が定かではないのですが、共通 1 次試験の願書を出す時点で、一度志望大学を出さなきゃならなかった。そして試験が終わっ

た後自己採点してみて、最終的な受験校を決めるという、とりあえず1回宣言して、その後で最終的に確定させるという手続になっていたようです。そういうふうに、共通1次が終わった後で自己採点した結果での願書が2月ごろにそろそろわけですけれども、それを見て、最終的な受験者動向がわかる。で、どうなったかという、2次出願で目立ったのは、受験生は非常に慎重で現実的な選択をしたと。具体的には次のスライドでお見せするのですが、余り高望みをしないとか、やみくもに突っ込んでいかないと。チャンスは1回しかないの、慎重な選択をするようになった。それは、悪いことではないかもしれない。しかし一方これは、いわゆる事前選抜を自分でやってしまうことになるという側面もありますよということを言っています。

より具体的には、要するに旧1期校の人气が、倍率が下がって、2期校の倍率がそれと同じになって、結局均されたということです。揺り戻し現象とは言っているのですが、そういった形です。

先ほど日日新聞が、序列化が進むだろうと予測していましたが、やはり序列化が非常にはつきりするという傾向が出ました。

ただ、ちょっと話がずれるかもしれませんが、このように実は偏差値輪切りというのは、1980年代の高校では既に行われていたことであります。それが大学にも来るということになるので、偏差値で切るのがいいのか悪いのか。悪いというのはもちろんなのですが、先ほど見たように、やみくもに憧れのところに突っ込んでいかないと。チャンスを無駄にしてしまうような非現実的な志願をしないという意味では、少し受験の加熱を冷ますという意味も、この偏差値とか、あるいは序列化には側面としてあるんだということも考えてみたいと思っております。

その期待と危惧というものをまとめてみたのがこのあたりということになるのですが、繰り返しになりますけれども、当初は受験競争とか

受験戦争を緩和しなければならないということが前提としてあって、できれば調査書と、それを補正する手段としての共通試験を用いることで、高校教育を正常化したいと。それによって一発勝負ではない丁寧な選抜が行われるだろうという期待があったわけです。ところが、話が進んでいくうちに、2次試験をどうするかというところ、どんどん学力試験に傾いていった。一方で、調査書に関する論議は不在となっていた。2期校制がなくなること、今度は選抜が1回になるという一発勝負化が起こり、高校が思い描いていたものとはかなり違った形で導入される形になったと思います。ただ、実施時期については、高校側の要望が通ったということでもあります。

危惧としての序列化というのは見事に当たったわけですが、一方で過剰な加熱を緩和したという側面も同時に考えながら、その意味を考えなければならないということです。長続きしないのではないかとこの予想があったのですけれども、これは実はすごく長持ちしてしまったというあたりで、外れた危惧になるかなと思います。

あと、5分ほどということですので、共通1次開始後の学力検査については、少しスピードを上げてお話ししなきゃならないかなと思うのですが、では共通1次が始まったことによって、2次試験はどうなったか。小論文とか面接の実施が期待されていたのですが、どうなったかというところ、この形になります。特徴的なのは教育学部、教員養成系とか医学系で小論文が多かった。あるいは、医学系では従来からやっていたのですが、面接が多かったという、少し増えたとは言えるかなと思います。

ただ、文部省にとってはやっぱり不満だったようで、この記事を見ると、内藤文部大臣が、科目数がまだ多過ぎる。もっと面接や論文を取り入れるべきだと指示しているんだけど、一方で取りやめていた学力検査を復活させる大学もあり、入試直後の調査に比べると、面接、小論文

部分に切りかえる大学は予想されたほどには増えなかったという形になっています。学力試験がどうなったかといいますと、実は社会科はものすごい減った、2次試験では減りました。これはちょっと見にくいのですけれども、一橋東京外大、それから東京筑波、東京芸大、新潟、金沢、琉球の一部の学部学科、それから教育学部の社会科教員養成課程は残したのですけれども、ほかは軒並みバサッと切りました。これは、いわゆる原則があったわけで、日本史を共通1次で見たから、もう見ませんという話で、これについては実は減ったんですね。それに対して、理系科目は数Ⅰはやったけれども、ⅡとⅢはやっていないから課します。物理Ⅰはやったかもしれませんが、物理Ⅱはやっていないので課しますという形で、共通1次で課されていない科目という形で、結果的に学力試験が残るという形になってしまいました。

このように期待されていた2次試験の改革が進まなかったうちで一番象徴的なのが、宮城教育大学の事例かなと思います。宮城教育大学は、共通1次で学力を見て、2次試験は例えばダンスをしてもらうとか、あるいは自然科学系の授業を聞いて、その後で試験をするといったような、7つの方法の中で好きな方法を選び、それで入学してくれという7芸入試と言っていたんですけれども、これをやって、非常に最初はユニークだと言っていたのですけれども、あっという間にやめていく。1983年にはもうこれは今年限りでやめますと。

なぜやめるのかというのが載っているのですけれども、2次試験重視というので、挽回可能性が高いというので、共通1次の点数が低い学生が殺到した。その低い点で合格すると、ランクの低い大学と位置づけられ、今度はその前後のレベルしか応募してこない。足切りをしなかったために手間が非常にかかる。当初は1次だけで見られると言っていたのですけれども、1次だけで基礎学力を吟味するのは難しいことがわかった。宮教大だけが孤立してしまった、やめざる

を得ないという非常に残念な結果に終わってしまいうわけです。それについては、元文部大臣だった永井道雄が1984年に、結局そういう2次試験の本来のやり方というのを予想した2次試験のやり方が全然進行しなかったと。結局狭い意味での学力試験だけが、あたかもテストであるかのようなごとき状況を呈しているという総括の仕方をしております。

まとめとしましては、このように、繰り返しくなりますけれども、当初は共通1次を核にしながら、調査書と共通1次、それから適正を見る2次という話で進んでいたはずなのが、共通1次に論議が集中していくという形になっていきました。2次とかでは、例えば記述力とか思考力を見るという、何かどこかで聞いたような言葉が何回か出てくるのですね。それを考えると、正当な学力として入試に入れ難かったわけですね、論述問題、小論文というのがそんなに根づかなかったという、裏返すとそういう思考力とか判断力、表現力というのは、あの段階では正当な学力として入試には位置づけることが難しかったと言えるのではないかと思います。

プラス、今ましてや主体的に学ぶ力を見ろと言っているのですけれども、法律へ位置づけたのだから見ろと言って、スムーズにじゃあ浸透するのかというのは、今までの経緯というのを見ると、ちょっと怪しいのではないかと思います。

もう一つは、宮教大の例に対応されるように、いわば息切れして撤退した経験というのを生かすのか、それとも繰り返してしまうのかという問題が見られるのではないかと思います。

それから、何回かお話ししたように、国会で議論されたということは、国民的な議論だったと。受験競争、激しい受験戦争というのは改善されなければならないといった、前提としての現状認識というのは非常に共有された状況で共通1次の導入が進んだ。では現在共通1次や、センター試験は失敗だったという合意が今日の改革においてどれほどあったのかといったあたりも考

えてみなければならないかなと思っております。

非常に悲観的なことばかり言うわけですが、
でも、最後にこの試験日の問題については、1年
切った段階でも日程変更を实际やってのけたと。
しかも、高校側の強い要望によってという前例
がありますので、これからでもまだ改善できる
点を指摘、あるいは声を上げるという余地は残
っているのではないかと思うわけです。ただそ
の話をするためには、この後で出てくるセンタ
ー試験の話を経る必要があると思いますので、
このあたりで倉元先生にバトンタッチしたいと
思います。どうもご清聴ありがとうございました。

(拍手)

庄司強特任教授(司会)：

大谷先生，ありがとうございました。質問等
につきましては，お手元の質問票をご利用くだ
さい。

資料



筑波大学
University of Tsukuba

第30回東北大学高等教育フォーラム
入試制度が変わるとき
2019年5月15日

共通第1次学力試験の導入とその前後
—何が期待され何が危惧されたのか—

筑波大学アドミッションセンター 大谷 奨
sotani@human.tsukuba.ac.jp

IMAGINE THE FUTURE.



高等教育の改革に関する基本構想試案（中間報告）
中央教育審議会第26特別委員会 1970年1月12日

1-1 「大学入学資格試験の改革の方向」 「大学入学資格試験がわが国の学校教育を
救済する最大の影響にかんがみ、今日は、学校教育の発展で、その本来的目的に
じな試験を卒業した者の学力水準が公平に評価され、選抜に合格することと視野を目標
として短期を学習せしめて、能力・適性に応じた職業教育機関に入学を奨励する
ことを目標として、大学入学資格試験の改革を促す必要がある。その場合、
とくに次のような点について、具体的な検討を進めることが望ましい。

(1) 高等学校の調査書の改善とその選抜の基礎資料としての役割
(2) 試験の形式の改善と試験の基礎資料としての役割

と併用
(3) 選抜制度の改善と進め方の手続を

(国立公文書館)

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次試験導入までの沿革（能研の失敗）

- 1954年11月 中教審「大学入学選考およびこれに関連する事項について」
- 1962年10月 中教審「大学入学試験について（中間報告）」
- 1963年1月 能力開発研究所設立
～1963年度～69年度 能研テスト実施
- 1969年3月 能力開発研究所解散

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次試験導入までの沿革（中教審→改善会議→国大協）

- 1969年12月 中教審大学入試合同小委員会「大学入学選抜制度の改善に関する基本的な考え方について（報告）」
- 1970年1月 中教審第26特別委員会「高等教育の改革に関する基本構想試案（中間報告）」
- 1970年12月 大学入試改善会議中間報告
- 1971年12月 大学入試改善会議最終報告
- 1972年10月 国大協「全国共通第一次試験に関するまとめ」

IMAGINE THE FUTURE.



大学入学選抜制度の改善に関する基本的な考え方について（報告）
中央教育審議会大学入試合同小委員会 1969年12月8日

1. 試験の目的と役割
(1) 大学入学選考、選抜の目的は、大学入学資格試験の改革、選抜の基礎資料を目的とする。
(2) 大学入学資格試験は、大学入学資格試験の改革、選抜の基礎資料を目的とする。
(3) 大学入学資格試験は、大学入学資格試験の改革、選抜の基礎資料を目的とする。
(4) 大学入学資格試験は、大学入学資格試験の改革、選抜の基礎資料を目的とする。

また、大学入学資格試験は、大学入学資格試験の改革、選抜の基礎資料を目的とする。
大学入学資格試験は、大学入学資格試験の改革、選抜の基礎資料を目的とする。
大学入学資格試験は、大学入学資格試験の改革、選抜の基礎資料を目的とする。
大学入学資格試験は、大学入学資格試験の改革、選抜の基礎資料を目的とする。

IMAGINE THE FUTURE.



「論議の段階からの離陸を—大学入試改革諸案を前にして」
（北國新聞社説 1970年12月18日）

- 入試改善案の共通点として、もう一点注目されるのは、全国共通学力テストを課そうとしていることである。
—高校長協会の提案は「広域的なテストの結果で内申書の学力格差を是正する」
—国大協の場合は「個々の大学の学力テストに先だつ第一次テスト」
- こんどの中間報告は全国共通学力テストを多角的選抜方法の中での一貫として位置づけ、第二次学力テストの有無は大学当局の選択に任せている。

IMAGINE THE FUTURE.



「大学入試改革の線は妥当」
(北國新聞社説 1971年12月11日)

- 第一に、共通学力テストを実施すること
- 第二は、調査書(内申書)を重視すること
- 第三は、各大学独自の第二次テストをするということ
- こんどの最終案は支持されてよい。
- 受験者を「一発勝負、でふるい落とすかという選抜主義から発想を変えて、総合的に選抜して行く方向」
- 高校長協会の統一テスト提唱は「主として高校の格差是正をはかるため」
- 入試改善会議の意見は「大学教育に必要な基礎能力の発見」
- 国大協はこの点について「単なる『足切り、テスト』というのではな(い)位置づけを示してほしい」

IMAGINE THE FUTURE.



「高校との対話を活発に—国大協の共通テストに望む」
(北國新聞社説 1974年4月24日)

- 今回の中間報告は、
 - 入試センターの創設
 - 五教科七科目のテスト
 - 試験科目と出願方法
 - コンピューターによる出願から採点、その結果の通知
 - などについて具体案を出している。
- 共通テストの実施は、かならずしも理想的ではないが、現状を少しでも改革してゆくための布石としてならば、そのめざす方向を否定できない。
- 大学進学のための共通テストは二回試みられ、いずれも短期で失敗に終わっている。高校、大学いずれにもはつきりとした対応策がなかったためだ。
- 「大学入試は受験生のためにあるのであって、大学自身が主導権を持つのではない。その基調をはっきりと打ち出すべきであろう。」

IMAGINE THE FUTURE.



「理念なき『技術』の改革—大学入試共通テストの評価」
(北國新聞社説 1972年10月8日)

- 国大協の具体構想には、内申書の問題は別途で考えるとして空白にしてある...この問題をタナ上げにして共通テストを論ずること自体に、『技術あれども理念なし、の改革案だといわざるを得ない。
- 第一次共通テストを十二月または一月ごろに実施し、一次の結果は原則として公表しないとしているが、この構想には反対する。
 - 高校三年間の教育を大学受験のためにさらに短縮
 - 秘密主義は大学の権威主義を物語る

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次実施の見通しと二次試験のあり方
(72・参・予算委員会-14号 1974年3月22日)

- 内藤整三郎君
- 文部大臣が統一学力テストとおっしゃった。私はぜひそれをやっていただきたい。共通学力テストでやりになるなら、私はそれ一本でやってほしいと思う。それで定員の二倍なり三倍なりすくられてもさうか。内申書の力、作文または小論文、それから音楽、体育等は実技が必要ですから、実技等を課せられることも行つたと思う。そして最後は面接でやっていただきたいと思う。もっと主観テストである作文とか小論文、そして面接、そういうものをもっと重視してほしいと思う。
- 国務大臣(奥野誠亮君)
- 御指摘になりました点、統一学力テストをやる意味がないと思います。各大学が責任を持って選考試験を行なったというたてまえはくすさないが、しかし、同じようなことを二度やるという趣はおかさないよう、積極的に注意を払わなきゃならない。

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次試験導入までの沿革(一期二期校制廃止と共通一次)

- 1974年4月 国大協「国立大学入試改善調査研究報告書」(中間報告)
- 1974年6月 国大協、入試時期の一本化を支持する調査結果を了承
- 1974年11月 国立大学共通一次試験予備実験テスト
- 1975年3月 入試改善会議 1978年度入試から1, 2期校制の廃止、共通テストの実施を文相に報告
- 1975年11月 国立大学共通一次試験予備実験テスト

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次実施の見通しと二次試験のあり方
(75・参・予算委員会-10号 1975年3月17日)

- 国務大臣(永井道雄君)
- 共通テストだけにするとまた共通テストからくる画一性というものが出てきますから、やはり二次テストというものを、第二番目のテストをやりまして、それぞれの学校で小論文もやるし、できれば将来は面接テストというふうなものもやることが望ましいということをわれわれは考えております...
- 調査というものが順調に進みますならば、昭和五十二、三年度には実施に入るというところをいま、めどにしているわけでございます。

IMAGINE THE FUTURE.



「受験競争の熱さす、大学側が説得」
(北国新聞解説 1975年3月27日)

- 一本化の実施について高校側の反発は強かった。
 - 受験の一発勝負を招く
 - 費用のかかる私立大に行けない者は、一回きりの国立大入試の失敗で進学が破れる
- これに対して推進派の文部省、国大協は
 - 大学選択は慎重になり...第一志望の倍率は低下し、合格しやすくなる
 - 受験競争の熱さましの効果があり、大学間の格差もなくなる
- 結局「共通一次テストや内申書重視などと絡ませでの実施なら」と高校側が折れた

IMAGINE THE FUTURE.



「共通テスト運用に配慮を」
(山梨日日新聞社説 1976年11月19日)

- メリットについて国大協の言い分を聞くと、
 - とかく問題となっていた難問、奇問がなくなる
 - 第一次試験は高校の一般的学習の達成の程度を評価するもの
 - 二次試験の成績と組み合わせで合否を決めるので「一発勝負、の危険がない
 - 大学の入試に関する負担が軽減されるので、適切な入学者選抜がやれる
- 国立大入試の改善方法自体にもいろいろの問題がある
 - 共通テストが単なる「足切り」に使われる
 - 重複して受験生の負担増にならぬ配慮が必要
 - 例えば「論文」「面接」「実技」などの適宜組み合わせ

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次試験導入までの沿革（大学入試センターの開設）

- 1976年4月 国大協「入試改善調査委員会」報告書
- 1976年10月 国立大学共通一次試験予備実験テスト
- 1976年11月 国大協、1979年度入試から共通一次の実施を決定
- 1976年12月 公大教、共通一次試験参加を表明
- 1977年5月 大学入試センター設置（国立学校設置法改正）
- 1977年7月 最初の共通一次を1978年12月23・24日で行うことを発表（仮）

IMAGINE THE FUTURE.



第80回通常国会における論議

- 大学入試センター設置のための、国立学校設置法改正
 - 衆院文教委員会：3月4日～3月23日
 - 本法案の中で、実質的に本委員会において問題になりましたのは、大学入試センターだけであると言っても過言でないと思います。(1977/3/23衆文教)
 - 衆院文教委員会入試問題に関する小委員会：3月25日～4月22日
 - 参院文教委員会：4月7日～4月21日
- 嶋崎委員「入学試験の時期は十二月のいつごろになりますか。実施時期は。」
- 佐野（文）政府委員「十二月下旬、冬休みの前半ということになると思います。」

(1977/3/14衆文教)

IMAGINE THE FUTURE.



「二次試験の煮詰め不足—国大協、入試改善の重い責任」
(北国新聞社説 1976年4月20日)

- 国大協は...今回の調査（報告）書で...二次テストの「在り方」...の提案を行った。
 - 出題にあたっては共通一次テストに課せられてない科目に限ること
 - 同一科目の出題にあたっては記述力、考察力、表現力などをテストする論文形式にする
 - 負担増にならぬよう出題科目数、出題数を減らす
- しかしながら...いずれも「要望する」の表現にとどまっており...強力な「歯止め」にはほど遠いニュアンス
- 適性判定の新しい二次テストの姿を希望していた高校側、受験生側にとっては失望の多い提案

IMAGINE THE FUTURE.



二次試験のあり方についての変化

- 宮補益君
 - 二次試験について...第一次試験を、もう一遍同じようなものを重ねるのは全く無意味...ただ、ことに自然科学系系の大学の場合に、学科試験を全部やめようまで言い切れるかどうか、これは一つぐらいの項目についてはあるいはその大学の特殊性に応じて許してもいいかもしれません... (1977/3/2衆文教)
- 佐野（文）政府委員
 - 共通一次の場合であれば数学Ⅰの勉強をせよ、しかしわが工学部を受験するのならば数Ⅱなり数Ⅲなりをやってほしいというような形で、その分野の力というものを大学側が求めるというふうな形で評価をされていくものだというふうに思います。(1977/3/14衆文教)

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次試験導入までの沿革（共通一次の開始）

- ・ 1977年7月 各国立大学、入試要項を発表
- ・ 1977年12月 国立大学共通一次試験試行テスト
- ・ 1978年1月 文部省、共通一次の日程を1月13・14日に変更することを通知
- ・ 1978年6月 国公立大学共通一次試験「受験案内」発表
- ・ 1978年9月 共通一次の標準偏差を公表することを発表
- ・ 1978年10月 願書受け付け
- ・ 1979年1月13日、14日 最初の共通第一次学力試験実施

IMAGINE THE FUTURE.



大学入試改善に関する決議 (82-衆-文教-3号1977年11月16日)

共通第一次学力試験を実施するにあたっては、政府当局、大学入試センター及び各大学は次の諸点について協議をもつて対応し、大学入試改善の実を挙げ、高等学校教育ひいてはわが国教育全体の健全な発展に寄与するよう、重ねて強く要請するものである。

- 一、共通第一次学力試験の実施期日については、各方面で種々の意見が出ている。高等学校としてなるべく近い時期に共通第一次学力試験を実施してもらいたいとの希望があり、大学側において入学時期を多少変更させるなどの措置も含めた最善の取組をすべきである。
- 二、一部の大学で行われようとしている二段階選抜は、その実施を避けるべきである。
- 三、各大学が行う第二次の学力検査については、科目数を最小限にすべきである。
- 四、機会を確保するという観点から、更に多くの大学が第二次募集方式を実施するよう努めるべきである。
- 五、共通第一次学力試験への私立大学の参加の実現に向けて、更に積極的に努力すべきである。
- 六、共通第一次学力試験の実施と大学入試制度の改善について、更に国民各層の理解を求め、受験準備の過熱の防止について極力努力すべきである。

IMAGINE THE FUTURE.



「負担増を心配する新入試」 (山梨日日新聞社説 1977年7月31日)

- ・ 国立大学協会の「原則として足切りをしない」方針をよそに、二分の一強が足切りを実施することになっている。
- ・ 山梨県の二大学をみただけでも各大学の（科目数、二次募集や推薦入試の有無といった）選抜方法は多様であり、受験生に繁雑感を与える
- ・ 確かに、一期校と二期校といったいわれなき差別感はなくなくなる。その代わりに国立大受験のチャンスは一回に減り、（一次二次という）二重苦を強いられ、高校三年二学期の文化祭行事等にも圧迫感が加わるであろう。

IMAGINE THE FUTURE.



【表1】
昭和54年度以降における大学入学教養課程実施要綱の一部改正について（改正、通知）（国立公文書館）

事項	改正前	改正後
1. 試験科目	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育
2. 試験科目の選択	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育
3. 試験科目の選択	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育
4. 試験科目の選択	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育
5. 試験科目の選択	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育
6. 試験科目の選択	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育
7. 試験科目の選択	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育
8. 試験科目の選択	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育
9. 試験科目の選択	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育
10. 試験科目の選択	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育	国語、数学、外国語、理科、社会、芸術、体育

昭和54年度以降における大学入学教養課程実施要綱の一部改正について（改正、通知）（国立公文書館）

IMAGINE THE FUTURE.



北國新聞 1977年10月26日

- （実施期日の）発表直後から高校側の「二学期の授業や学校行事を圧迫する」、「受験生が負う入試の重圧を長期化する」などの不満が続出した。

IMAGINE THE FUTURE.



「大学入試を考える」初のシンポジウム (北國新聞 1978年7月3日)

- ・ 東大「受験生が多いので足切りせざるを得ない」
- ・ 一橋「考える力や論理能力は二次の学力試験でみる」
- ・ 宮教「学力評価は共通一次だけで十分。二次は総合力、表現力や特性をみる」
- ・ 名大「理解力や実験への集中力などの特性を面接で見極めたい」
- ・ 広島「ある教科を削ると、それを教える先生の実存価値が下がると高校側が抵抗」（する）
- ・ 高校「大学は高校現場の意見を聞かずに入試を進めすぎる」

IMAGINE THE FUTURE.



「スタートする共通一次」
(山梨日日新聞 1978年9月)

- ・「東大、京大など『全国区型大学』を頂点としたピラミッド型の大学分布図が出来上がる可能性が濃厚」…大学の序列化が強まるのは必至、と予備校関係者は分析する。
(上) 21日
- ・「共通一次五年説」がささやかれている。択一式の共通一次では作れる問題の数に限りがある。五年が限度というわけ。
- ・「即効力がないからといって否定しては改革はできない。五年、十年と長い目で見なければ…」
(下) 23日

IMAGINE THE FUTURE.



「共通一次元年の入試地図―『事前選抜』のかげりはないか」
(北國新聞社説 1979年2月17日)

- ・二次出願で目立った受験生の慎重な現実的選択は必ずしも非難すべきではなかろう。『あこがれ』や『進学強制』で志望校を決めるより、受験生に将来の幸福をもたらす可能性は高い。
- ・しかしながら、その再選択が共通一次の持つ『事前選抜』にひたすら従順な『ヒツジ』であってはならぬ

IMAGINE THE FUTURE.



「データなき入試に苦慮」(県立日川高校・進路指導主事)
(山梨日日新聞 1977年10月14日)

- ・二次試験となると大学、学部、学科毎に極めて多様な形態が採用されている…特に、いわゆる小論文については、その性質上、どうい対症療法的指導は不可能である。付け焼き刃ではない日頃の積み上げの高さ、掘り下げの深さが決め手になるはずである。
- ・受験地獄のまっただなかに教師自身も含めてのめり込み、高校教育本来の役割、特に本校で言えば「文武両道」の教育方針を見誤ってはならないという意味を確認し合っている。

IMAGINE THE FUTURE.



「あこがれから現実志向 実力接近で少数激戦に」
(山梨日日新聞 1979年2月16日)

- ・共通一次出願段階では東大、京大など旧帝大の人氣が根強く、旧二期校の落ち込みが目立った。ところが最終出願では旧帝大の倍率は『軒並みダウン』…代わって旧二期校が浮上し、旧一期校の平均倍率を上回り…『揺り戻し現象』が現れた。
- ・では大学格差はなくなったのか「とんでもない、序列化はむしろはっきりした」…共通一次の点数や偏差値を比べてみれば、大学ごとに差があり、くっきりランク付けされる…一本化によって受験倍率が下がり、少数激戦の様相がくっきり表れたかげで、大学―高校の序列化は一層潜行する気配だ。

IMAGINE THE FUTURE.



「『初の試み』緊張の受験生」
(山梨日日新聞 1979年1月14日)

- 受験生の声
- ・共通一次は四、五年やったら終わりになるのではないのでしょうか。
 - ・共通一次試験についてはしょうがないと考えています。いずれ廃止されるでしょう。ない方がいいですね。
 - ・問題はやさしかった。しかし二次試験で各大学がどこに重点を置くのかわからないので、かえって重荷です。
- 高校教師の声
- ・共通一次試験は高校の教育現場としてはあまり歓迎できるものではありません。受験校を一つに絞らなければならぬ。
 - ・共通一次試験は…未知の部分がありますからね。これまでの大学の評価が変わるかもしれない。これまででしたらこの程度の生徒はこの大学とある程度判断できたんですが、それが壊されます。

IMAGINE THE FUTURE.



「高校入試の暫定的効用」
(小浜逸郎『学校の現象学のために』大和書房 1985 171-2頁)

- ・もし高校進学への機会均等性がこれほどに保証されていず、席がわずかしかなければならぬ、偏差値輪切りなどは必要とならず、それこそ実力勝負の激烈な競争が展開されるはずである。…多くの生徒のための席がゆるさされているからこそ、だれがどこに座るかについての整理が必要になり―みんなが座れるからといってどの席でもよいということには決してならないので―、そのためにこそ偏差値輪切り体制はある。

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次初回の入試結果についての県紙の受け止め

- ・（山梨大学）教育学部は前年度の四・五倍を約二倍上回る受験者があった。これは...①足切りなし②佐賀大教育学部とともに受験の「アナ場」として受験雑誌などに紹介された一など...共通一次テストの影響を受けたためだ。

（山梨日日新聞1979年3月13日）

- ・（金沢大学）教育学部の地元勢の増加、法文学部のダウンは地元高校では「予想通りの結果となった...」と慎重な態度をとっており

（北国新聞1979年3月17日）

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次開始直後の個別学力検査（小論文・面接）

- ・ 小論文
 - － 46大学
 - － 65学部

- ・ 面接
 - － 23大学
 - － 27学部

表 1979年度入試で小論文・面接を行った学部

系統	学部数	
	小論文	面接
人文科学	6	0
法学部	4	1
経済学	7	1
理工学	8	1
農学	5	2
教育学	18	5
医学	14	12
その他	3	5
合計	66	27

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次初回の入試結果についての県紙の受け止め

- ・ 富山の特徴は...地元富山大に集中していること。...昨年まで一次で金沢大をねらった者がことしは慎重を期して、一ランク下の富山大へ回った...。『教育界』としての層の厚さで新入試制度の影響はあまりなく、逆に躍進という結果が表れている。

（北国新聞1979年3月23日）

- ・ （茨城大学では）教育学部が...圧倒的に県内組が多いほかは、いずれも県外組が上回っており、全体の割合も、共通一次に伴い逆転の可能性を期待する声が多かったが、県外組が五一・七と県内組を抑えた。

（いはらき1979年3月16日）

IMAGINE THE FUTURE.



朝日新聞 1979年8月18日

- ・ 科目数がまだ多過ぎるようだ
- ・ もっと面接や論文を取り入れるよう
 - － 大学側を強く指導すべきだ
 - － と事務局に指示した
- ・ 取りやめていた学力検査を復活させる大学もあり、入試直後の本社調査に比べると面接・小論文に切り替える大学は予想されたほどには増えなかった。

IMAGINE THE FUTURE.



期待と危惧

- ・ 期待
 - － 受験競争・競争の緩和
 - ・ 調査書とそれを補正する手段としての共通試験→高校教育の正常化
 - － 一発勝負、ではない（＝丁寧な）選抜
- ・ 実施前までの変容
 - － 二次試験の在り方、調査書に関する論議の不在
 - － 二期制廃止とセットとなることでの「一発勝負、化（＝選抜の一回性）」
 - － 実施時期については高校へ配慮
- ・ 危惧
 - － 一期二期校を括る大学の序列化
 - ・ 過剰な加熱は緩和
 - － 長続きしないのではないか

IMAGINE THE FUTURE.



共通一次開始直後の個別学力検査（教科目）

- ・ 社会科を課す大学・学部への激減
 - － 一橋、東京外語
 - － 教育学部の社会科教員養成課程
 - － 東京、筑波、東京芸術、新潟、金沢、琉球の一部学部学科
- ・ 理系教科目の継続
 - － 多くは、数学ⅡB・Ⅲ、物理Ⅱという形式
 - ・ 共通一次学力検査で課せられていない必要科目、という文脈

IMAGINE THE FUTURE.



朝日新聞 1983年2月15日

- 「二次重視」というのは...ばん回する可能性が高いことでもあるため、共通一次の得点の低い学生が殺到した。
- しかもその低い点で合格すると、...ランクの低い大学として位置づけられ、今度はその前後のレベルの学生しか応募しなくなる
- 足切りをしないため、採点にかかる手間が膨大になってきた
- 共通一次だけで受験生の基礎学力を吟味するのは難しいことがわかった
- 他大学の入試が変わらなさすぎたため、宮教大だけが孤立

IMAGINE THE FUTURE.



参考人永井道雄元文部大臣の発言 (101-参-予算委員会-2号 1984年2月23日)

- 二次試験の方で...実技、論文あるいは面接等の方法によって記述力、表現力、創造力というふうなものを調べる試験が...進行していないことは皆様御承知のとおりであります。一部の大学...例えば宮城教育大学...また筑波大学が相当努力したという例もございます。
- しかしながら、全般的には共通一次試験に依存いたしまして、そして二次の方がそれほど力を入れられていない。...そうした状況の中で偏差値教育というものが蔓延いたしまして、そして狭い意味の学力テストだけがあたかもテストであるかのごとき状況を呈している

IMAGINE THE FUTURE.



まとめ

- 調査書、共通一次、二次←共通一次に論議が集中
 - 正当な学力として入試に位置づけ難かった、思考力、判断力、表現力（ましてや主体的に学ぶ力）が、法律で位置づけたからといって、スムーズに浸透するか
 - 「息切れ」で撤退した経験を活かすのか繰り返すのか
- 国会での議論＝国民的議論←前提としての現状認識
 - 共通一次やセンター試験は失敗だったという合意はあるか？
- 試験日問題にみる変更可能性

IMAGINE THE FUTURE.

基調講演 2：大学入試センター試験の光と影 —『平成』は『ポスト昭和』を超えたのか?—

東北大学高度教養教育・学生支援機構教授

倉元 直樹 氏

〔講師紹介〕

庄司強特任教授(司会)：

引き続き、基調講演 2 に移らせていただきます。基調講演 2 「大学入試センター試験の光と影—『平成』は『ポスト昭和』を超えたのか?—」東北大学倉元直樹教授、よろしくお願いします。

倉元直樹教授：

ただいまご紹介にあずかりました東北大学の倉元でございます。自分のパソコンをセットする関係で、少々お時間をいただきたいと思います。

はじめに

今、大谷先生の話をついてながら 2 つのことを考えていました。1 つは、やはり大谷先生は、・・・理事のご紹介にもありましたけれども、・・・やはりこの分野の第一人者だなと思いました。一つ一つの事実を積み上げていって、きちんとその集積ということでお話をされましたが、私には、到底、その実力はございませんので、かなり雑な話になってしまうこととは思います。あらかじめご承知おきください。また、もう一つ非常に強く感じたことは、共通 1 次のときは、高校と大学の対立関係というのが一つクローズアップされていたように思います。この次の大学入試センター試験のときもそうですが、現状を考えると、高校と大学との対立関係という構図では説明がつかない状況があると思います。

そう言うインキではある種の「時代の区切り」が必要になるのかもしれませんが、という



ことで『平成』は『ポスト昭和』を超えたのか」という、少しおちゃらけたタイトルになっています。実は、これは語呂が良いのですね。「平成は」「ポスト昭和を」「超えたのか」と、五七五調になっております。そんな感じで話を始めさせていただきます。

戦後の大学入試における共通試験

初めに、私のお話をお聞きいただくのに際して、「2 つの視点」ということを考えました。それを念頭に置きながら、もしかすると、きちんとした事実の積み上げというところでは課題があるかもしれませんが、それなりのストーリーとして大学入試センターが導入され、また続いて、今、廃止に至ることになったと事態についてなぞっていきたいと考えております。

大学入試制度については、やはり共通試験制度の変更というのが、最も広範に影響が及ぶ改編になるかと思います。大学入試センター試験は、今、お話がありました共通 1 次をベースにして、同時に共通 1 次を批判した上で成立しています。今度は大学入試センタ

一試験から大学入学共通テストに変わるのですが、次のスライドにありますように、大学入試センター試験というのは平成の時代にちょうど重なっているのですね。改元のタイミングでまた大きな制度改編ということで本講演のサブタイトルに使わせていただいた、ということです。

戦後の入試制度を共通試験の導入と改廃というようなところから考えるという試みは、既に何人かの方がやっておられるのですが、私もそれは合理的だと思っています。戦後、当時の文部省としては大学入試に共通テストを導入したかったが、なかなかうまくいかなかったということがあったのだろーと思ひます。それが共通1次、それからセンター試験という形で、・・・これは共通試験じゃないという方もいらっしやいますけれども、それは諸外国の実情をご存知ない。立派に共通試験と呼ぶべき制度ですが・・・続いできたということに関しては、長年のご努力があったということだと思ひます。それから、これを見てもみると、それ以前の制度も結構な規模でやっていたのですけれども、10年経たないうちに2回変わっています。共通1次も・・・共通1次とセンター試験って区別が付きにくいところがあるのですが、・・・11回で終わっています。それに比べると、センター試験というのは30年以上続いていますから、ものすごく長く続いた制度です。継続した時期の長さで言うとも、多分、かなり成功したと言って良い制度なんだろうなと思ひます。ということで、共通1次以前の話も、多分、面白いのだろーと思ひますが、私の話の中心はセンター試験ということでお話をさせていただきます。

センター試験制度がなぜ導入され、なぜ続いて、なぜ廃止されるのかということをお考へることが、おそらく今の状況を考へるヒントになるのではないかと、思ひます。このことについて、きちんと検証がされているのかと

いう疑問があります。検証された上で、次のステップに行っているのだろーか、というのが一つの大きな疑問です。

もう一つ、大谷先生の話をお聞きしながら、ここで付け加えるべきかどうか分からないと迷ったのですが、今回の改革は、高校が望んだものでも、大学が望んだものでも、どちらでもないと思ひえない、という部分があって、やはり、そういう意味では大学入試センターを振り返ること、センター試験を振り返ることが、重要ななと考へています。

2つの視点

2つの視点ということをお先ほど申し上げました。その2つをお申し上げます。

これは大谷先生のご講演の中で、ある意味、悪い意味で出てきた部分です。大学入試の主体はどこなのか。それぞれの大学の入学者を決める権限はどこにあって、責任はどこにあるか。日本という社会に暮らしています。これは当たり前のことなんです。もちろん大学ですよ。ただ、これは1度ここで多分確認をしておく必要があることなんじゃないかなと思ひます。

法律家ではないので、根拠になる法令がどうかということはおよく分からないのですが、毎年、文部科学省の高等教育局長通知ということで、大学入学者選抜実施要項というのが送られてきます。これは大学にも来ます。高校にも校長先生のところにお届けになるので、多くの方がご覧になるものではないかと思ひます。その第1に「基本方針」という部分があります。実は、これ、そんなに古い時代からあったものではなくて、私が調べましたところ、平成18年度に「基本方針」という項目としてつけ加わったのです。現在のよーな表現になったのが、おそらく平成28年度の大学入学者選抜実施要項じゃないかと思ひます。今から読みますのは、去年の、平成31年度の大学入学者選抜、平成31年度

入学者用ということです。

大学入学者選抜は、各大学……(略)……がそれぞれの教育理念に基づき、生徒が高等学校段階までに身に付けた力を、大学において発展・向上させ、社会へ送り出すという大学教育の一貫したプロセスを前提として、各大学が、卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)や教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)を踏まえ定める入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)に基づき、大学への入口段階で入学者に求める力を多面的・総合的に評価することを役割とするものである。

……(略)……

このことを踏まえ、各大学は入学者の選抜を行うに当たり、公正かつ妥当な方法によって、入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に判定する。その際、各大学は、年齢、性別、国籍、家庭環境等に関して多様な背景を持った学生の受入れに配慮する。あわせて、高等学校……(略)……における適切な教育の実施を阻害することとならないよう配慮する。

以上のように書かれています。当たり前ののですが、大学入試の責任は大学にあって、また主体も大学です、ということがここで言われているわけです。

それでは、個別大学にとっての入学者選抜とは何かということなのですが、……宣伝になりますけれども、……そちらの入口を出たところで売っている本で、「個別大学の入試改革」という、少し分厚い本があると思います。そこに書かせていただいたことなのですが、「大学入試とは、大学にとって何なんだ

ろうか」ということを「諸原則」と表現としてまとめてみました。大学入試の目標は……書かれた内容です……、大学にとって求める学生像、アドミッション・ポリシーに沿う学生を獲得することである。これが、唯一、最大の原則、目標なのですけれども、これを実現するためには、例えば、「相互関係の原則」、志願者の受験動機を喚起する必要があります。歴史上、今まで、「その大学に志願しなかったのだけれども、合格と言われた人」はいないと思うのです¹。だから、まず、志願していただくということが大事になります。「募集優先の原則」は、入試にいくら凝ったとしても、志願者の中に求める学生がいなかったら何にもならないのですね。だから、そこを形成していくことが大事なわけです。そんなことを言ってきたのですが、「元々、一番大事な原則は何だろうか」ということを、こちらの一番新しい本ですね、「大学入試における主体性の評価」という本の最後のまとめのところに書かせていただきました。私はそれを「受験生保護の大原則」と呼んでいます。これが、一番大切なことである、ということなのです。

この根拠は、先ほども挙げた文部科学省からの通知、入学者選抜実施要項に書かれています。それは何かというと、一般入試、現在の科目等の決定に関する話なのですね。読みます。

個別学力検査及び大学入試センター試験において課す教科・科目の変更等が入学志願者の準備に大きな影響を及ぼす場合には、2年程度前には予告・公表する。なお、その他の変更についても、入学志願者保護の観点から可能な限り早期の周知に努める。

¹ 実例がある、という未確認の情報もある。

ここにラインを引いていました。要するに、「科目を増やすときは2年前には言うておきなさいよ」ということを言っているのです。その精神は何かというと、「入学志願者を保護しなさい」ということです。どういう意味でしょうか。つまり、「受験生の準備に大きな影響を与えるということであれば、ちゃんと早目に決めて、早目に知らせてください」ということです。これに関して、入試の権限と責任を負う大学がどう考えるのか、ということです。この2つの視点を念頭に置いて話を聞いていただければと思います。

共通1次制度への批判と臨教審

さて、本題です。大学入試センター試験の導入です。その前の制度の共通1次とは何だったのか。大谷先生から国会での議論に関して詳しくご説明いただきましたけれども、国立大学の議論だったのです。国立大学の共通試験であり、国立大学協会で議論されていて、公立大学もそれに参加をする、という仕組みです。

そのときの懸案事項は何だったのか。それは、「受験競争の緩和」ということです。それがどういう意味かということ、それ以前の制度で各大学が勝手に出題する問題は、高校の教育だけでは対応できない。だから、特殊な受験勉強をしなきゃいけなかった。それを是正しなきゃいけない、ということで、調査書を使うとか、共通試験が必要、とかという話になっていったわけです。いわゆる、「難問奇問」と当時呼ばれた問題を解決する、これをなくす、ということがテーマだったのです。先ほどの大谷先生のご講演で、なるほど、と思ったのですが、いしいひさいち氏の漫画は、私もどこか記憶にありまして、要はこんなコンピューターを使った30万人超えるような規模の入試なんて出来る訳ないじゃないか、という世間一般の見方があったわけですね。しかしながら、共通1次は、そこは乗り切っ

たわけです。共通1次の試験問題は高等学校の指導要領に基づいて出されることになりましたので、難問奇問も解決した、ということができると思います。そういった意味では、導入時に混乱はなかったに等しいのではないかと思います。

ただ、別な観点からの批判が出てきた。先ほどの話もありましたが、やれ、序列化が起こったじゃないか、2次試験が過重負担じゃないか、受験機会が1回に制限されたじゃないか……。国立大学の長年の課題であった1期校、2期校という格差を解消するということを目的とした試験日の一本化だったわけですが、日程を一本化したことによって、そういう弊害が出てしまった。さらに、共通1次を広範に課すことによって、学生が画一化する、という批判がありました。私もそう言われて批判された「個性がなくなった世代」の一人でございます。残念ながら今もこれといった個性がないのかもしれませんがね（笑）。

ところで、ここで生じた批判で根強かったのは、試験問題形式への批判です。「マークシートできちんと能力を測れるのか」というような批判です。特に、この当時、総理大臣でありました中曽根康弘氏が、マークシートが非常に嫌いだったということのようです。当時の新聞報道などにもいろいろ出ていたようです。それでこれを何とかしてやろうと思ったかどうかは分かりませんが、臨時教育審議会という機関を設置いたします。教育に関して広く議論する、文部科学省の下ではなくて首相官邸に置かれる諮問機関です。ちょっと何かを連想させられるような話でもあるのですが、この「第4部会」で大学入試制度に関して審議されるということになります。1年弱の期間で共通1次の廃止が提言されました。偏差値偏重の受験競争を煽っているという指摘であったり、共通1次に対する批判がなされ、そういった状況を克服するた

めに国公立を通じて各大学が自由に利用できる共通テストを作りなさい、というのが提言の骨子と言えるでしょう。「国公立を通じて自由に利用できる」という点が一つのポイントになると思います。

大学入試センター試験の誕生

共通1次の場合は、いわゆる5教科7科目制ということで、非常に幅広い基礎学力をそこで測ろうという考え方だったのですが、今度はそうではなく、それが画一化の原因だから、それぞれの大学が自由に利用できるようにすればいいじゃないか、私立大学も入れればいいじゃないかということで新しい共通テストを作ることになったのです。

このときも、なかなか名前が決まらなかったということがあったらしいのですが、最後、大学入試センターが実施している試験だから「大学入試センター試験」となったのですけれどもね。

これも、今、考えてみると、ミソがありまして、「共通1次」と呼んでいたときには、名前からして「国立大学の共通試験」という意識があったと思うのですね。ところが、今度は少なくとも建前はセンター試験を利用する大学が共同で運営していることになっているのですけれども、名前が「大学入試センター試験」ですから、私を含めて、大学側の意識がどっちかというとな単なるユーザーになってしまったというか、そういう作用があったかな、と思います。

国立大学協会の対応

臨教審答申に対応して、国立大学協会はすばやく改革に着手します。これまで何回か話してしまっているネタなので、二番煎じ気味なのですが、私は「昭和62年度改革」と呼んでいます。具体的には、3つのことをやりました。一つは、5教科7科目を5科目に減らします。これはアラカルトへの布石という

ことで、この時点から、4教科以下でも利用可能だよという制度になっていたはずですが、しかし、この時点で共通1次を利用していたのは、産業医科大学を例外として、国立大学、公立大学だけでしたので、アラカルトが本格的になるのは私大が参入して、センター試験になってからです。ただし、本当は、共通1次というのはテストの基本設計として、5教科7科目で、しかも、個別大学の2次試験との組合せではじめて選抜を全うする、という仕組みになっているのです。ここには手をつけなかったのですね。手をつけずに、自由に利用してください、という話になりました。

2つ目です。先ほどの大谷先生のご講演の中で「事前選抜」という話がありました。やはり「偏差値によって大学を選択するのはいけないのではないか」ということで、その批判に対応して、自己採点制度を撤廃することになりました。つまり、共通1次の得点を見てから出願する大学を決めるという制度はよろしくない、ということで、事前に自分の受ける大学を決めなさい、ということになった訳です。

ただし、その代わり、2回受けられますよ、ということです。つまり、国立大学の2次試験の日程を2日間に分けまして、連続方式・・・「AB日程」と言ったわけですが・・・になりました。これは、共通1次以前のような「1期校」「2期校」という分け方ではなくて、例えば、東北大学は「B日程」で北大、東大と同じブロックになります。旧帝大で言えば、名古屋から西ですね、名古屋大、京大、大阪大、九大、これが「A日程」という形で旧帝大系も2つに分ける。これで、格差感なく一発勝負を回避するということになりました。ただ、これにもネックがありまして、いずれか片方だけ合格した場合には問題ないのですが、両方合格した場合は、合格した後から入学する大学を選択することができ

るということになり、それに伴う弊害が噴き出ることになりました。

昭和 62 年度改革の影響

このときの改革の特徴を見てみますと、やはり非常に短期間で即応して準備をしたと言えるのではないかと思います。また、指摘された問題点、これには極めて的確ではあるのですけれども、対処療法的に対応したと見えます。だから、どうしても拙速で、確実に失敗といっているものが出てしまった。

一つ、明らかに失敗なのは、「事前出願方式」ですね。要は、自分の得点が自己採点で分かる前に出願しなければいけないということは、失敗する場合が出てくるわけです。自分の実力として思っていたほどの得点まで実際には届かないと、そういうことになる。2 次試験の機会は 2 回になったのですが、共通 1 次そのものは 1 回だけですから、そこで失敗してしまうと、そのまま浪人に直結する。場合によっては、先ほど第 1 段階選抜（足切り）の話が出ましたが、2 回とも足切りに引っかかってしまう受験生を産んでしまう。これはもう大変なことですね。私が呼ぶところの「受験生保護の大原則」に対する大侵犯です。ということで、これは 1 年だけで終わります。次の年度から事後出願へ回帰していきます。

もう一つ、受験機会の複数化。これは、受験生にとってももちろんそうですが、本質的には大学にとって困ったことになった、ということだと思います。多くの大学にとって、東京大学以外は、つまり、学力がある、そして家庭の財力がある受験生は両方とも合格できるのです。例えば、「A 日程」で大阪大学を受けておき、「B 日程」で東京大学を受け

て、両方合格した場合、「それでは東京大学に行こうかな？」みたいなことが起こってくる。そうすると、ほとんどの大学にとっては第 1 志望の受験生が弾かれてしまうことになってしまう。つまり、滑り止めで第 2 志望の大学に出しておいて、一応そこに合格したから、しようがないから入ろうかな、という受験生が出てくる。そうすると、もともとそこの大学に入りたくて、第 1 志望だったのだけれども、ちょっと点が足りなかった、届かなかったという受験生がはじき出されてしまう。これはなかなか大きな問題になって、徐々に・・・京都大学の法学部等が皮切りと伺っていましたような気がしましたが、他、他の大学でも一部の学部で最初の年からやっていたようです²・・・分離分割方式といって、定員を分けて、A 日程と同時に前期日程、B 日程と同時に後期日程という形で 2 回実施する、という今のおなじみの制度に移行していくことになります。はっきり覚えていないのですが、平成 4、5 年ぐらいまでかけて³、最終的に前後期制に統一ということがあったと思います。

何度もお話ししているので、またか、という向きがいらっしやったらすみません。東北大学にどういう影響があったかという話なのですが、最初、いわゆる「A B 日程」が始まる前は 1 回の試験ですが、・・・便宜上、グラフの上では「前期日程」と表記されていますが、志願者数の変遷です。・・・ここにぼんとピークが来て、あとだらだらと下がっていきます。それぞれ「○」がついているのが大きな変化があった年で、これは「分離分割方式」「推薦入学の導入」です。これは、東北大学における入試改革の淵源ということになるのですが、これは「A O 入試の導入」です。

² 1987 年度版の大学入試センター要覧によれば、横浜国立大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、岡山大学、山口大学、香川大学、九州大学の一部の学部が定員を A 日程と B 日程に振り分けて 2 次試験

を実施したようである。

³ 実際には、最終的に国立大学の入試は 1997 (平成 9) 年度入試から分離分割方式に統一となっている。

志願者数には全く影響ないです。ここに○がついているのは、東日本大震災の翌年です。当時の執行部が、受験生が減るのではないかと、相当心配したのですけれども、・・・7%ぐらい減りましたが・・・こうやって歴史的、時系列的に見てみると大した話じゃなくなってしまうのが分かります。

それよりも、ここが大きいです。「昭和62年度改革」すなわち「AB日程」方式の導入です。これは当然です。1回だったチャンスが2回に増えたわけだから、その分、受験生も増えるわけです。それがどういう話になっていくかということになります。

正直、東北大学は、今でも相対的には・・・若干含みのある言い方になりますけれども・・・宮城県出身者、地元ですから、一番多いですね。今、次は東京になっていますけれども、その地理的な出身地の状況というのは、東北を中心とした東日本が主なエリアになっているという意味では、まあ、根本的に大きく変わってはいません。合格者の中には、入学を辞退される方もいます。ただ、今は非常に辞退率が低くなっていて、これよりもさらに下がっていると思います。多分、前期日程だと2～3%ぐらいじゃないかなと思うのですが、この年だけ大阪、兵庫、愛知というところから来られた受験生が大量に合格し、また半分以上抜けていく、ということになってしまった。これは大学にとっては大問題なわけです。ということで、少し時間をかけてここを是正することになりました。

臨教審と国大協の対応の成果

これが大学入試センター試験の導入時の出来事だったのですが、臨教審と国大協の対応は、実に秀逸だったなと思います。もともとは「マーク式がいけない」という話だったはずなのですが、うまく論点をずらしました。少しずつして他の社会問題に焦点化した。例えば、「画一化がいけない」とか、「偏差値序

列がいけない」とか、そういった話です。ということで、不可能なミッション、例えば、「共通試験として記述式の試験をやりなさい」などと言われても仕方なかったかもしれない。でも、そういったミッションは負わなくて済ませたわけです。実は、記述式試験の技術的問題点というのは、かなり早い段階で、国立大学協会で議論していきまして、「共通試験をやるのであれば、記述式は無理」ということで決着していた話です。

もう一つ、重大な問題に対して、素早い対応を行ったということが言えます。失敗を見直したわけです。受験生保護の大原則から、事前出願を撤回しました。これは翌年ですね。各大学の利害調整から分離分割制度の導入をしました。これには少し時間かかりましたが、こういう対応をしたということです。こういった対応が功を奏して、結果的に非常に長期間続く制度になったのではないかと、私は考えています。

未完成だったセンター試験制度

ただ、ここに残ってしまった宿題があったのです。先ほど申しました、共通1次の基本設計、これをどういうふうにして自由に利用できるテストに変えていくのか、という問題です。共通1次制度の下では、基礎学力は1次試験で見る。そして、多様な資質を様々な評価指標を用いて2次で見る、というのが基本コンセプトだったはずです。果たして、基礎学力を1次試験だけで見られるのか、という話があったというのは事実です。今でもそういう問題はあるのだろうと思いますが、ただ、このときに「自由に利用できる共通テストの基本設計をどうするのだ」という話はなかった。だから、そのままになってしまいます。問題が表面化しなかったために、そのまま忘れ去られてしまったという経緯があった。

共通1次と対比して、センター試験でどう

いう変化が起こったかという点、一つは私立大学が参加したことが挙げられます。端的に言えば、受験者層が広がった。下方に拡大したわけです。学力的には、共通1次だとややおぼつかなかったような受験生が増えてきた。アラカルト方式では、極めて複雑な科目選択パターンが出てきます。例えば、同じ募集単位で全然違うパターンの科目を取ってくる受験生に対する公平性をどう担保するか、という話は、結局、ないがしろにされたままに来てしまったと思います。共通1次の基本設計のまま、アラカルトの運用をしてきて、その結果、制度疲労が起こってしまったことが、次の話につながってくるのではないかと私は考えています。

平成24年度問題の勃発とその教訓

平成24年度入試でセンター試験に改革がありました。これは相対的にはあまり大きな改革とは思えません。その改革とは何かというと、センター試験の「地理・歴史」「公民」、それと「理科」の科目それぞれで2科目自由に選択できるようにする。それまでは、「地理・歴史」という時間と「公民」という時間が別々にあって、例えば、文系で6教科7科目を受験するとなれば、「地理・歴史」から1科目、「公民」から1科目、という取り方しかできなかったのですが、これを自由に2つ選択できるようにしよう。これを実現したのですが、結果的に改革の初年度に試験監督のミスが頻発して大混乱に陥ったという事例です。

具体的な内容は、細かい話になって恐縮ですが、120分で1科目解答する受験生と2科目解答する受験生が混在するという点になると不公平があるので、これは時間を区切って運用する、ということになりました。したがって、2科目解答者には120分間の時間を与えて、先に2つの問題冊子を渡しておくということをしました。ただし、試験時間は

60分ずつに区切って、最初の時間に解答する科目を「第1解答科目」、次の時間に解答する科目を「第2解答科目」と呼ぶことになりました。そして、60分終了後に「第1解答科目」に対する解答を回収し、それから次の時間に使用するマークシートを配付する、という手順を編み出したのですが、これを「スリット方式」と呼びます。要は、共通1次時代からこのときまで1度もやったことがなかったやり方なのですね。これが全ての試験室に徹底できなかった、ということになるのです。

この問題の背景を見ますと、これは、実は、国立大学協会からの要請が始まりなのです。実施年度からさかのぼること12年、平成12年に「国立大学の入試改革」という文書が出ています。そのときに、国立大学は5教科7科目という「共通1次の原則」に戻ろうとします。同時に、科目選択を自由にするために、センター試験を3日間にしよう、という提案がなされました。そちらの方は実現しなかったのですが、こちらだけは基本的には国立大学協会の合意ということで、原則的に「5教科ないしは6教科7科目」に戻ることになりました。厳密に言えば、科目の数え方が違うのですが、いずれにせよ、これは、受験生に幅広い学びを促すという意味で、国立大学のアドミッション・ポリシーとして極めて高く評価されるべきなのではないかと私は思います。

ところが、もしかしたら、見落としていたのではないかと思うのが、共通1次とセンター試験の制度的な基本設計の違いです。共通1次は一律5教科7科目だったので、・・・私も3年目に受験をしているのですが・・・「理科」、それから当時の「社会科」ですね、これは2つの科目に関して、一つの時間で同時に解くということをやったと記憶しています。マークシートは2枚あったかな、と記憶を辿ってみたのですが、どうも、そうではなくて、

マークシートの裏表を利用したのだったと思います。一つの用紙の裏と表に解答することだったと思います。

ところが、センター試験は当然アラカルト方式ですから、1科目しか受けない受験者と2科目受けなければならない受験者が混在します。ここをどう技術的に回避するのかということをきちんと詰めないままに、実施に至ったように思います。最終的には、今のやり方に落ち着いています。

もう一つ、学習指導要領がこの12年の間に変わります。当時、国大協が提案した当時は公民に「現代社会」という科目があり、それは4単位科目だったのですね。余談になりますが、今でも東北大学は、当時の国大協の方針に従って、「地理・歴史、公民」に関しては理系の学部も含めて4単位科目しか認めていません。ですので、もし、2単位科目を受けると受験資格がないということになってしまうのですが、いずれにせよ、提案から実現の途中で「現代社会」が2単位科目になってしまった。そこで、結局、センター試験においては「倫理」と「政治経済」という別科目を2つ合わせて、「倫理・政治経済」という複合4単位科目をつくり出します。

これが、恐らく、高等学校にとっては対応が困難なのではないかということで「これは大変なことになるよ」ということを、私、実は、このフォーラムで発言したことがあります。報告書、ウェブサイトに掲載していますので、もし、よろしかったらご覧ください。またしても、宣伝になってしまいましたけれども、「学習指導要領 VS 大学入試」という、このときに出版した本にもこのことが書かれています。

予想通り、確かに混乱は生じたのですが、その中身は外れました。その当時、一番、思っていたのは、「倫理・政治経済」を教える高校側の対応が困難だろうな、ということでした。これは、確かにそうだったと思います。

履修する生徒に合わせて教員を確保しますので、2単位だった「倫理」だとか「政治経済」の教員がいなくて、それを教えられる人から集めるということになった、ということがありました。とにかく、このときも決定が遅過ぎました。「スリット方式」も実施年度の5月、1科目利用の場合の「第1解答科目」指定が6月です。私は、新しく指導要領が加わる平成28年度の入試が大混乱になるのではないかと予言したのですが、そんな高尚なことではなくて、実際に起こったのは問題冊子の配付ミスというレベルのことでした。

要は、何が問題だったかということ、「地理・歴史」と「公民」の問題冊子が分厚いのです。厚いから1冊に綴じられなかったので2分冊にした、というわけです。ところが、共通1次時代からセンター試験に至るまで、別冊科目を除いて、試験問題を2冊配付されたことがなかった。これを1万室の受験室全ての監督者に徹底させるということができなかった。

この問題を受けて、検証委員会が立ち上がります。もう時間がないようなので、急ぎます。報告書を読むと「大きな制度変更に見合うだけの準備期間が足りなかった」「当初より、複雑になった試験方法に対する懸念があった」とあります。「センター試験の複雑化は限界である」ということ。これが、実は、長年、基本設計を共通1次のまま変更せずに運用してきたセンター試験の本質的な問題点であったわけです。

この問題に関する総括です。これは、改革理念に過度のこだわりを持って、12年前の提言を12年経って状況が変化してから実現してしまった。構造的な問題に対する無理解、準備期間の短さ、それから、「史上初めての試み」に対する認識の甘さがあったと思います。

平成 24 年度問題の帰結

この「小さな改革」が、センター試験制度の廃止に直結する大事件につながってしまった、と理解して良いかと思います。これは、どういうことか。実は、今の「高大接続答申」の前の大きく大学入試に関わる中教審答申として、「学士課程答申」と呼んでいるものがあります。平成 20 年に出されたものです。要は、AO入試と推薦入学の学力の危機ということに関して、これは何とかしなければならぬ、「学力把握措置」を取りなさい、という提言をした答申なのですが、ここでは大学入試センター試験がどう評価されているでしょうか。「我が国全体として入試の改善を維持、推進する上で、大きな貢献をしてきた」と書かれています。大絶賛なんですね。

「教育再生実行本部」というのは政権与党の自民党内の組織で、そこから出た最初の提言が今の入試改革のキックオフになった文書です。これにはセンター試験に対して、一切言及がありません。高大接続改革に決定的な影響を与えた「教育再生実行会議」の第 4 次提言でも、センター試験の問題内容に対する批判はないのです。どこで出てきたかという、「高大接続答申」です。いきなりです。

「我が国が成熟社会を迎え、知識量のみを問う従来型の学力や・・・、真の学力が十分に育成、評価されていない」と。そういう認識の下に、センター試験は「知識、技能」を問う問題が中心であるとして、「センター試験を廃止して、新たなテスト」を作りたいと言っています。このときに言われたことは、多くの方が忘れておられるのではないかと思います。これは大事だと思って、このレジュメの後ろに添付しています。こんなことを言われていた中で、お配りした資料の中に赤字で示した内容が、今、実現されようとしているという話です。

大学入試制度改革の論理

ロジックは大事だと思います。どうして変えるのか。この間、何があったのか。センター試験の試験問題は、いきなりおかしくなったのか。そんなことはないはずですよ。何が起こったのかと言えば、「学士課程答申」の後、センター試験制度の基礎設計の問題が長い時間を経て制度疲労を起こした帰結として「平成 24 年度問題」が生じたということしか考えられない。そうすると、今、言われているセンター試験の廃止の論理って、本当にセンター試験を廃止すべき理由になっているのだろうか、ということが率直な疑問として浮かんでくるわけです。だから、今、我々が直面している具体的な問題について、それを「教育の問題」「センター試験制度の問題」とだけ考えていると、私には理解できないのです。何らかの形で補助線を引いて考えないと理解できない、と私には見えます。

ただ、パターンは見えています。教育に対して何か問題が起こる。これはもう大学入試制度が悪いのだ、というパターンです。なぜ、こういうふうになってきたかということに関しても持論はあるのですが、検証が不足しているのと、ここでは時間がないので話さないでおきます。問題解決の方法論として制度を変えようという発想も同じパターンです。これは、ある意味、非常に楽観的だと思います。本当にそれで良くなるのかということが、きちんと詰められているのでしょうか。共通 1 次 때는、かなり論理的に詰められていたと思います。ところが、想定していた論点とは必ずしも一致しないところで激しい批判を浴びて、早期に方向転換を余儀なくされた。センター試験への転換、それから今の状況には、ちょっとそれが見つからないように感じます。

制度改革というのは、本当に大変なのだと思います。なぜかという、必ず、「改革」は「改悪」と認識されてしまうからです。なぜ

でしょうか。それは、受験生が困るからです。私は、以前から、「出口からの議論」をしようとして提案しています。「出口からの議論」とは、改革の結果として何が起こるのかを副作用も含めて現実的に検証し、そこから、手を付けるべき改革の具体案を考えていく、ということです。実際には現実的な試験実施の手続きは大事ですし、受験生が困らないようにするためには、かなり時間をかけて様々なことを詰めていかなければなりません。

変革期における大学の責務

さて、時間が来てしまったので、ここから手早くいきます。余計なことを言いますが、お許してください。

一昨日でしたか、もう1日前でしたか、「高校普通科抜本改革」という報道をNHKで見ました。画一的なカリキュラムが偏差値教育を生んでいるので、専門性の高い学科に普通科を再編すると。しかも令和3年度の導入を目指すというのです。

2つの大きな疑問があります。今、大きな鳴り物入りで「三位一体改革」をやっているところじゃないですか。それが、結局、どうなるかということについて、決着がつく前にまた変えるというのでしょうか。しかも、2年後ですよ。余りにも急ですよ。準備ができるのでしょうか。その上、またも、改革のための論理が一緒なのです。何と一緒かというと、臨教審と同じなのです。現状は当時と全然違います。受験競争と言われた時代と今とでは、大学がある意味増え過ぎたと言う人もいます。進学率の増加もあります。選り好みをしなければ、どこかの大学には行けるという時代です。それに対しての現状認識も検証も感じられません。何をしているのかよく分からないと感じます。

ふと脳裏に浮かんだことです。大学入試の「セオリー」から考えると、今の改革のスムーズな実現は極めて困難に見えます。もしか

すると、もうすでに具体的な問題が表面化しているのかな、とも思っています。制度が変わるときには、必ず、受験生に影響があります。このときに考えるべきは、「受験生保護の大原則」ではないかと思うのです。ただただ、改革の対応に翻弄されるということでは、本当に問題が大きくなってしまおうと思います。これも、我々、大学の側でどう考えるかということになると思います。

もう一つ、これは「共通1次のときにも同じことを言われていたよね」と思われるかもしれませんが、大学入学者選抜が成立しない可能性ということをごく頭の隅に置いておく必要があるのではないかとさえ思います。もちろん、私は大学入試の現場の人間です。政策に口を出す立場ではないです。むしろ、現場にいる人間としては、与えられた条件でできることを準備するというのが役目ですし、大学側の人間として大学の義務ではないかと思っています。なぜならば、大学入学者選抜の主体は大学だからです。「受験生保護の大原則」、もし、これが侵犯されたときに、実際にはそれぞれの大学が責任を取るようになるのではないかと、いうことを危惧しています。自分の大学を受ける受験生に被害があった場合、大学の信用が保てるだろうか、ということもあります。大学への継続的な志願者層の育成と保全。これはもう、大学の決定的な利害に直結する問題です。大学には、やっぱり大枠の中で一定の自由度があるわけです。だから、与えられた条件の中で何とか可能な対応策をとるということは、大学の責務だろうと考える次第です。

もしも、大きな混乱があったとき、また新しく出てきた改革によって論点が拡散するのではないかとこの心配があります。問題が拡散していくと、また、さらに変えましょう、ということになりかねません。検証する時間は与えられません。そうすると、このときの問題は何だったのか、改革の目的は何だった

のか、忘れ去られてしまうことになります。そうになってしまうと、皆が被害をこうむることになるのではないかと思います。

もちろん、状況への適応は大事だと思います。もちろん、ずっと何も変えるな、と言うつもりはさらさらありません。少しでも良いようにしていこうという努力は今までも続けてきたことだし、これからも大切なことなのですが、「変化」ということに踊らされて、過剰適応していくということになると、次の変化に対応できないことになってしまうのではないかということを、今、恐れているということです。

時間を超過してしまいました。申し訳ありません。果たして、「平成」は「ポスト昭和」を超えたのでしょうか。「令和」は何を超えるべきなのでしょう。私もよく分かりません。ぜひ一緒に考えさせてください。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

庄司強特任教授(司会)：

倉元教授，ありがとうございました。ご質問等につきましては，お手元の質問票をご利用ください。

ここで短い休憩を挟みたいと思います。ただいま2時35分です。2時45分まで休憩にしたいと思います。質問等につきましては，お手元の質問票をご利用ください。



大学入試センター試験の光と影

—「平成」は「ポスト昭和」を超えたのか？—

東北大学高度教養教育・学生支援機構
倉元 直樹



はじめに (3)

- **大学入試センター試験制度**をどう評価するか
 - 大学入試センター試験は**なぜ導入**されたのか？
 - 大学入試センター試験は**なぜ続いた**のか？
 - 大学入試センター試験は**なぜ廃止**されるのか？
 - ← 検証がないまま次のステップへ？？？
- 大学入試センター試験制度について考えることは**今後を占う一つの力**になるのでは？

2018/5/15 第30回 東北大学高等教育フォーラム 5



本講演の構成

- はじめに
- 二つの視点
- 大学入試センター試験の導入
- センター試験制度のほころび
- センター試験廃止の論理
- おわりに

2018/5/15 第30回 東北大学高等教育フォーラム 2



二つの視点 (1)

- 本講演で重視する二つの視点
- 1. **大学入試の主体**はどこか？
 - 個別大学への入学者を決める権限は？
 - 個別大学の入学者選抜の責任は？
 - ← いずれも**大学**にある

cf. 平成31年度大学入学者選抜実施要項
第1項「基本方針」で明確に規定されている

2018/5/15 第30回 東北大学高等教育フォーラム 6



はじめに (1)

- 大学入試における共通試験制度の変更
 - ← 最も**広範囲に影響**が及ぶ変更
- 大学入試センター試験
 - 共通1次をベースに**共通1次批判**の上で成立
 - 大学入試センター試験 → 大学入学共通テスト
- 改元のタイミングでの大きな制度変更
 - 本講演のサブタイトルに

2018/5/15 第30回 東北大学高等教育フォーラム 3



二つの視点 (2)

- 2. 個別大学にとって入学者選抜とは？
- **大学入試の諸原則** (倉元、2018)
 - 大学入試の目標：求める学生像に沿う学生獲得
 - 相互関係の原則：志願者の受験動機を喚起する
 - 募集優先の原則：志願者集団の形成が優先
等々
- **受験生保護の大原則** (倉元、2019)の重要性

2018/5/15 第30回 東北大学高等教育フォーラム 7



はじめに (2)

- 戦後の大学入試制度：共通試験の導入と改廃

実施年度	名称	受験者数	特徴
1947 (昭和22) ~ 1954 (昭和29) 年度	進学適性検査	11~34万名	目的が知能検査 → 文理の適性 → 大学層別に必要な一般能力、と変遷
1963 (昭和38) ~ 1968 (昭和43) 年度	能研テスト	延べ32~94万名 (1年~受験可)	「学力テスト」「進学適性能力テスト」「職業適性能力テスト」から成る
1979 (昭和54) ~ 1989 (昭和64) 年度	共通第1次 学力試験	32~38万名	国立大学協会主催。高校における一般的かつ基礎的な学習の達成度を評価
1990 (平成2) ~ 2020 (令和2) 年度	大学入試センター試験	41~56万名	国公私立大学、短期大学で利用可。基礎的達成度、ア・ラ・カルト方式
2021 (令和3) 年度 ~ ?	大学入学 共通テスト	?	「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」を評価。英語外部試験記述式導入

主として安野 (2013)、大学入試センターウェブサイト等による

2018/5/15 第30回 東北大学高等教育フォーラム 4



二つの視点 (3)

- 受験生保護の大原則とは？
 - 平成31年度大学入学者選抜実施要項
第7 学力検査実施教科・科目、試験方法等の決定・発表
3 個別学力検査及び大学入試センター試験において課す教科・科目の変更等が**入学者の準備に大きな影響を及ぼす場合**には、2年程度前には予告・公表する。なお、その他の変更についても、**入学者の保護の観点**から可能な限り早期の周知に努める。
- 入試の権限と責任を負う**大学が何を考えるか？**

2018/5/15 第30回 東北大学高等教育フォーラム 8

大学入試センター試験の導入 (1)

- 共通第1次学力試験（共通1次）とは？
 - 国立大学の共通試験、公立大学も参加
 - 旧来の **懸案事項(難問・奇問)の解決**
 - 導入時に混乱はなし → **別な観点からの批判**
 - 序列化、過重負担、受験機会、画一化、等々
- 根強かった試験問題形式への批判
 - 中曽根首相が **反マークシート** = 共通1次廃止論

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

8

大学入試センター試験導入 (4)

- 昭和62年度改革における重大な失敗
 - **受験機会の複数化**（連続日程〔AB日程〕導入）：
本質的には大学入試の諸原則への侵犯
 - 受験生にとっても不利益
 - 学力が高く、家庭の財力がある受験生に有利
 - 第1志望の受験生がはじかれてしまう
 - 徐々に **分離分割方式**（前後期制）へ移行

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

13

大学入試センター試験の導入 (2)

- **臨時教育審議会** 設置（昭和59〔1984〕年9月）
 - 大学入試制度に関しては第4部会で審議
- 第1次答申（昭和60〔1985〕年6月）で廃止提言
 - **偏差値偏重の受験競争**の弊害を指摘
 - 国公立を通じて **各大学が自由に利用できる** 共通テストを創設
 - **大学入試センター試験**の誕生へ

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

10

大学入試センター試験導入 (5)

東北大学における一般入試（前期日程）志願者数の推移

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

14

大学入試センター試験導入 (3)

- 国立大学協会による **昭和62年度改革**
 1. **アラカルト**への布石（5教科7科目→5科目）
 - ← 自由に利用できる試験
 - テストの基本設計として **共通1次からの大転換**
 2. 自己採点制度の撤廃（事前出願）
 - ← **偏差値による大学選択**批判への対応
 3. 受験機会複数化（連続方式〔AB日程〕）
 - ← **一発勝負**批判への対応

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

11

大学入試センター試験導入 (6)

東北大学一般入試前期日程入学辞退者数上位10都道府県

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

15

大学入試センター試験導入 (4)

- 昭和62年度改革の特徴
 - **臨教審答申**を受け、短期間で準備・実施
 - 指摘された問題点への対症療法的対応
- 昭和62年度改革における最大の失敗
 - **事前出願方式**：受験生保護の大原則への侵犯
 - 1度だけのチャンス、共通1次の失敗が浪人に直結
 - 次の年度から事後出願へ回帰

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

12

大学入試センター試験導入 (7)

- 臨教審、国立大学協会の対応の秀逸性
 - 論点をずらす：**不可能なミッション**を負わない
 - マーク式批判 → 他の社会問題への焦点化
 - 記述式の技術的問題点は共通1次導入時に決着済
（国立大学協会入試調査特別委員会、1972）
 - 重大な問題に対する **素早い対応**
 - 受験生保護の大原則 → 翌年に事前出願制撤回
 - 各大学の利害調整 → 分離分割制度の導入

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

16

大学入試センター試験導入 (8)

- **秀逸な対応** → 長期間 (31回) 続く制度へ
- 残された宿題
 - 共通 1 次の基本設計:
基礎学力 (1 次) + 多様な資質 (2 次)
 - 自由に利用できる **共通テストの基本設計** は?
- 当初、ア・ラ・カルトの問題は表面化せず
→ 忘れ去られた基本設計の転換

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

17

センター試験制度のほころび (3)

- 見落とされていた 2 つのポイント
 - 共通 1 次とセンター試験の制度的違い
共通 1 次: 一律 5 教科 7 科目 → 1 コマで 2 科目
センター試験: **ア・ラ・カルト方式**
→ 1 科目受験者と 2 科目受験者の混在
- **学習指導要領の変更**
現代社会が 4 単位科目から 2 単位科目へ
→ 「倫理・政経」という複合 4 単位科目の誕生

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

21

大学入試センター試験導入 (8)

- 共通 1 次と対比したセンター試験の特徴
 - 私立大学の参加 → **受験者層の下方拡大**
 - ア・ラ・カルト方式の導入と試験の公平性
→ 受験者ごとの **複雑な受験パターン**
- 共通 1 次の基本設計のままでア・ラ・カルトの運用
← 30 年後の廃止につながる **制度疲労** の原因?

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

18

センター試験制度のほころび (4)

- 予言されていた危機
第14回東北大学高等教育フォーラム「学習指導要領と大学入試—高大接続の原点を探る—」(2011 [平成23] 年9月2日)
【報告書】
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/cahe/wp-content/uploads/2012/03/a5b5f105f4cd9ca97eda4e67344e5fc5.pdf>

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

22

センター試験制度のほころび (1)

- 平成24 (2012) 年度センター試験改革とは?
 - センター試験の「地理歴史」「公民」と理科
 - 「地理歴史、公民」から **2科目自由選択** に変更
 - 改革初年度に **試験監督ミス** 頻発 ← 大混乱
- 改革内容
 - 120 分で 1 科目解答者と 2 科目解答者が **混在**
→ 途中で答案を回収する **スリット方式** 採用

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

19

センター試験制度のほころび (5)

- **予言** の内容
 - 高校側の対応の困難さ
「倫理・政治経済」のための **教員確保**
 - **遅すぎる決定と通知**
原則は 2 年前予告: 2009 (平成21) 年度末が限界
「スリット方式」の採用決定が 2011 (平成23) 年 5 月
「第 1 解答科目」の採用決定が 2011 (平成23) 年 6 月
 - 新学習指導要領の下での **平成28年度入試を懸念**

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

23

センター試験制度のほころび (2)

- 平成24 (2012) 年度改革の背景
 - **国大協 (2000) 「国立大学の入試改革—大学入試の大衆化を超えて—」**
 - センター試験 5 (6) 教科 7 科目を原則に
 - 科目選択の自由化 ← センター試験 3 日間化
 - 平成16 (2004) 年度から 5 (6) 教科 7 科目実現
 - **センター試験3日間化は実現せず**

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

20

センター試験制度のほころび (6)

- **外れた予言** ← 実際に起こった主な混乱
 - 「地理歴史・公民」の **問題冊子配布ミス**
- 課題: 厚すぎて綴じられなかった問題冊子
 - 「地理歴史」「公民」の **2分冊** に
 - 共通 1 次時代から「別冊」を除き、試験問題が 2 冊配付されたことはなかった
 - 約 **1万室** の試験室全てに徹底できなかった

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

24

センター試験制度のほころび (7)

- ・「H24センター試験検証委員会報告書」より
 - ・科目選択範囲の拡大という制度変更そのものに対しては、・・・意義があったとの評価の声も (p.12)
 - ・**大きな制度変更**に見合うだけの**準備期間が足りなかった**・・・当初より関係者の中に**複雑となった試験方法に対する懸念の声**があった (p.12)
 - ・**センター試験の複雑化**は限界 (p.19)

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

25

センター試験廃止の論理 (3)

- ・高大接続答申(平成26[2014]年12月)の提言
 - ・大学入試センター試験は「**知識・技能を問う問題**」が中心となっており、・・・(中略)・・・現行の**大学入試センター試験を廃止**し、下記のような新テスト「大学入学希望者学力テスト(仮称)」を新たに実施する。(資料末尾参照)

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

26

センター試験制度のほころび (8)

- ・平成24年度センター試験改革の総括と教訓
 - ・12年前の改革理念への過度なこだわり
 - **角を矯めて生を殺す** 結果に
- ・失敗につながる3つの要因
 1. 構造的問題に関する無理解
 2. 準備期間の短さ
 3. **史上初の試み**への認識の甘さ
- ・小規模な改革が**制度廃止に直結**する大事件へ

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

25

センター試験廃止の論理 (4)

- ・学士課程答申(平成20[2008]年12月)と高大接続答申(平成26[2014]年12月)の間に何があった？
 - ・センター試験問題の突然の著しい質的低下？
 - ← それならばセンター試験廃止の論理は理解可能
 - ・実際は**センター試験制度基礎設計問題**の表面化
 - ← センター試験廃止の論理とは全く別の問題
- ・**入試の外からの補助線** → 理解可能に？

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

30

センター試験廃止の論理 (1)

- ・学士課程答申(平成20[2008]年12月)
 - ・**我が国全体として、入試の改善を推進する上で、大きな貢献**をしてきたと言える (p.31) ← 大絶賛
- ・教育再生実行本部第一次提言(平成25[2013]年4月)
 - ・大学入試センター試験に言及なし
- ・教育再生実行会議第四次提言(平成25[2013]年10月)
 - ・センター試験問題に対する批判はない

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

27

センター試験廃止の論理 (5)

- ・大学入試改革の論理
 - ・教育における問題の原因 → **大学入試**に帰属
 - ・解決の方法論 → **大学入試制度改革**に求める
- ・大学入試制度改革の本質的問題
 - ・受験生保護の大原則：**全ての改革は改善に**
 - ← 受験生の利益と性急な改革は本質的に矛盾
 - ・**出口からの議論、現実的な手続き**の重要性

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

31

センター試験廃止の論理 (2)

- ・高大接続答申(平成26[2014]年12月)の論理
 - ・我が国が成熟社会を迎え、**知識量のみを問う「従来型の学力」**や、主体的な思考力を伴わない協調性はますます通用性に乏しくなる中、現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持って多様な人々と協働する態度など、**真の「学力」が十分に育成・評価されていない**。

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

28

おわりに (1)

- ・**高校普通科抜本改革案**の報道
 - ・画一的カリキュラム → 専門性が高い学科へ
 - ・令和3(2021)年度導入を目指す
- ・二つの大きな疑問
 - ・高等学校教育、大学入学者選抜、大学教育の**三位一体改革の最中**になぜ？
 - ・**あまりにも性急**なのはなぜ？

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

32

おわりに (2)

- 高校普通科改革案の論理
 - またも、**歴教審(1985)と同じ**論理構成
 - 現状は完全に変化 ← **認識も検証も不在**
- ふと脳裏に浮かんだこと
 - 大学入試のセオリーから考えると**大学入学共通テスト**を中心とした改革の成功は極めて困難
 - 具体的な問題が**早期に表面化**するからでは？

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

33

おわりに (6)

- 「平成」は「ポスト昭和」を超えたのか？
- 「令和」は何を超えるべきなのか？

是非、一緒に考えましょう！

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

37

おわりに (3)

- 推測される困難
 - **受験生保護の大原則の決定的侵害**の予感
 1. 改革への対応に翻弄される受験生 ← これも問題
 2. 大学入学者選抜が**成立しない**可能性？
- 大学入試の現場としての立場
 - 政策に口を出す立場にない
 - **与えられた条件**でできることを準備
 - **大学入学者選抜の主体は大学**

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

34

おわりに (4)

- 受験生保護の大原則への侵犯の帰結は？
 - 実際には**個別大学が責任を問われる**のでは？
 - 受験生に被害 → **大学の信用**が保てるか？
 - 大学への継続的な**志願者層の育成**、保全は？
 - ← 個別大学の決定的利害に直結する問題
- 大学には大学入試に一定の**自由度**がある
 - 与えられた条件の中で**可能な対応策**は？

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

35

おわりに (5)

- 懸念する事態
 - 大きな混乱 → 論点の拡散 → 問題の拡散
 - 検証なき改革の連続 → 全関係者の不利益に
 - **改革の目的は何だったか**は忘れないでほしい
- 適応と過剰適応
 - 現状の永続は不可能 → 変化への適応が重要
 - **状況への過剰適応は変化への適応力を奪う**

2018/5/15

第30回 東北大学高等教育フォーラム

36

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の在り方

- ◆ 大学入学希望者が、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握することを主たる目的とし、「確かな学力」のうち「知識・技能」を単独で評価するのではなく、「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」（「思考力・判断力・表現力」）を中心に評価する。
- ◆ 「教科型」に加えて、現行の教科・科目の枠を越えた「思考力・判断力・表現力」を評価するため、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせで出題する。具体的な作問に向けた検討の状況を見据えつつ、将来は「合教科・科目型」「総合型」のみ¹⁹とし、教科・科目に必要な「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」を総合的に評価することを目指す。
- ◆ 解答方式については、多肢選択方式だけではなく、記述式を導入する。
- ◆ 大学入学希望者に挑戦の機会を与えるとともに、資格試験的利用を促進する観点から、年複数回実施する。実施回数や実施時期については、進路を決めるに当たり、入学希望者が他者からの指導に受動的に従うのではなく、自ら考え自ら挑戦できるようにすることを第一義として、高等学校教育への影響を考慮しつつ、高等学校・大学関係者を含めて協議する。
- ◆ 「1点刻み」の客観性にとらわれた評価から脱し、各大学の個別選抜における多様な評価方法の導入を促進する観点から、大学及び大学入学希望者に対して、段階別表示による成績提供を行う²⁰。
- ◆ CBT方式での実施を前提に、出題・解答方式の開発や、実施回数の検討等を行う。
- ◆ 特に英語については、四技能を総合的に評価できる問題の出題（例えば記述式問題など）や民間の資格・検定試験の活用により、「読む」「聞く」だけではなく「書く」「話す」も含めた英語の能力をバランスよく評価する²¹。また、他の教科・科目や「合

¹⁹ 今後、高等学校の教科・科目の構造が見直され、既存の教科・科目の枠を越えた「思考力・判断力・表現力」を育成・評価する教科・科目が設置されることになれば、既存の教科・科目の枠を越えた「思考力・判断力・表現力」を評価する問題が「教科型」として設定されることも考え得る。

²⁰ 段階別表示の具体的な在り方や、あわせてどのようなデータ（標準化得点や、パーセンタイル値に基づき算出されたデータ等）を大学に提供することが適当かについては、別途、専門家等による検討を行うこととする。

²¹ 「英語教育の在り方に関する有識者会議」報告書（平成 26 年 9 月 26 日）も参照のこと。「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」独自の問題作成を行うべきか、民間の資格・検定試験に全面的にゆだねるべきかについては、四技能を踏まえた作問の質に加えて、日本人の英語力の現状を踏まえたテスト開発の在り方、各試験間の得点換算の在り方、受検料など経済格差の解消、受検機会など地域格差の解消等に関する具体的な検討が必要であり、今後、学校関係団体、試験団体、経済団体、大学入試センター等が参加して設置された「連絡協議会」において速やかに検証が行われるよう求める。

⁴ 中央教育審議会(2014).『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学希望者選抜の一体的改革について——すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花咲かせるために——(答申)』平成 26 年 12 月 22 日(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf, 最終閲覧日令和元年 9 月 17 日)より一部抜粋・編集

教科・科目型」「総合型」についても、英語についての検討状況も踏まえつつ、民間の資格・検定試験の開発・活用も見据えた検討を行う。

- ◆ 選抜性の高低にかかわらず多くの大学で活用できるよう、広範囲の難易度とする。特に、選抜性の高い大学が入学者選抜の評価の一部として十分活用できる水準の、高難度の出題を含むものとする。
- ◆ 生涯学習の観点から、大学で学ぶ力を確認したいものは、社会人等を含め誰でも受検可能とする。また、海外からの受検も可能とするよう、実施時期や方法について検討するものとする。
- ◆ 入学希望者の経済的負担や受検場所、障害者の受検方法を考慮するなど、受検しやすい環境を整備する。

第Ⅱ部 現状報告

現状報告者紹介

現状報告者 1

渡辺 豊隆（わたなべ とよたか）氏

1972 年鹿児島県生まれ

〔教員歴〕

鹿児島県立鶴丸高等学校教諭（4 年間）

鹿児島県立加治木高等学校教諭（7 年間）

鹿児島県立加世田高等学校教諭（8 年間）

鹿児島県立大島高等学校教諭（3 年間）

鹿児島県教育庁高校教育課指導主事（現職）（1 年目）

〔主な教育活動〕

専門教科は数学

加世田高校で 4 年間，大島高校で 2 年間 進路指導部主任

〔その他の特記事項〕

日本数学教育学会所属

全国数学教育学会所属

現状報告者 2

廣瀬 辰平（ひろせ たっぺい）氏

1982 年山形県生まれ

〔教員歴〕

山形県立酒田北高等学校常勤講師（2 年間）

山形県立米沢興譲館高等学校教諭（現職）（13 年目）

〔主な教育活動〕

担任経験：正担任 5 年

分掌経験：進路指導課 13 年

2016 年度～2018 年度 進路指導主事

2019 年度 探究科長 兼 進路指導課副主任

教科：国語

現在 OPP（one page portfolio）を活用して，生徒の学習状況を把握し，より効果的な指導を目指し研究，実践中．

部活動：バスケットボール部（男子）

現状報告者 3

宮本 久也 （みやもと ひさや）氏

1957 年和歌山県生まれ

〔職歴〕

都立高校教諭 （2 校，16 年間）

東京都教育委員会で指導事務に従事 （16 年間）

東京都教職員研修センター研究部統括指導主事

教育庁指導部主任指導主事（高校改革担当）

教育庁学務部入学選抜担当副参事

教育庁指導部高等学校教育指導課長

教育庁指導部指導企画課長

等を歴任

東京都立西高等学校 統括校長 （6 年間）

東京都立八王子東高等学校 統括校長（現職）（2 年目）

〔主な役職〕

全国高等学校長協会会長 （2015～17）

全国普通科高等学校長会理事長 （2015～17）

文部科学省 中央教育審議会初等中等教育分科会臨時委員 （2015～17）

教育課程部会委員，教員養成部会委員，高等学校部会委員

文部科学省「高大接続システム改革会議」委員 （2015）

文部科学省 大学入学共通テスト検討・準備グループ委員 （2016～17）

大学入試センター運営審議委員 （2015～17）

現状報告 1：地方公立高校における整理と構え －入試制度変更への対応と成果と課題－

鹿児島県教育庁高校教育課指導主事

渡辺 豊隆 氏

〔講師紹介〕

庄司強特任教授(司会)：

時間になりましたので、これより現状報告をしていただきます。現状報告1「地方公立高校における整理と構え－入試制度変更への対応の成果と課題－」鹿児島県教育庁高校教育課指導主事渡辺豊隆先生、よろしくお願いいたします。

渡辺豊隆氏：

皆さん、こんにちは。鹿児島県教育庁高校教育課の渡辺と申します。本日はよろしくお願いいたします。

この話をいただいたのは昨年度のことです。当時私が鹿児島県立大島高等学校という離島の高校に勤務しておりました。本日は、この県立大島高校のときの話を中心に話をさせていただきたいと思います。

「地方公立高校における整理と構え」ということに対して、現在の取り組み状況とか不安感、あるいはこれまでの成果等についてまとめてお話しできればと思います。

なお、今日お話しする内容には、私個人の感想とか、考えとか、思いとかが入っておりますけれども、現所属である県教育庁の方針ではなく、あくまで私個人の考えですので、ご理解いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

鹿児島県立大島高等学校について

まず、大島高校についてですけれども、私今日東北に初めてお邪魔させていただきました。鹿児島県は南北に長いのですが、ここ(スライド3)に県庁所在地鹿児島市がありまして、奄美大島はここにあります。この離島の島に県立高校



が4校、特別支援校が1校ございます。大高(だいこう)と呼ばれておりまして、本年度創立118年を迎える地域の拠点校としての役割を持っているところであります。

お手元のレジュメ、レジュメと言ってもメモ用紙ですが、メモ用紙には1番、2番、3番、4番と番号をふったのですが、1番は、私の初任地である鶴丸高校、鹿児島市の進学校でした。2番の鹿児島空港の近く加治木高校というところが2校目です。3校目が薩摩半島南端の南さつま市にある加世田高校で、4校目が大島高校ということです。この4月から鹿児島市にある県庁に勤務しているところです。鹿児島県、南北に非常に長い県土でありまして、県内最北端の出水市から県内最南端の与論島までは南北600キロ離れていますので、青森から東京までとほぼ同じ距離があります。これを、転勤で、大体7年を標準として県本土、あるいは離島も含めて転勤します。

こういう離島も多く抱えている鹿児島県におきましての地方の公立高校の現状についてですが、大島高校はよくある普通科の進学校です。地域の拠点として大学進学者もいれば、就職者も

いるという学校になります。キャリア計画等も立てて、普通に一生懸命頑張っている学校です。これからしばらく普通の進学校ですよということを紹介するためのスライドが続いております。国公立大学で50名ぐらいにちょっと少ないぐらい、39ですね、を目指して頑張っている生徒が多いところです。

これ(スライド9)は平成30年度入試の結果です。ここ東北大学にも1人通っておりました。九州圏内がほとんどですけれども、北海道教育大学から沖縄の琉球大学、名桜大まで、北海道から沖縄まで全国にわたって進学している学校になります。私立にも通っておりますし、警察官、防衛省関係、公務員、民間企業につきましては、地元のガソリンスタンドとか、美容室とか、幅広く就職をしているところであります。

これ(スライド11)が、私が3月転出したとき卒業生です。国公立42名、最北は、今年は富山でした。富山大学から信州、茨城等々来て、名桜大、琉球まで含めて南北にわたっております。私立も関東、関西を中心として幅広く進学しております。

進路希望としましては、大体半分程度の生徒が国公立目指して入ってくるのですが、先ほどの現状から言うと、まだ改善の余地があるというところになります。

これ(スライド14)は平成30年度の学級数ですけれども、7クラス280名募集していますが、現状としては去年の2年生は6クラスで7クラスには満たなかったという、高校入試としてはほぼ全入というところになっております。

鹿児島県の進学校では、ほとんど朝課外を実施しております。7時25分から8時15分まで朝課外を実施しております。また、夏、冬の長期休業中はいわゆる課外というものも実施しております。これは土曜授業ではなくて、土曜講座、土ゼミというものも実施しております。1・2年生が6回、3年生は模試があるので3回という形に昨年度はなっておりました。

S T、総合的な学習の時間というものもあるの

ですけれども、こういうプレゼンテーション(スライド19)も含めながら、探究的な活動も幅広くやっております。

N P Sというのは大学の出張講義のことです。各大学から、離島ですが、来ていただいて、講座を生徒たちに聞かせるという取り組みをやっております。

大高未来塾、これはOBが来て就職あるいは進学等の心構え等について話をするという会で、トータルすると多くの学校がやっていることを大高もちゃんとやっているということになります。

大島高校の構え

今日の本題であること(スライド22)については、組織的な改革を昨年度いたしました。大高マナビゲーション委員会の立ち上げという組織の改編をしております。大島高校生の学びをナビゲーションする委員会ということで、独立した各種委員会として立ち上げております。それと、講演会、職員研修、I C Tの活用等について実施しております。

学びの蓄積についても、紙ベースで残したり、あるいはいわゆるe-Portfolioに入力したりということをしております。

ちょっとこれ(スライド30)データは古いですが、平成30年5月の段階で東北は1校もないのですけれども、西日本を中心として大学が入試にe-Portfolioを使いますということを発表しましたので、少し危機感を持って平成30年度は動きました。なぜかという、平成29年度の入試の受験生がこれだけ当たってしまっていた(スライド31)。うちの学校の現状として幅広い学力層がありますので、ちょうどその生徒たちが受験する大学が導入するということを公表しましたので、少し危機感を持って対応したところでした。

活用方法はそれぞれあったのですけれども、とりあえず対応するという形で、多くの生徒たちに入力を促しました。このポートフォリオに

については、大高の職員でも、「それは教育の機能の一つだね」と言う先生もいれば、「それは入試のシステムだね」という先生もいます。私は両方をバランスよく理解してほしかったのですが、ポートフォリオという、JAPANE-Portfolioと直結される先生もいるし、いわゆる学びの蓄積と認識される先生もいますので、職員研修でも去年はその両方とも、つまりきちんと蓄積するという教育の機能を確保しつつ、最終的には出願時にきちんと提出できるようにしてほしいということをお願いしたところでした。

きのう、ちょうど奄美地方は梅雨入りしました。日本で一番早く梅雨入りしましたが、こういう特性を離島の格差、離島のハンデと言わず、特性を生かして取り組んでいこうと考えている大島高校であります。

対応のきっかけ

大島高校は地域の拠点校ということもありまして、さまざまなことを求められております。地域の期待、あるいは保護者の期待等も多くて、各種いろんなことをあれはどうなっている、これはどうなっていると言われます。生徒も日々一生懸命取り組んでいるところですが、職員もいろんな改革に対応しながら取り組んでいるところです。

この中で私が危機感を持ったのは、2015年3月のある雑誌でした。ここにお集まりの皆様方にはよくご存じかもしれませんが、当時この記事（スライド39）がきっかけでした。大学入学希望者学力評価テスト（仮称）、高等学校基礎学力テスト（仮称）について、最も負担が大きいのは、両方のテストを受けることになる中堅校の生徒たちであるという、この記事（スライド41）が非常に心に響きました。この段階では基礎テストが高2、高3で2回ずつ、評価テストを高3で2回、合計6回のテストも想定されるということが、この雑誌に載りました。そこら辺も踏まえて、非常に危機感を持って情報収集したり、これらの得た情報をそのまま生徒に伝えるのでは

なくて、きちんと教員の側で解釈、消化をした上で生徒に伝えたりしました。

そうした中、先ほど倉元先生からありましたけれども、今年の正月、三位一体の改革の中で、普通科高校の抜本改革というのが新聞に出ました（スライド42）。ちょうど昨日5月14日、教育再生実行本部から、第12次提言「偏差値指導見直しへ」が出されました。入試改革をしようとしている最中にもかかわらず、足元の普通科教育の根本が揺らごうとしています。そういう制度改革のときに、しっかり見通しを持って、しかも振り回されないようにしていくことが、教員としては必要だと思っています。きっかけになったこの図（スライド40）を頭に入れながら、ここから現状までどうやって動いてきたかということ踏まえながら、方向性をきちんと見ていきたいと考えているところです。

大島高校での整理と対応

今日の話の中で、中心となる入試改革について、大きく言うと3点だと思います。大学入試共通テストの改革、それと個別試験の改革、これについては各種、理数分野、主体性分野とか、いろんな事業が進んでいますので、ここについても注視していきたいと思います。それと、英語の外部検定試験の導入、これについても、この4月も大高にとっては大きなトピックもありました。

大高を出るときにお願いしてきたのは、幅広く対応してほしいということをお願いしてきました。一般入試、推薦入試、AO入試、それぞれ名前が変更されますが、この幅広く、求められる力に対応するということ、それと奥深さですね。記述の導入とか、思考力、判断力、表現力、4技能含めて幅広く、深く対応するのが地方の公立高校に求められています。

それに加えて、進学指導、受験指導の早期化というのが危惧されます。今年の2年生から例年だと3学期に実施していたいろいろな検討会を、2年生の夏休みにしてほしいとお願いしてきました。これまでは苦手分野を克服するというの

が主眼でしたけれども、今後はできるだけ強みを伸ばすというのを主眼として、そのためにも早期化して、2年の前半使って、自分の強みを伸ばしてほしいということをお願いしました。

これ（スライド45）は、私が見た中で、ちょうど割合としては合っていますが、国公立の進学を考えているセンター試験を受ける生徒、国公立ですね。あと私立を専願している生徒、それとセンター試験を受けるんだけど使わないという生徒が大体4分の1ずついます。大高にも専門学校とか、就職で決まっているんだけど、センター試験を受けるという生徒が大体4分の1、25%程度います。もしこの生徒たちが大学入学共通テストを受けないとなると、この部分（スライド46）の受験者層がごそっと抜けてしまいます。大高のセンター試験の英語の度数分布はきれいな台形をしています。正規分布にならないです。こういう生徒もいるし、こういう生徒もいるので、おしなべるときれいな台形になってしまいます。なので、こういう生徒たちが対応できるかどうかも含めて、現2年生が大学入学共通テストを受験するかどうかについても、大高としては大きな課題と思っているところです。共通テストを突破した後、さまざまな事業（スライド47）で出てきた最新の情報を仕入れながら取り組んでいるところになります。

大高としては、調査書の電子化、教育の情報化とかいうところについても取り組みながら考えております。また、いわゆる入試問題というのは選抜のツールである一方、過去問演習に使われる教材という側面もあると思いますが、先般から出ている共通テストの試行問題等については、過去問演習として使うという発想から脱却をして思考方法とか考える力、発想力を含めて、そういうところまできちっと対応する必要があるということを考えているところです。

それと、最近各大学が入試制度の方針として募集単位の大括り化というのを打ち出してきているところが増えてきています。これまで高校の進路指導としては、志望へのこだわり、よくア

ドミッション・ポリシーを調べなさいとか、こだわりを持ちなさいとか言ってきましたが、大括り化をされると、もしかしたら専門進級時に自分の希望しないところに回されるかもしれないというところもあるので、幅広いレジエンス力を持ってほしいということで、少しここについては進路指導の方針を考えてほしいというのを言ってきたところでした。スペシャリストを目指すのか、ゼネラリストを目指すのか、これは振り幅の問題だと思うのですが、バランスの問題として、きちっと時々状況に対応してほしいということも生徒に伝えてあります。

入試は選抜からマッチングへと言われますが、情報提供しながら、そういうところへきちっと対応していきたいと思っています。こういう3つの大きな柱に大高がどういう整理をして構えてきたかということをお知らせさせてもらいました。

さらなる変化に備えて

私としては、情報は必ず1次情報に当たると。受験産業の解説記事については、読みやすいところもあると思うのですが、商品とかサービスのPRも入っていますので、振り回されないように、きちんと何々答申とか何々提言とかに当たりたいと思っています。

もう一つは、大高、奄美大島という地理的な、現実的な現状もあって、生徒や保護者の経済的負担をできるだけ減らすということもあって、出てきた情報を全て渡すのではなくて、取捨選択、消化しながら渡したいと思っていました。方針としては、不安を煽らず、恐れず対応するというので、先生方のほうにも進路指導通信とか、そういうのを配付しながら、時期に応じて考えているところです。

最近、岩手県立大学が入試変更についての予告を出されましたけれども、この太字にしてある、「地方において高校生に等しく認定試験を受験する機会が確保できるか、受験料や会場までの交通費など認定試験への経済的負担が多いこ

となど、不安を抱えたまま受験することを心配した」という文章（スライド 53）は、大高によく当てはまると思います。こういうところもしっかり対応していきながら、3月に出された離島僻地に対応するという措置（スライド 55）に大高は入っていますので、こういうところも最新の情報を踏まえながら取り組んでいきたいと思っています。

私の座右の銘ではないですが、早く動いているものは見えないかもしれませんが、自分も動けばきちんと見えるというのを踏まえて、最新の情報等については仕入れながら取り組んでいきたいと思っていますところでは。

少し早口になりましたが、20分という時間をいただきましたので、これで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

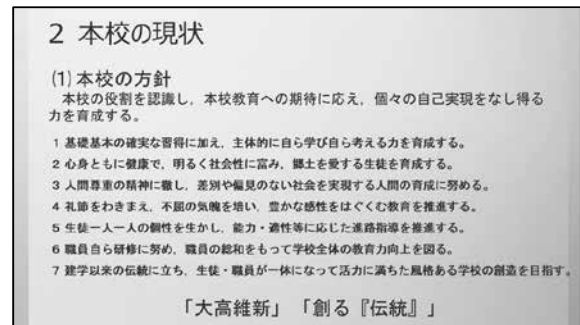
庄司強特任教授(司会)：

渡辺先生、ありがとうございました。質問等につきましては、お手元の質問票をご利用ください。

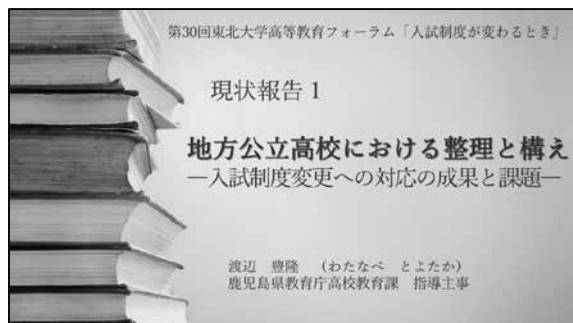
資料



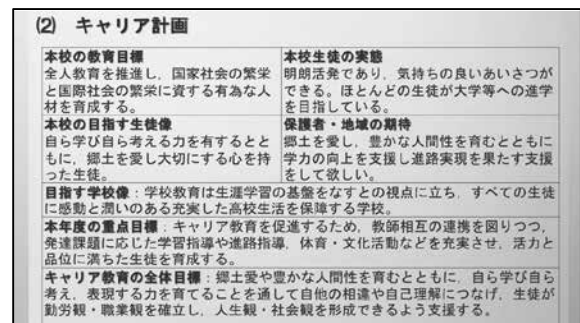
1



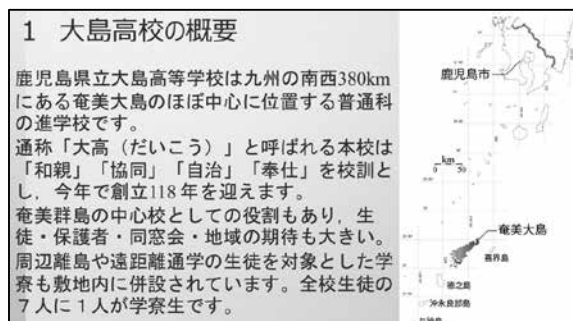
5



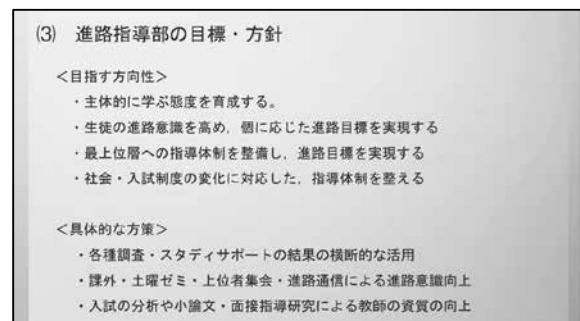
2



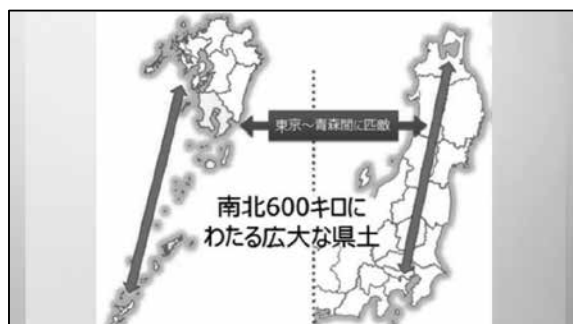
6



3



7



4

(4) 卒業生状況

数字は延べ数、()内は既卒者

	平成30年	平成29年	平成28年
大学			
国公立	39 (3)	51 (7)	52 (4)
私立	162 (8)	176 (12)	122 (10)
短期大学	20 (0)	14 (0)	21 (0)
準大等	2 (0)	1 (0)	1 (0)
専門学校等	77 (0)	71 (0)	66 (0)
合 計	300 (11)	313 (19)	262 (14)

8

9

区分	学年	1年		2年		3年		合計	
		男	女	男	女	男	女	男	女
大 学	国立	59	45	72	79	56	42	187	205
		124	(48.1%)	151	(64.8%)	118	(44.3%)	392	(51.7%)
	私立	18	20	19	14	38	36	75	70
		38	(14.7%)	33	(14.2%)	74	(27.7%)	145	(19.2%)
	短大	6	13	0	9	2	12	8	34
		19	(7.4%)	9	(3.9%)	14	(5.2%)	42	(5.5%)
専門学校		19	31	14	16	16	29	49	76
		50	(19.4%)	30	(12.8%)	45	(16.9%)	125	(16.5%)
	民間	3	11	0	0	0	2	3	14
短大		14	(5.4%)	0	(0.0%)	2	(0.7%)	17	(2.2%)
		9	4	8	2	12	2	29	8
	公務員	13	(5.0%)	10	(4.3%)	14	(5.2%)	37	(4.9%)
合計		114	144	113	120	124	143	351	407
		258		233		267		758	

13

10

14

10

14

11

15

15

12

	1組	2組	3組	4組	5組	6組	7組
1 学年	習熟度 1 学級						
2 学年	理系（習熟度 1 学級）			文系（習熟度 1 学級）			
3 学年	理系（習熟度 1 学級）				文系（習熟度 1 学級）		

時期	日 数	期 間
夏季	1・2年：12日間 3 年：15日間	【前章】1・2年7月23日（月）～7月31日（火）7日間 3年 7月23日（月）～8月3日（金）10日間 【後章】8月20日（月）～8月24日（金）5日間
冬季	4日間	12月25日（火）～12月28日（金）

	②番	1+②番
S・H・R	8:20~8:30 (10)	
1校時	8:30~9:20 (50)	
2校時	9:30~10:20 (50)	
清 掃	10:25~10:35 (15)	
3校時	10:45~11:35 (50)	
4校時	11:45~12:35 (50)	
昼 食	12:35~13:20 (45)	
5校時	13:20~14:10 (50)	
6校時	14:20~15:10 (50)	
放 学	15:30~16:40 (70)	

16

(3) 土曜講座（土ゼミ）

① 目的

ア 土曜日を活用し、通常の授業では不十分な箇所や発展的な内容を補充する機会とする。
イ コース制や習熟度別講座を実施することで、学問へ誘ったり、基礎基本を定着させたりする機会とする。

② 実施日

ア 第2・4週の土曜日に実施することを原則とする。
また、該当の土曜日に模擬試験がある場合には、土曜ゼミを中止する。
イ 実施については、学校行事との兼ね合いを考慮して、教育効果が図れるような日程とする。
ウ 今年度は1年6回、2年6回、3年3回実施する。

(6) 大高未来塾

本校では、生徒の進路意識高揚のために、本校卒業生の方々をバネリストとして招き、「大高未来塾」と題し、生徒との質疑応答によるディスカッションを開催しています。



17

21

(4) S T (Success Time)

本校では1、2年生に職員が自分の教科に関するものや特技を生かした講座を開設し、生徒が受講したい講座を選んで毎週講座を受けるというシステムをとっている。このシステムにより、「主体的な学び」および「深い学び」が期待される。奄美大島の人々や伝統文化を大事にする態度の育成を図っている。また、講座内に1、2年生が混在し、学年をまたいでグループ活動などが生まれ、部活動以外での先輩、後輩の関係もできくる。ある講座では、数学の未習内容である「ベクトル」を1、2年生混在のグループで共同学習し、その過程で2年生しか学習していないような内容が出てきたときは2年生が1年生に教えるなどして、学びを深めるようなことを実践している。その他には、普段話を聞くことのできない大学の教授に來校してもらい、生徒に講義していただいたり、質問に答えてもらったりする講座もあった。さらには、海外の大学生と交流を持つような機会を設定し、英語や異文化についての理解を深めるような講座もあった。年度末には各講座において、研究内容のレポートを作成し、1年間の総括を発表し、プレゼンテーション能力も身につけられるように取り組んでいる。講座内での発表会を実施する。さらに、各講座の代表のなかで良いものを、全体発表会で発表させる。

4 高校教育改革，高大接続改革への対応

(1) 大高ナビゲーション委員会の立ち上げ

(2) 講演会、職員研修の実施

(3) ICTの利活用

(4) 学びの蓄積（振り返りの機会の充実）

18

22

- ・ 将来の職業研究、大学・学部研究を通した進路意識の醸成
- ・ 奄美大島の抱える問題点に正面から取り組む態度の育成
- ・ 講座別の研究を通し、各研究をまとめ、年度末に発表会の実施
- ・ 研究過程で、積極的な外部人材の活用
- ・ 講座例「ネリヤカナヤ創造PJ」「奄美大島の固有種と外来種」「H&H ハブと人」「つながる数学」等



4 高校教育改革，高大接続改革への対応

(1) 大高ナビゲーション委員会の立ち上げ

- ⇒ 「主体的・対話的で深い学び」についての研究・実践
- ⇒ アクティブ・ラーニング研究指定校
- ⇒ 相互授業参観など、既存のシステムを活かす



19

23

(5) NPS (New Perspective Seminar)

文理選択や学部学科研究の契機となり、格調高い大学の出前講義による進学意識の高揚を図るために、普段とは違う大学形式の講義（90分）を2講座受講し、新しい視点を獲得し、自分たちを取り巻く諸問題に果敢に挑む態度を育成する。



4 高校教育改革，高大接続改革への対応

(2) 講演会、職員研修の実施

アクティブラーニング研究開発支援プログラム



20

24

29[illegible]

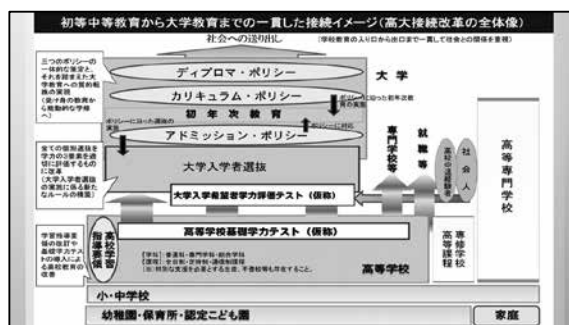
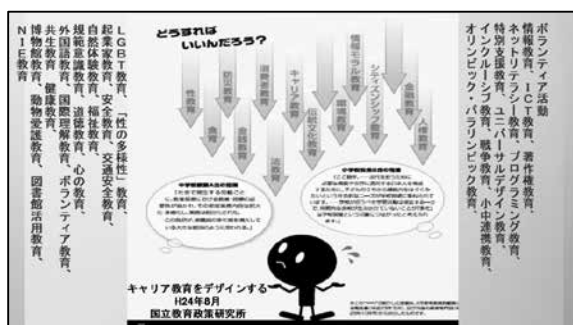
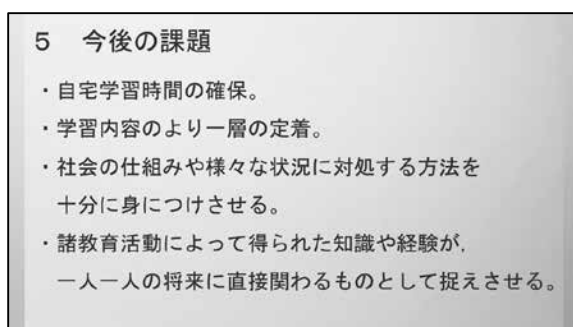
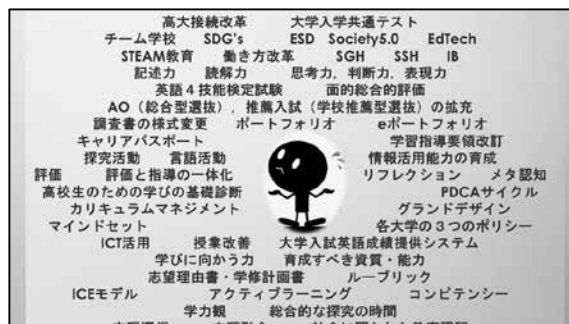
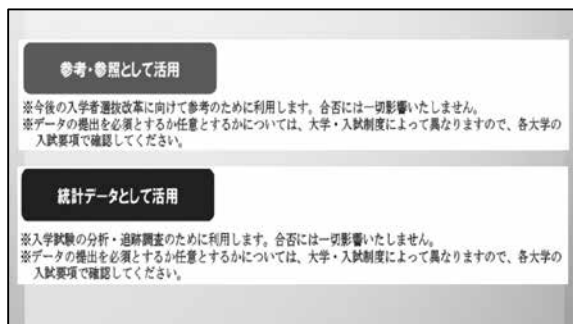


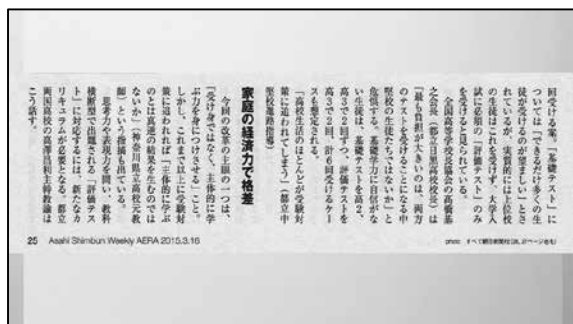
私は専ら、奄美大島で養護士として法教育分野を進めていきたいと考えています。【岡村明美さん】



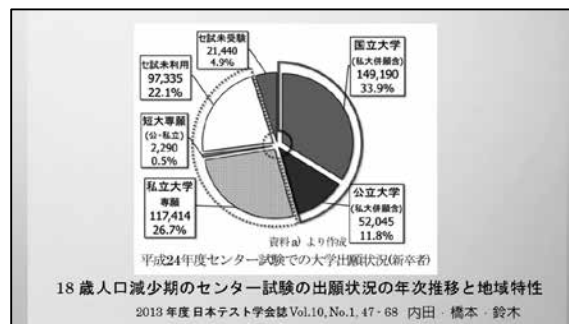
31

設置区分	都道府県	大学名	入試制度
国立大	群馬	群馬大学	平成31年度群馬大学推薦入試試験
国立大	大阪	大阪教育大学	センター試験を課さない推薦入試（一部の専攻・コースで利用）
国立大	大阪	大阪教育大学	センター試験を課す推薦入試（一部の専攻・コースで利用）
国立大	大阪	大阪教育大学	学部一般前期入試（一部の専攻・コースで利用）

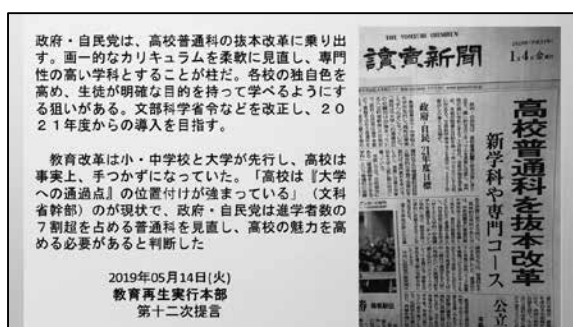




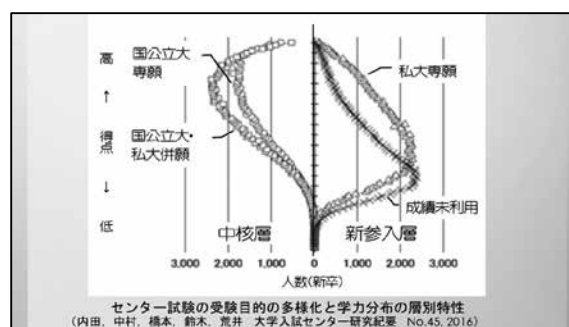
41



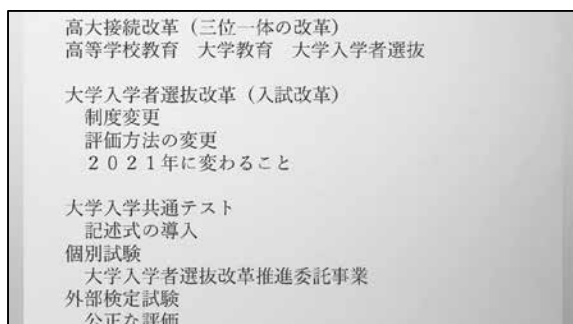
45



42



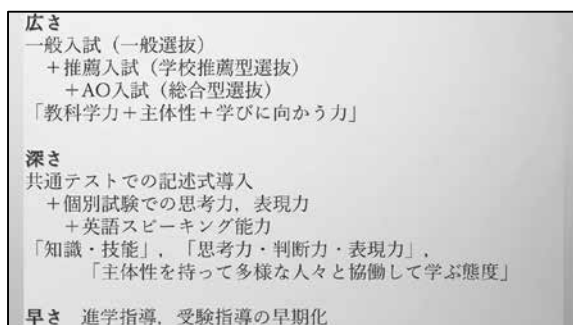
46



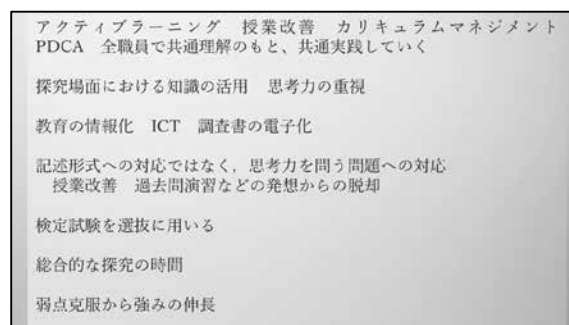
43



47



44



48

大括り化
志望のこだわりを APを調べる

スペシャリスト ゼネラリスト

マッチング

49

2021 年度岩手県立大学入学者選抜の変更について（予告） 平成 30 年 11 月 26 日
岩手県立大学教育支援本部

高校生の皆さんへ（学長メッセージ）

本学では、2021 年度入学者選抜の一般選抜においては、大学入試センターが認定した英語の資格・検定試験（認定試験）を利用することを本年 4 月に公表しましたが、この方針を変更し、認定試験を利用しないこととしました。

その理由は、岩手県内を含め地方において、高校生に等しく認定試験を受検する機会が確保できるか、受検料や会場までの交通費など認定試験への経済的負担が多いことなど、不安を抱えたまま受検することを心配したためです。また、岩手の高等教育機関として地域の未来を担う人材育成を使命とする本学として、認定試験を受検しなかった場合でも、本学を受験することができるようにしたいと考えました。なお、2022 年度以降の入学者選抜については、対応が変わる場合は事前にお知らせします。

本学においては、入学者選抜では英語をこれまでどおり重視することとしており、入学後の教育においても英語は大学で学ぶ基礎をつくる大切な科目のひとつに位置付け、引き続き 4 技能のバランスのとれた英語力の育成を図っていきます。高校生の皆さんは、高校においてしっかりと英語の基礎学力を身に付けて、本学を志願してください。

岩手県立大学学長 鈴木 厚人

53

大学入学共通テスト

個別選抜における多面的・総合的評価

民間の英語外部検定試験

50

大学入学共通テスト実施方針（追加分） 平成30年8月10日
平成31年3月28日

大学入学共通テスト実施方針（平成 29 年 7 月文部科学省公表）では、「7. 英語の 4 技能評価」において、民間の資格・検定試験を活用するとともに、資格・検定試験のうち、試験内容・実施体制等が入学者選抜に活用する上で必要な要件を満たしているものを大学入試センターが認定し、その試験結果及び C E F R の段階別成績表示を要請のあった大学に提供することとしており、具体的には大学入試センターにおいて、参加要件を満たしていることが確認された民間の資格・検定試験が参加する「大学入試英語成績提供システム」を新たに設ける予定である。同方針で明らかにされていなかった事項につき、次のとおり定める。

1 高校 2 年時に大学入試英語成績提供システム参加試験（以下「参加試験」という。）を受検し、文部科学省が公表している C E F R 対照表の B 2 以上に該当する結果を有する者で、次の①または②のいずれかの負担を軽減すべき理由があり、かつ、高校の学びに支障がないと学校長が認めた者は、高校 3 年の 4 月から 12 月の 2 回に代えて、その結果を活用することができる。

<負担を軽減すべき理由>

① 非課税世帯であるなど経済的に困難な事情を証明できること

② 離島・へき地に居住または通学していること

54

情報は 1 次情報にあたる

受験産業の解説記事は読みやすいが、商品やサービスの PR

生徒・保護者の経済的負担増を抑制する

51

離島・へき地（通学）高等学校等一覧表
（平成30年8月10日文部科学省公表）における、「負担を軽減すべき理由」のうち、「離島・へき地に通学」に該当する高等学校等一覧

273 鹿角島 野田女子高校 出水市野田町名 5 4 5 4

274 鹿角島 出水高校 出水市西出水町 1 7 0 0

275 鹿角島 出水工業高校 出水市五方町 3 5 8

276 鹿角島 鹿角島高校 鹿角市久保町宮之洞 2 4 9 1

277 鹿角島 大島高校 奄美市名瀬安部町 7 1

278 鹿角島 奄美高校 奄美市名瀬安部町 1 1

279 鹿角島 大島高校 奄美市立利町中久 3 5 6

280 鹿角島 古仁屋高校 大島郡柳井町古仁屋 3 0 9 1

281 鹿角島 喜良高校 大島郡喜良町喜良 2 3 6

282 鹿角島 神水良部高校 大島郡知多町余多 2 4 1

283 鹿角島 与論高校 大島郡与論町紫花 1 2 3

284 鹿角島 出水商業高校 出水市明神町 2 0 0

285 鹿角島 鶴岡高校 阿久根市栄瀬川 1 8 0 0

286 鹿角島 徳之島高校 大島郡徳之島町亀津 7 8 4

287 鹿角島 種子島高校 西之表市西之表 9 0 0 7 1

288 鹿角島 種子島中央高校 鹿毛郡中種子町野間 4 2 5 8 1

289 鹿角島 中種子養護高校 鹿毛郡中種子町野間 0 5 8 4 4

290 鹿角島 出水養護高校 出水市文化町 9 6 6

291 鹿角島 大島養護高校 大島郡龍郷町青地 1 9 1 2 1

292 鹿角島 出水中央高校 出水市南出水町 4 4 8

293 鹿角島 徳南第二高校 大島郡天城町天城 2 9 7

294 鹿角島 国久島おおぞら高校 鹿毛郡国久島町平内 0 4 番地 2

55

不安を煽らず
恐れず対応する

52

56



57



58

現状報告 1

地方公立高校における整理と構え

——入試制度変更への対応の成果と課題——

鹿児島県教育庁高校教育課 指導主事 渡辺 豊隆

(前鹿児島県立大島高等学校 教諭 進路指導部主任)

0 はじめに

1 大島高校について

(1) 地方公立高校の役割

(2) 地方公立高校のよさと課題

2 大学入学者選抜改革

(1) 大学入学共通テスト

(2) 個別選抜における多面的・総合的評価

(3) 民間の英語外部検定試験

(4) その他

教育の情報化 (Japan e portfolio , 調査書の電子化)

募集単位の大括り化



3 大島高校への影響

- (1) 広さ，深さ，はやさ
- (2) 地理的格差，経済的負担
- (3) 進路ストーリーの再構成

4 大島高校での構え

- (1) 授業改善
- (2) カリキュラムマネジメント
- (3) 情報収集，意識改革，組織充実

5 これからできること

6 まとめにかえて

現状報告 2：入試制度の変更と現場で思うこと —今までとこれからを考える—

山形県立米沢興譲館高等学校教諭

廣瀬 辰平 氏

〔講師紹介〕

庄司強特任教授(司会)：

続きまして、現状報告 2「入試制度の変更と現場で思うこと—今までとこれからを考える—」山形県立米沢興譲館高等学校教諭廣瀬辰平先生、よろしくお願いいたします。

廣瀬達平教諭：

皆さん、こんにちは。

まず、私のスライド、皆さんのお手元に資料としてあるかと思いますが、その後にかなりスライドに手を加えたので、順番が違っていたりして見づらいかもしれませんが、ご容赦ください。

それでは、まず簡単に自己紹介からです。私は平成 17 年から講師として教員をしまして、平成 19 年から新規採用ということで興譲館高校に務めております。そこからずっと興譲館高校にいますのですが、ご覧のとおりです。昨年度まで 3 年間進路指導主事、進路指導課の課長ということで進路関係の仕事をしておりまして、今年度から探究科の長ということで、進路指導と兼任しております。

資料にも書いてあるのですが、本日私誕生日で、昨年この話をいただいたときに・・・

(拍手)

あつ、ありがとうございます。うれしいです。私 3 人娘がいて、今日長女から、「お父さん、今日会えないので、誕生日ちゃんとおめでとう言えないから、あした言う」というなぞの励ましを受けてきたところです。では、進みます。



高大接続改革に対して

今日お話したいのが、まず私の個人的な立場の話と、学校の紹介です。学校の紹介も 3 番の話をするために、ちょっと問題意識というか、どういう考え方を持って何をしているかという話をしたいと思います。3 番目を具体的取り組みとしましたが、それほど何か特別なことを紹介するというよりは、こういうことが大事だと思うので、こういうことをやろうと思っていますとか、こういうことをやっていますという、ねらいと実践の話をしていきたいと思います。

スライド枚数が多いので、ちょっと足早に行きたいと思います。

まず、毎回私も人の話を聞くときに、教育改革に対してどういうスタンスで見ているのかというのが気になるので、私自身の立場なのですが、はっきりいうとよくわかりません。わからないままこの場に立っているので、お話も拡散すると思います。なぜよくわからないかという教育というのは現場が全てだと思うので、我々でしたら生徒とどういうふうに向き合うかというのが全てだと思っています。入試制度の変更はスライドのように、整理できるかと思っています。ただし、これだけで

はなく、特に今回の改革は、これ以外のこともいろいろ絡んでいるなと思っています。簡単に整理すると、こういうふうに絡んでいるわけですが、特にこの教員がどういうふうに生徒や保護者に伝えられるかとか、かみくだいて実践できるかというのが全てだなと思っています。

去年まで、特に今の現2年生に進路の話をする機会が幾つかありました。その時に、それぞれ保護者に対して、生徒に対して、あるいは同僚に対しては、今回の制度改革について話し方を変えていました。まず保護者は、記載のとおり、協力者でいてもらうための話し方をしています。生徒については、学びに向かう動機づけとか、何を頑張ればいいのかというのを明示することが、生徒の高校生活3年間で力をつけることになると思うので、そういったことを大事に話してきました。ただ、教員間で当然動機づけの方法とか、スタンスとか、受け取り方というのは、入試制度改革に限らずスタンスはいろいろあると思うので、だからこそ教員集団の情報共有というか、理念の共有は非常に大事ななと思っています。

こういう議論をするときに、入試改革、高大接続改革にかかわって、これまでの指導が間違っていて新しい教育が正しいとか、知識が大切か思考力・判断力・表現力が大切かとか、安直な二項対立の議論にならないように、何が大事かというのを、目の前の生徒を大事に議論していく必要があるなと考えております。なので、本質的なところは制度が変わっても、学習指導要領が変わっても同じだと思いますので、ここは振り回されずにしていかなくちゃならないなと思っています。

本校の問題意識

本校の紹介なのですが、話したいことが多かったんで、いろんな情報を省いて基本的なことだけお伝えします。本校は昨年度から設置されたので、1, 2年生に探究科2クラス

があって普通科が3クラスあります。3年生は理数科1クラスと普通科4クラスという運営です。2年生になると文理に分かれますが、2年生の探究科は、人数バランスが悪いので、ホームルームは文理混在でクラスを運営しています。授業だけそれぞれ違う授業を受けているので、時間割がすごくおもしろいです。教室の時間割が2種類並んでいます。

加えて、本校はSSH指定校です。平成29年度に継続指定を受けました。継続申請する際にいろんな議論が校内でなされていたのですが、これはSSHに申請するからという理由だけではないのですが、生徒の学びの中でも物量課題学習ですね。そういったもので生徒が何を得ているのかとか、本当に学んでいるのかとか、でも具体的にじゃあそれをやめたらどうしたらいいのだという話だったりとか、あと私は進路やっていましたので、進路指導とSSHって別なのかとか、そんな議論がいろいろありました。また、進学指導として一般的にほかの学校でもやられているようなことをやっていたかと思います。SSHのほうでもSSHのことがありました。

発想としては、ビルドがすごい多くて、忙しい学校だなとなっていました。そこでスクラップする際に、どれかをあきらめるというネガティブな発想になりがちなのと、こういうネガティブな発想になると、当然例えばさまざまな研修やイベントは受験に使わないので縮小するかとか、そういった話になりがちです。SSH継続申請の時期とちょうどこの探究科設置校に指定されて、準備をするのが重なったのが平成28年度でした。この2年ぐらいからずっと準備は進めてきたのですが、こういう議論を平成28年度は具体的に決めていかなくてはならない時期で、高大接続改革、新学習指導要領を見据えた、本質的なカリキュラムデザインの議論をするというような年でした。

SSHとキャリア教育

そこで、簡単に言うと、キャリア教育にSSHの諸活動を位置づけて、対象生徒は全員に拡大しました。理系生徒以外もSSHの対象になっていて、課題研究も文系生徒もやっていますし、2年生は全員やります。全職員体制で指導体制をとっています。そんなふうに、変えました。それがこの図です。3年間の流れのイメージとしては、1年時が体験的なことを中心にしたインプットで、2年時が自分で考える、3年時が発表するというのが大まかな流れで考えています。

特に1年時のインプットとこの2年時の探究の指導体制についてです。これを1年時から、ここは資料を見ていただいたほうが見やすいかと思うのですが、従来こういう学部、学科系統別に担当教員というのを決めていて、これを小論文指導であったり、推薦AO入試の出願書類指導に使っていた組織体制があったのでした。これを出口指導だけではなくて、1年時から3年時までのキャリア教育に使おうとなって、見ていただくとわかるのですが、これは個人名を出せなかったのが教科名にしたのですが、いろんな教科が混ざり合って1つのコースを設計しています。先ほど言った1年生のコース別講義研修ですね。これは年に8回、6、7、8、9月の前期4回と10、11、12、1月の後期4回です。で、前期、後期で4回ずつ、12コースあるのですが、その内容を将来的なことを見据えて、各先生方から設計してもらっています。

その様子です。これはただの記念写真ではなくて、東京の研修の様子です。この生徒たちは、所属しているコースで、フィールドワークをしています。この人たちは観光客なのですが、この人たちにインタビューをしているときに撮った写真です。

この写真についてです。興譲館高校は米沢にあります。米沢には米織という伝統工芸があるのですが、服飾系の博物館ということで、東京の施設に行きました。これは山大工学部

にお邪魔して、実際に研究の内容を教えてください、研究室を案内してもらったりしました。こんなことを通して、自分が所属しているコースについて、学問や社会について体験的に知るということをやっています。

2年時になると、課題を自分で設定して、情報収集して発表するという流れをとっております。それも同じようにコース毎の指導体制でやります。今年度から動くのでこれからなのですが、そういうふうにやろうと考えております。

入試制度改革への取り組み①

具体的な取り組みを少しお話しさせていただきたいと思います。

まず、大きく3点です。共通テストと英語4技能と主体性の評価という3点を核に話をしたいと思います。加えて、私国語科の教員なんですが、その話を少しだけさせてもらいたいと思います。個別大学入試については多様過ぎて、この場で統一したお話ができないので、この3点に絞らせていただきたいと思います。

共通テストについては、私が個人的に思っているのは、今までやってきた問題分析と授業とか、指導への落とし込みとか、生徒を引きつける言語的な支援とか、そういうことをやるというのに尽きるかなと思っています。たしかに問題形式が変わるので、その形式変更には耐えられない生徒も中にはいます。それは問題演習等でクリアしていかなければならないかなと思っていますが、それよりも普段の授業に落とし込むような分析が必要かと考えております。ただ、過去問がないので、試行調査の分析などをやる必要があると。あとは、今日の朝一の会議でしゃべってきたことなのですが、職員研修は本校6、9、12月と3回やっているのですが、その3回目では1期生が3年になるところの普段の授業とか、定期テストの振り返りをするような校内研修を予定しながら、ビジョンを共有した

り、ゆっくり考える時間をとりたいなと思っています。

次に、英語4技能については、基本的には英語科にいろいろ考えていただいていて、昨年度からスピーキングの評価を面接形式で行ったりとか、そういうことをしてもらっています。その辺の情報は多分資料がないと思いますがご容赦ください。

入試にかかわる準備としては、次年度使うことになるであろう検定試験を、志望大学に向けて、受検させます。さらに、戦略や考え方を生徒や保護者にも共有したいと思っています。しかし、先ほどの岩手県立大とか、さまざまな大学が当初示した方針を変えていますので、これも不透明過ぎて、生徒、保護者にうまく伝えられるか、ちょっとわからないところがあります。保護者には必要な情報をしっかり伝え、大丈夫だと言い続けたいと思っています。

大学によって、学校が英語力証明をすればよいという大学もありますが、このことについての対応がちょっとよくわかっていません。英語力証明だけすればいいというのが、大学の様式があったりする場合の基準づくりが校内で必要なかなと思っていますが、特に深く考えていない状況です。

入試制度改革への取り組み②

主体性の評価、特にポートフォリオについてお話ししたいと思います。私もこれを意識して進路指導はしてきたのですが、これでまず立ち位置として入試へのアドバンテージが第一義ではないということを確認したいです。もちろん活動実績が入試に有利に働く大学もありますし、戦略として必要であるというのもわかりますが、それがあるので生徒に何かさせる、書かせるというのは、本来の指導ではないかなと思っています。ただ、教員としては生徒に何か頑張った結果を使える、もしくは評価される、生徒もそれを望んでいる入試があるのであれば、それは積極的に使える

ようにすべきだと思っています。なので、教員が情報を持っている必要はありますが、それがあきではないと考えています。

また、活動そのものが学びの動機になるケースがあります。先ほどの本校の2年が取り組む探究学習で、物理選択者が生物の研究をしていました。結果的に工学部の中のバイオ系の領域に進んだりとか、そういう生徒も出てきています。そうやって、活動そのものが学びの動機になって前向きに受験に向かっていくというケースもあるので、そういったふうに捉えるのが主体性かなと思っています。

これは教科指導において、センター試験の点数をとれるからという安易な指導をなるべく避けて、なぜその学びが必要なのかなという説明をしようとしてきたこれまでの指導と同じなのかなと私個人的には考えています。

ポートフォリオと形成的評価

続いて、ポートフォリオについてです。これも履歴を残しておくことが目的ではなくて、その成長を自分で振り返ることが目的だと思います。なので、事実の羅列では意味がありません。加えて、主体性評価とは形成的評価が全てだと私は思っています。大学入試という接点の評価をする際に使うのが妥当なのかどうかというのは、私は専門ではないので、それはわかりません。でも一番は形成的評価だと思っているので、その本質は外さないように考えていきたいと思っています。

例えば、教科学習であれば、こういうふうに言葉にして振り返って、また自身にフィードバックされていきます。進路的な、もしくは体験的な学びであれば、こんなふうにやっていった結果、言葉にして振り返って、また次にと、こういう繰り返しが深まっていくのがポートフォリオの機能なのかなと思っています。今までのイメージだと、様々なイベントは、とにかく勉強のモチベーションを上げるためのカンフル剤で、最終的に学習に結びつけばいいというイメージだったと思

います。しかし、言語化を繰り返すことを通して、いろんな経験をつなげて、大学に向かって、さらにそれがその先につながるような動機付けになる。そのようなものとして言葉による振り返りというものがあるべきかなというイメージで捉えています。

これは、東北大学の宮本先生がこの文献をもとにつくられたものなのですが、動機づけの中でも4分割、やること自体が目的である場合と、学びが手段であって、何かその先にある場合、人からやらせられる、自分でやる、で分けています。一番大切なのがこの社会化された外発的動機づけで、社会に出てから一番必要だし、大学入試もこれなのかなと、私もこの話を聞いてすごく納得しました。そこでまず、大学に向かう意欲を深いレベルで高めていくのが大事だ、というスタンスで私はいます。

これは、現2年生が昨年度の12月と3月に志望理由を書いたものを入れたものなのです。2人分です。こちらは多分1,000字ぐらいで、こちらは四、五百字です。ちょっと大きくすると、この生徒は自動車の自動運転に興味があって、数学と物理と英語と法律を学びたいということが書いてあります。この文章の背景にはいろいろあります。それまでの様々な活動の振り返り、講演会の振り返り、学習の振り返りなど、多くの振り返りがあるのですが、それを進学という柱で自分のストーリーにするという目的で志望理由書を書かせました。これは、書かせて、あと教員が調査書に記載して終わりではなくて、指導に使わないと意味がないと思っています。例えば、探究のテーマ設定のときに面談に使う資料として使いたいと思います。また、2年の4月時点での志望理由を全員にプリントアウトして配付しました。2年の出発点はここだよとして、1年間でどのように深まるかいとうのを見せていきたいなと思っております。この志望理由書を各コース担当の教員に面談の資料として使ってもらうことで、形成的評価、

もしくはポートフォリオの機能をうまく回していきたいなと思っております。時間がなくなってきましたが、そういうことで、形成的評価としての活用がすごく大事だなと思っております。

よりよい教育を目指して

これは資料にないので前を見てもらえればと思います。本校の国語科では、ワンページポートフォリオというものを使っています。教科会とか、あるいは雑談のように、その記載内容を見て、教材とか、指導とか、生徒の様子をよくしゃべったりしています。授業の前後で、実際授業でどうだったなんて話をしたりとか、生徒の力、例えば4月なのでよくわからなかったりすると、その生徒のことを知っている先生に聞いたりとかしたり、そういったものを中心に、関心、意欲、態度の部分の評価しています。こういうことが主体性評価では大事なかなと思っているので、こういったことを積み上げていきたいなと思っています。

もう1点、これは未来創造会議という会議で、本校では9月と3月にやっているのですが、こんな情報を全部入れて1枚のシートにしています。これはお配りすることができないので、画面上で資料をお見せします。こんなふうに模擬試験成績と校内成績と自己効力測定尺度という、北海道大学の鈴木誠先生という方から指導を受けて活用しているものなのですが、測定尺度として自己効力を数値化しているものです。それも入れながら、あと生徒の言語情報も入れたりしています。これを生徒の様子を合わせて考え、会議もして、生徒をどうやって育てるかというビジョン共有をする場を設けたりもしています。

時間が来てしまったので、私の国語科でやっているロジカルコミュニケーションという学校設定科目があるのですが、こちらでやっていることとして、ちょっとだけ紹介して終わりにしたいと思います。シンキングツール

と呼ばれるツールを使って、こうやっていると
んなテーマを整理させたりして発表させたり
するという授業をやっています。時間来てし
まったので、これを詳しくお話できないので
すが、こんなことを週1単位、1年生がやっ
てきています。

では、雑駁な話になってしまったかと思い
ますが、ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

庄司強特任教授(司会)：

廣瀬先生，ありがとうございました。質問
等につきましては，お手元の質問票をご利用
ください。

入試制度の変更と 現場で思うこと

—今までとこれからを考える—

山形県立米沢興譲館高等学校
教諭 廣瀬辰平

1

1 はじめに～入試制度の変更に對して～

今回の教育改革がよいものかどうか

?

なぜなら

教育は現場が全てだと思うから

4

自己紹介

平成17～18年 酒田北高校で常勤講師
平成19年～ 米沢興譲館高校（新採）
20～24年 担任
25～27年 進路指導課専任
28～30年 進路指導主事
31年～ 探究科長（兼進路指導副主任）
（令和元年）

昭和57年5月15日 山形県鶴岡市生まれ

2

教育行政

教員（高・大）

入試制度の変更

保護者

生徒

CONTENTS

1 はじめに～入試制度の変更に對して～

2 本校の紹介～問題意識も踏まえて～

3 具体的取組～理念の共有と実際～

- （1）共通テスト（記述式を含め）
- （2）英語4技能検定
- （3）ポートフォリオについて
- （4）ロジカルコミュニケーション

3

1 はじめに～入試制度の変更に對して～

誰に向けて話をするか

（1）保護者

協力者でいてもらうために信頼関係をいかにつくるか

○安心してもらうこと

学校は正確に情報をつかんでいることをはっきりと伝える。制度上不透明なところがあっても、それが子供に不利には作用しないことを言い切ること。

○教育方針を理解してもらうこと

教育改革の理念を使いながら、指導方針を伝える。

6

1 はじめに～入試制度の変更に對して～
誰に向けて話をするか

(2) 生徒

生徒の学びに向かう動機付け
何を頑張ればよいのかを明示する

しかし・・・その動機付けの方法、スタンス、
生徒の受け取り方などは、様々

7

2 本校の紹介～問題意識も踏まえて～

平成24年～平成28年 SSH指定

平成29年～ SSH継続指定

物量学習で生徒が得るものは？

本当に学んでいるのか？

では、具体的にどうすればいいのか？

進路指導とSSHは別物なのか？

入試改革と学習指導要領の改訂

10

1 はじめに～入試制度の変更に對して～
誰に向けて話をするか

(3) 教員集団（主に同僚）

生徒にどういう力が必要なのか
どのような方法で力をつけさせようとしているか
理念と具体をもっているか

8

2 本校の紹介～問題意識も踏まえて～

平成24年～平成28年 SSH指定

平成29年～ SSH継続指定

進学指導

・オープンキャンパス

・大学調べ

・企業訪問

・大学講座 etc

SSH

・課題研究

・サイエンス

・様々な研修 etc

ビルド&ビルド

どれかをあきらめ
るといふネガティ
ブな発想

受験に直結する
という安易な選択

11

2 本校の紹介～問題意識も踏まえて～

クラス規模（1学年5クラス200名）

3年 理数科1クラス

普通科 理系2クラス 文系2クラス

2年 探究科2クラス（理数51名国際30名）

普通科 理系2クラス 文系1クラス

1年 探究科2クラス 普通科3クラス

2学年になる段階で、文理選択

探究科はHRは理数探究科、国際探究科混在クラス

9

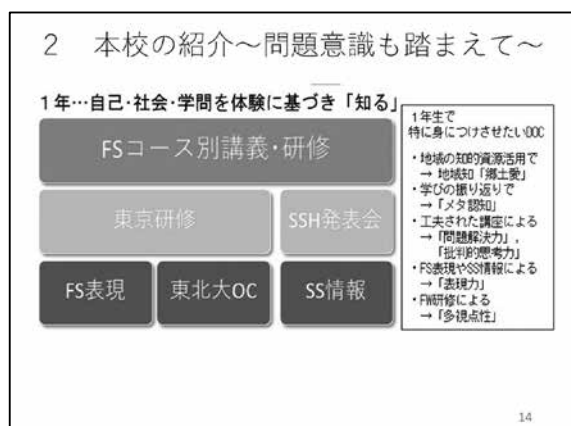
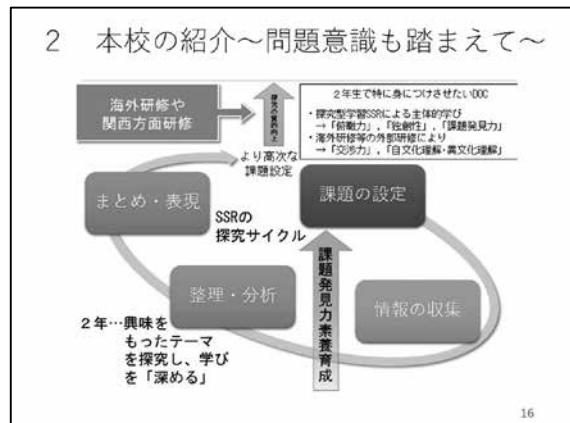
2 本校の紹介～問題意識も踏まえて～

平成24年～平成28年 SSH指定

平成29年～ SSH継続指定

*SSHをキャリア教育に位置付け、対象生徒を全
生徒に拡大し、全職員体制で指導。

12



2 本校の紹介～問題意識も踏まえて～

学部系統	担当者 (○主任)
1 人文・社会科学とデータサイエンス (法律・政治・社会学・経済経営系統)	○国語、数学 体育、地理
2 文化と歴史の科学 (文学・語学・国語・人文系統)	○数学、英語 日本文学、国語
3 教育の科学 (教育学部系統)	○国語、世界史、英語 英語、英語教育
4 栄養の科学 (栄養・食物・栄養系統)	○家庭科、実習講師 英語
5 スポーツ・保健とライフサイエンス (スポーツ学、教員系統)	○体育、体育 生物、化学
6 ①ロボットと社会 ②都市計画と工学	○数学、物理 化学、英語 地理、数学
7 ③マテリアルサイエンスと人間生活	○化学、数学、英語
8 バイオ産業科学と社会課題 (農学・水産系統)	○数学、生物、国語
9 地域と発展 (看護、理学、作業など)	○地理、体育、国語 英語、公民
10 アートと科学 (芸術系統)	○美術、音楽、英語
11 医学の最先端 (医学部医学科)	○国語、数学 生物、看護

教科横断の指導体制
教員はファシリテーター
役に
目標は、3年時には指導
理由や自らの学び、大学
や将来のビジョンを書い
たり、語ったりできる生
徒を育てること
3年時に苦勞して指導し
ていることを、2年間で
体験的、意図的に育成し
ていく

2 本校の紹介～問題意識も踏まえて～

学部系統	担当者 (○主任)
1 人文・社会科学とデータサイエンス (法律・政治・社会学・経済経営系統)	○国語、数学 体育、地理
2 文化と歴史の科学 (文学・語学・国語・人文系統)	○数学、英語 日本文学、国語
3 教育の科学 (教育学部系統)	○国語、世界史、英語 英語、英語教育
4 栄養の科学 (栄養・食物・栄養系統)	○家庭科、実習講師 英語
5 スポーツ・保健とライフサイエンス (スポーツ学、教員系統)	○体育、体育 生物、化学
6 ①ロボットと社会 ②都市計画と工学	○数学、物理 化学、英語 地理、数学
7 ③マテリアルサイエンスと人間生活	○化学、数学、英語
8 バイオ産業科学と社会課題 (農学・水産系統)	○数学、生物、国語
9 地域と発展 (看護、理学、作業など)	○地理、体育、国語 英語、公民
10 アートと科学 (芸術系統)	○美術、音楽、英語
11 医学の最先端 (医学部医学科)	○国語、数学 生物、看護

12 コース
前半4回
(+東北大OC)
後半4回
(+東京研修)
1年後、2年後を見据え
たコース設計

ゴールは学びをまとめた
ポスターセッション
そのための講座
F S 表現 I (論文講座)
F S 表現 II (ポスター)

前半、後半で2コース受
講することで、視野を広
げ、学問と社会のかかわ
りを知る。

2 本校の紹介～問題意識も踏まえて～

平成28年度
○第3期SSH申請 (H29～) に向けた議論
○山形県探究科設置校 (H30～) の準備

↓

カリキュラムデザイン
高大接続改革や新学習指導要領を見据えた議論

3 具体的取組～理念の共有と実際～

- (1) 共通テスト（記述式を含め）
- (2) 英語4技能について
- (3) 主体性の評価（ポートフォリオについて）
- (4) 興譲館の国語科の取り組み
～ロジカルコミュニケーションを中心に～

19

3 具体的取組～理念の共有と実際～

- (3) 主体性の評価（ポートフォリオについて）
①入試にアドバンテージがある、は第一義ではない
→活動実績が評価される入試、大学はあるが、それがあるから、何かをやらせるのではない。
→一方で、受験戦略として生徒の経験の何が有利に働くかは、教員は知っている必要がある。

これまでも、教科の指導で、「点数が取れるから」という指導を避け、「なぜその学びが必要なのか」を説くことがあったのと同様。

22

3 具体的取組～理念の共有と実際～

- (1) 共通テスト（記述式を含め）
これまで我々教員がやってきた基本を継続

→問題分析と授業や指導への落とし込み
→生徒を引き付ける言語的な支援

△過去問がない
→プレテストやサンプル問題と自分の指導実践を
すり合わせて補う必要あり

20

3 具体的取組～理念の共有と実際～

- (3) 主体性の評価（ポートフォリオについて）
②ポートフォリオのそもそもの趣旨は、学びを振り返り、履歴を残していくことで、自身の成長を見つめ直したり、学びの過程をメタ認知させるためであった。
活動実績の羅列では意味がない。

23

3 具体的取組～理念の共有と実際～

- (2) 英語4技能について
①授業改善や評価方法の開発など英語の教科指導
→英語科に情報収集、研究、実践をお願い
→情報収集や研鑽を積みやすい支援は必要

②入試に係る準備
→次年度使うことになるであろう検定試験を今年度受検
→志望大学に向けた戦略や考え方を生徒、保護者とも共有
→英語力証明(大学毎の様式)のための基準作り？

21

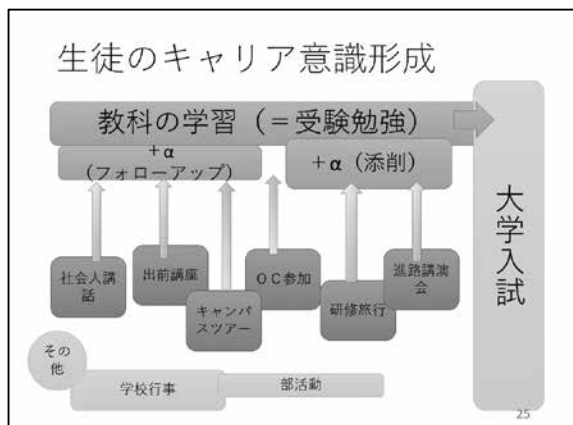
3 具体的取組～理念の共有と実際～

生徒の好き・やってみたいの発掘

学問や社会とどうつながるかの思索

言葉にして振りかえる

24



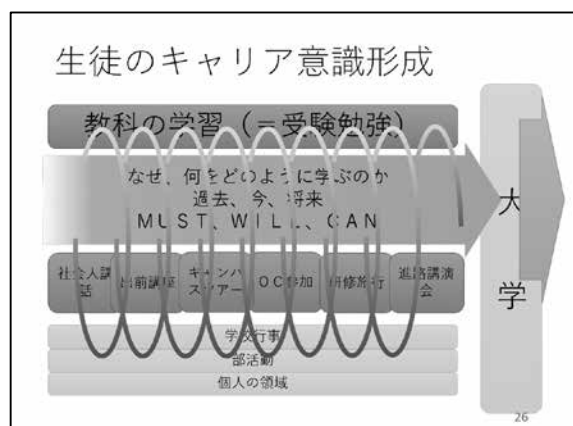
3 具体的取組～理念の共有と実際～

結果として生徒の学力が伸び、
進学につながるようにすることが大切

- ・教員のビジョン共有
- ・受験に対する戦略

どちらも必要

28



3 具体的取組～理念の共有と実際～

(4) 興譲館の国語科の取り組み
～ロジカルコミュニケーションを中心に～
探究科の生徒がより深い思考、論理的なコミュニケーションが取れることを目指した学校設定科目。
昨年度1年間の実践
対象：探究科1年生（2クラス）
教材：オリジナル
シンキングツールを主に活用
表現形式は、小論文、ディスカッション、
KP法など

29

3 具体的取組～理念の共有と実際～

書かせたものは、教師が使うことで意味をもつ
→探究において、テーマ設定をする際に教員が
面談を行う資料として活用。
本人が、なぜ、どのように探究したいのかを
掘り下げる資料として活用
→生徒の言語情報も用いた分析会
「生徒未来創造会議①、②」
生徒個々を形成的に評価していく意識を教員
間で持つ

27

ロジカルコミュニケーション
について

目標
～クリティカルに考えて、ロジカルに伝えよう！～
○批判的思考力を養うための、読解、思考、表現の技術を学ぶ。
○自分の考えを正しく伝えるためのコミュニケーションスキルを学ぶ。

30

LCの各単元

(1) 善悪両面あることについて論じる

「PMI」⇒小論文

(2) 異なる文章の共通点と相違点を指摘する。
帰納的思考の実践。

「ベン図」⇒KP法

(3) 与えられた課題に対する具体的な解決策を
議論する。

「KJ法」、「フィッシュボーン」、「ロジック
ツリー」⇒ディスカッション

31

さいごに

—今までとこれからを考える—

という副題をつけてみましたが、
本質は変わらないと思っています。

教育に完全な正解はないので、常に最善を考え
ることと、手直しを続けることが大切だと思
います。

ご清聴、ありがとうございました。

32

現状報告 3：高等学校の現状と、今、大学に求めること

東京都立八王子東高等学校校長

宮本 久也 氏

〔講師紹介〕

庄司強特任教授(司会)：

最後の現状報告になります。現状報告 3
「高等学校の現状と、今、大学に求めること」
東京都立八王子東高等学校校長宮本久也先生、
よろしくお願いします。

宮本久也校長：

ただいまご紹介いただきました東京都立八王子東高等学校の宮本でございます。渡辺先生から廣瀬先生、それぞれご自分の学校の今の取り組みを通したお話をいただいたわけですが、私のほうは少し角度を変えてお話をしてみたいと思います。

履歴にありますように、私はこの高大接続改革に直接かかわってきたのが、2015 年、平成 27 年 3 月に設置されました高大接続システム改革会議のメンバーとなったところからです。それまでは全国校長会の役員として、この高大接続改革の動きを横から見ていたわけですが、そこから後はその中に入って、実際にこの改革の動きを直接見てきたというか、一緒に動いてきたわけです。

このシステム改革会議というのは非常に変わった会議です。高大接続改革の方針は、先ほど倉元先生のお話にあったように、2014 年 12 月に出された中教審の高大接続部会の答申で、こうやるよというメニューが示された。そして、翌年 1 月に文部科学省がそれを受けて、高大接続の改革実行プランというのを出して、この工程表でやりますよと決まっています。具体的にどうするのかということをは話し合う会議という性格でした。そこから私はかかわっていったわけであります。

今日はそういう中で、今高校はどうなって



いるのかということと、これからどうしていくのか。そして、大学に何をお願いしたいのかということについて簡単にお話をしていきたいと思います。

今の大学入試改革に絞って言えば、高校側の意識というのは、今お二人のお話にもあったように、改革の方向性に対する理解というのは、かなり各学校で進んでいると思います。高等学校教育はやはり変えていく必要があるだろうと。入試も変わっていくということもあってということで、理解は進んでいますけれども、果たして具体的な準備はどうかということ、準備が進んでいるとは言えない。正確にはなかなか準備を進められないといったほうがいいかもしれません。その理由は、もう実施の時期がどんどん迫ってきています。新しい制度で受験をする高校生がもう 2 年生になってきているのに、まだ色々なことがわからない。不安と焦りというのがだんだん強くなってきているということです。その理由は、1 つは、具体的な情報がいまだに明らかになっていない。色々なことでまだはっきりしないことが余りにも多いです。

それから、2 つ目は当初から懸念されていたこと、不安に思っていたこと、これがこの

段階でも解消されていない。初めの不安がずっと不安のままここまで来て、もう時間がだんだんなくなっている。ここが大きな問題なのではないかと思います。

個別の話を少しずつさせていただきたいと思います。まずは、大学入学共通テストです。試行調査が2回行われました。1回目、2回目、かなり内容が変わってきていますが、ある程度方向性が見えてきた。こういうふうに試験が変わっていくのだな。こういう力を問うのだなと。これは見えてきたわけですが、これも、本当にこのままこれでいって大丈夫かなということは、まだ課題として残っています。作問に関して、私も履歴にあるように、長い間都立高等学校の入試問題をつくる、あるいは実施するという事務にかかわってきていて、どういう問題が良い問題なのかということとは色々考えてきたわけです。そういうことも踏まえても、作問に関しては肯定的な評価が私は多いと思います。新しい力を見るためには、こういう問い方をするのだな。こういうふうに問うと結構いいだろうなということとは、特に1回目の試行調査はかなりチャレンジングな出題がされています。しかし、ではそのこととそれが、50万人以上受ける試験として適切なのかということとは、ちょっと別の問題なのだと思います。問題量の問題、あるいは指示文の出し方の問題、あるいは資料提示のあり方、1回目に比べて、2回目はかなり工夫がされてきましたけれども、やっぱりまだもう少し改善をしないといけない部分があるのかなと思います。

それから、難易度の高い科目がありました。平均点がかなり低い教科、前に数学、物理、生物、地学の4科目を出していますけれども、これがこのままですと選抜としてどうなのかということで、この辺の調整もしっかりと行っていく必要は当然出てくるだろうと思います。

そして、今回の目玉の記述式問題ですけれども、これに関してもやはり1つは難易度の

問題、特に今回の2回目の試行調査でも数学に関して言えば、かなり正答率が低いです。

3問とも10%っていないという状態。それから自己採点との一致率です。自己採点と実際と採点で3割ぐらい一致をしないという状況。現在はセンター試験が終わった後、受検者が自己採点をして、その結果をもとに出願指導を多くの学校でされているわけですから、出願指導が適切に行えるのかという声が当然出てくるだろうと思います。

この記述に関して言えば、採点に関するいろんなオペレーションを確かめるための調査をもう1回やるという話を、今聞いていますけれども、そこでどのぐらい本番に向けて、修正ができていくのだろうか。この辺はまだはっきりわからないところも多いと思います。

それから、英語の民間資格・検定の活用です。これも今回の改革の大きな目玉です。当初からの懸念として、次の4つをずっと私も挙げてきています。1つ目は、学習指導要領と整合性はどうかののだろうか。2つ目は、異なる検定試験を、CEFRの基準で見るということは、果たして妥当なのだろうか。3つ目は、地域格差や経済格差、これに対してどう対応していくのだろうか。

そして4つ目は、本当に公正な試験実施ができるかどうかということです。こういう懸念が当初からあるわけです。学習指導要領との整合性については、一応文部科学省から文部科学省なりの見解が出されました。私個人的には納得できるとは言えないと思っていますけれども、一応大きく見れば、検定試験の内容は学習指導要領の内容とで合致している。つまり学習指導要領では様々な場面を想定した言語活動を行うということになっているし、検定も様々な場面を想定しての試験なのだから、まあまあいいのではないかということが、文部科学省なりの見解です。しかし、それが本当に皆さんの納得の得られるものになっているのかはなはだ疑問です。

そして、3番目と4番目については、実際は検定を実施する民間事業者に対応を全て任せています。ここが今回の最大の問題点だろうと思います。例えば、我々高校側も民間検定に関して様々心配なことがあります。心配なことがある場合は、当然審議会等の公の場面でも意見を言いますけれども、それ以外でも文科省の担当者との間でこここのところはどうか。あるいは、こういう改善をしてもらえないかという様々な話をしているわけです。センター試験、共通テストの場合は大学入試センターが所管しますから、そこにお話をすると、大学入試センターのほうで様々と考えてくださっている。例えば自己採点がやりにくい。じゃあ、学校に対して採点用の動画みたいなものをつくってみますと。これでどうでしょうか。あるいは、こういうところはどうしたらいいのかと、それに対してある程度の対応は、センターはセンターで色々に対応はしていただけています。

しかし、この民間検定に関しては、文部科学省に言っても、事業者のほうにこれは必ず伝えますからということで、実際には各事業者が対応するという形になっていて、その対応も事業者によって、当然異なるわけですので、このあたりのところが、今回なかなかこの問題が進んでいかないという大きな原因だと思っています。

今のこの英語に関する懸念は、もう来年4月から実際に3年生が検定試験を受けるわけですが、果たして本当に4月から適正に民間検定試験が実施できるのか。あるいは、高校生が希望する時期や場所で受験ができるのか。今の段階でも確約はないですね。

多くの高校生が受けるだろうと言われていきます英検、GTECともに、まだ来年度の公表予定はありません。英検は昨日プレス発表しました。こういう形でやりますよというプレスの発表はされましたけれども、では具体的にいつどこで、どのぐらいの規模でやるかというのは、まだ出ていない。鋭意努力中

ということです。GTECは明日説明会を開くということで、今日プレスリリースをしているはずですが、これもまだどうなのかというのは見ていないのでわかりません。ただ、来年4月からの実施までもう11カ月ぐらいしかありません。11カ月切っちゃっているわけです。そろそろ学校としては、来年の様々な予定を立てていかなければならないし、それに合わせた色々な指導計画も立てなくてはならないのに、今になってもこの辺がわからないという状態、一体いつわかるのかということで、どんどん不安が増すばかりだと思います。国大協をはじめ、各大学が民間の資格検定試験の活用を検討して方針を出されていますけれども、その前提条件は、この民間の資格検定試験が適正にきちんと行われるということです。その前提に立って各大学でどう使うかという形での、多分検討をされたと思うのですが、その前提条件が本当に大丈夫なのかなと今の段階では私はすごく心配しています。まだこういう状況にあるということは極めて深刻な問題だと思っています。

それから、各大学の個別の選抜です。英語の検定試験の活用については、多くの大学は公表していただいていますけれども、それ以外の内容については、具体的などころまでまだ公表はされていません。例えば共通テストの記述は使えますよ、点数化しますよという公表の学校もありますけれども、何点分にするの、どうするの、ここまではまだほとんど検討されていないですね。公表されていないです。つまり、我々としては対策をどうするのというのが、まだ考えられないという状況が依然として続いています。大学にお聞きすると鋭意努力で今検討中ですよというお答えがほとんどなのですが、いつになったらわかるのかというのが、我々としてはすごく心配なところでもあります。

そして、調査書等の改善ですね。これもe-Portfolioを含めて、先ほどのご報告にもあり

ましたように、各学校でかなり進んでいるところもあれば、なかなかまだそこまでいけないところもあるのは実際事実ですし、調査書の電子化についても、では具体的にどうするのというところまで、まだ十分な話が進んでいないと思います。

その理由の一つは、環境整備が十分じゃないという実態があるからです。学校によって、あるいは都道府県によって、状況が全く違ってきています。仕組みのほうも同じですね。県全体で同じようなプラットフォームでやろうというところもあれば、各学校が独自にもう待ってられないから、自分たちで色々な仕組みを入れているところもあるし、これ全体的にどうするのというのが、まだはっきりしていませんし、公立学校で言えば、設置者である都道府県教育委員会が具体的なまだ方向性を出していないところが殆どです。ですから、動きようがないというところもあるし、先に動いてもいいのだけれども、後から変わったらどうなるのという不安を持ちながら準備を進めている学校も少なからずあると思います。こういう状況がまだまだあるということなのです。

最後に、大学に求めることということで、3点お話をさせていただきたいと思います。

1点目は、やはり高等学校の実態を把握した上で、ぜひ方針を立てていただきたい。例えば、今回の英語の民間検定の活用について、大学が検討するに当たっても、大学のほうで高等学校の状況をしっかりとリサーチした上で方針をお考えになった。そういう大学も幾つかあります。特に当初から方針を変更した大学のほとんどは、高等学校の関係者と色々話をしたり、実際高等学校の状況を確認したりして、ちょっとこれは待ったほうがいいかなという形で方針を少し変えられたというところもあります。

ところが、全くそういうことを、大変申し上げにくいのですが、されないで、つまりこの机上のプランとして出てきた資料だけで、

活用方法をお決めになったところも、正直あるのではないかと思います。

ぜひ、高等学校の状況というのをしっかり把握していただきたいし、やはり高等学校と大学が様々な情報を交換して情報を共有していきながら、その上でどういう入学選抜が最もいいのかということについて、一緒に考えていく中で大学側の方針をぜひ出していただきたいと思います。

先ほどの渡辺先生、それから廣瀬先生のお話にもありましたように、今高等学校の学習は確実に変わりつつあります。いろんな工夫をして、子供たちの多様な能力を育てていこうという努力をしている学校は多いのです。だから、そういう努力を選抜においてもぜひ見てもらいたい。もちろん選抜のために我々は教育内容を変えているわけではありませんけれども、そういう努力をした学校が報われるような形の選抜にならないと、そんなことやるよりは、やっぱり問題集やったほうがいいんじゃないのとなってしまうと、今回の改革が後戻りしてしまうのではないかという心配をしています。

そして2つ目は、やはり早期の情報提供だと思います。まだまだわからないことが多過ぎます。ぜひ早い段階で具体的な情報を出していただきたい。特に新しい入試制度で受験を行う今の高校2年生、そしてその高校2年生の保護者の不安というのは、ものすごく大きいのです。自分達が受験する入試がどうなるのか。僕は、そんなに焦らなくても大丈夫ですよと機会あるごとに2年生の生徒や保護者に話をしていますが、やはり入試が変わるということに対する不安は非常に大きいですし、これは今の3年生もそうです。浪人できないのではないかと。来年から大きく入試が変わったら、これはもうだめだ、そういうふう思う。その一つの原因は、やっぱり具体的な情報がなかなか出てこないということにあります。だから、不安ばかり増してくるということになるわけです。確かに入試

制度の大きな変更は2年前に公表することになっています。今回の制度は非常に大きな変更になりますし、正直言えば、今の3年生にとっても、これはものすごく大きな影響を受ける、そういう改革なんですね。ですので、できるだけ早い段階で具体的な情報を出していつていただきたいと思います。

最後は、大変申し上げにくいのですが、あえて言わせていただきます。この入試改革の円滑な実施に向けて、大学のほうでもぜひ積極的な提言をお願いしたいと思います。高等学校は高等学校から大学に子供たちを送っていく。そういう中で、今のこの状況では様々な不安があるわけで、その不安の解消に向けて我々もできるだけことはしていきたいと思っていますし、これまでも色々な機会があるところでそういうお話はさせていただいていますけれども、一方でやはり受けとめる側、受け取る大学側も責任があると思うのです。今の状況ですと、本当にスムーズに入試改革、特に2020年からの改革がうまくいくのかというと、極めて雲行きが怪しいという状況があるのは事実で、そういう中で大学からも何らかの提言をしてもらいたいと思うし、少しでもいい改革にしていくために大学側のアクション、高校側のアクション、そういったものをもっと必要になってきているのではないかと思います。

以上で私の話を終わります。どうもありがとうございました。

(拍手)

庄司強特任教授(司会)：

宮本先生、ありがとうございました。

これまでの講演に関する質問等につきましては、お手元の質問票をご利用ください。

椅子の右の肘掛けにテーブルが収納されていますので、よかったらそちらをご利用ください。

ここで少し長目の休憩をとらせていただき

ますが、休憩中に質問票を回収させていただきます。スタッフが通路を回っておりますので、お近くのスタッフにお渡しください。

15分間の休憩をとりまして、再開は4時からとします。よろしくお願いします。

資料

東北大学
高等教育フォーラム資料
平成31年 5月15日

高等学校の現状と、 今、大学に求めること

東京都立八王子東高等学校長
宮本 久也

3. 英語民間資格・検定の活用

・現在の懸念
来年4月から適正に民間検定が実施できるのか
高校生が希望する時期・場所で受検できるのか
・英検、GTECとも未だ来年度の予定公表なし
・文科省が実施したニーズ調査の信憑性に疑問

↓

各大学が民間資格・検定の活用を検討する
前提条件が成り立たなくなる危険性

1. 大学入試改革に関する高校側の意識

- ・改革の方向性に対する理解は深まりつつあるが、
具体的な準備は進んでいるとは言えない
- ・実施時期が迫ってきている中で不安と焦りが
出つつある

【理由】

- (1) 具体的な情報が未だ明らかになっていない
- (2) 当初からの懸念、不安が未だ解消されていない

4. 各大学の個別選抜

- ・英語の民間資格・検定の活用については
公表されているが、それ以外の内容については
ほとんど公表されていない

↓

対策が立てられない

2. 大学入学共通テスト

- ・2度の試行調査で方向性が見えてきたが、
課題も残っている
- 作問に関しては肯定的評価が多い
- 指示文、図・資料等の提示方法等の改善
- 難易度の高い科目(数学、物理、生物、地学)
- 記述式問題の難易度、自己採点

5. 調査書等の改善

- ・各学校で取り組み状況に大きな差がある

【理由】

- ・環境整備が十分でない
- ・設置者から具体的な方向性が示されていない

3. 英語民間資格・検定の活用

・当初からの懸念

- (1) 学習指導要領との整合性
- (2) C E F Rの基準の妥当性
- (3) 地域格差・経済格差
- (4) 公正な試験実施に関する懸念

↓

- (1) (2) は文科省から見解【納得できるとは言えない】
- (3) (4) は民間事業者に対応を任せている

【最大の問題点】

6. 大学に求めること

- (1) 高等学校の実態を把握したうえで
方針を立ててほしい
- (2) 早期の情報提供
- (3) 入試改革の円滑な実施に向けての
積極的な提言

ありがとうございました。

第Ⅲ部 討議

ーパネルディスカッションー

討議—パネルディスカッション—



庄司強特任教授(司会)：

皆様，お待たせいたしました。

それでは，これより討議に入らせていただきます。ここからは討議司会担当にマイクをお渡しします。

宮本友弘准教授(討議司会)：

皆さん，こんにちは。討議の司会を担当させていただきます東北大学入試センターの宮本と申します。

石上正敏特任教授(討議司会)：

同じく石上です。よろしくお願いします。

宮本友弘准教授(討議司会)：

お時間が限られていますので，てきぱきと進めていきたいと思います。

まずは，5人の先生方，ご発表ありがとうございます。会場の皆さんからは質問がたくさん

来ておりまして，それらにできるだけ答える形で進めていきたいと思っております。

今質問を整理しておりますので，まずは各発表者の皆様に，言い足りなかったこと，あるいは他の方の発表を聞いて，改めて強調したいということがございましたら，1人ずつお願いいたします。

それでは，まず大谷先生から。

大谷奨教授：

大体申し上げたいことはお伝えしましたので，時間を有効に使いたと思いますので，私のほうは特につけ加えることはございません。

宮本友弘准教授(討議司会)：

倉元先生。

倉元直樹教授：

最後にちょっと余計なことを言いましたけれ

ども、高校改革のニュースを聞いて、私は何か腹が座った感じがしています。治まることはないな、これは、と。その中で何を考えるかということが、これから自分の課題になるのかなと思いました。以上です。

廣瀬辰平教諭：

先ほど、なるべく生徒、保護者には自信を持ってと言ったのですが、色々聞きながら、英語の4技能の検定試験のことだけは分からな過ぎて、何もまだ今整理して話すことができないな、なんてことを聞きながら、不安というか、どうしようかなと思ったということだけ申し添えたいと思います。以上です。

渡辺豊隆指導主事：

どうもありがとうございました。高校の普通科ですね。高校普通科の改革について少し触れさせていただきましたが、あの議論の発端が、高校普通科は大学への通過点に過ぎないというのが議論の発端だったと思うのですけれども、高校普通科としてはしっかり15歳から18歳、3年間きっちり育てていきたいということを思っておりますので、高校普通科が大学への通過点とはなっていないのではないかという個人的な考えを持っておりますので、高校現場としてはしっかり高校改革を、入試改革という外圧によらず、それこそ主体的に改革を進めていきたいと思っております。繰り返しになりますが、これは個人的な意見で、所属の意見ではありませんので、よろしくお願いします。

宮本久也校長：

特に僕はつけ加えることはありません。質問の中でお答えしていきたいと思います。

宮本友弘准教授(討議司会)：

はい、わかりました。

それでは、会場の皆様からの質問を拾っていききたいと思います。

石上正敏特任教授(討議司会)：

それでは、様々なご意見があるのですが、まず高校側から大学の先生にお聞きしたいということで、例えばセンター試験の改革がいろいろと進んでいく中で、大学の個別試験の改善については、意図して変わっていくものでしょうか。大学側はそのようなことを意識して入試を変えていくのでしょうかとか、あるいは大学の個別試験に任せればいいだけのことではないかとか、そういう質問がございしますが、大谷先生、倉元先生、いかがでしょうか。

大谷奨教授：

今回、話が逆になって、我々が個別学力試験をするときには、高等学校の学習指導要領に沿うという大きな縛りがありますので、その中でやってきたし、これからもやると。そういう中で、今回の大きな改革の次、直後にまた高等学校の学習指導要領の改訂が行われるわけですので、それを受けた受験生へどのような問題を提供するかというのは、学内的には問題になっていきます。ただ、大前提としては、学習指導要領に沿うということと、それからちょっと手前味噌になりますけれども、従来から学力の2番目の思考力、判断力、表現力というのは問うような問題を作り続けたという自負はあるものですから、それを前提としながら、さらにこういうことを聞いてくれとか、こういう力を問うような問題をと、むしろ高等学校の先生方のほうに、うちの問題はどうかと伺っていききたいとは考えております。

倉元直樹教授：

なかなか難しいご質問だと思います。というのは、立場上、東北大学がこうするということは言えるものでもないし、言っているものでもないし、ということなのですが、少し個人的な考えをお話させていただきます。

今日の講演の中でも触れましたけれども、多分、ここで忘れてはいけないというか、今、とに

かく思い出さなければいけないのは、大学入試というのは大学が決めるものなのです。つまり、文部科学省からの通知文にもありましたように、個別大学がアドミッション・ポリシーに従って決める、というのが筋だと思います。まず、その原点を忘れないようにしたいと思います。状況がこうだったからしょうがないよね、ということで済まされる話ではないな、ということです。

その上で、東北大学の例ということで言えば、やはりトータルな入試制度の設計がすごく大事なのではないかなと思っています。我々は、当たり前のように、自分たちのところに志願してくださる受験者の状況を、できるだけ我々の立場で察知しようということは心がけてきていますし、さらには今まで振り向いてくれていなかった人たちにも来てもらえるように努力をしています。その流れの中で出来ることは何かな、と思います。

基本的には、入試は大学が主体的に決めるものだということを前提にして言えば、当然今の状況だからということではなくて、常に、我々がやっている入試に関しては全て反省をしながら、改善を繰り返してきたつもりですし、これからもそれは変わらないと思います。ただ、当然、いろんな状況には対応しながら改革を進めていくということなんだろうと思います。

宮本友弘准教授(討議司会)：

ありがとうございました。

廣瀬先生と渡辺先生、お二人にたくさん来ている質問がございます。e-Portfolio の活用について、もっと詳しく聞きたいと。例えば有効性、あるいはこの使用に関して、かなり不安や疑問を抱いている声もございます。それについて、廣瀬先生からお願いします。

廣瀬辰平教諭：

まず、本校ではe-Portfolio の導入はしていません。それは、一部の業者によるところになってしまうのが少し疑問だったというのがあります

し、本当に入試で活用されるのかというのが疑問だったというのもありました。その導入によって教員の手間が増えたりとかというよりは、もっと本質的なことをやろうということで、基本的に紙ベースで、言語による振り返りということをしてきて、ただデータとして残っていることは大事だと思ったので、電子上に入力させるということは物理的にはしたのですが、そういうことをしております。

あとは、本校では校務支援ソフトを使っているもので、そちらで調査書の変更とかそういったもの、もしくは入試で必ず使うような形式になったようなケースの場合は、業者と折衝して対応することになるかなと思っていますが、e-Portfolio について私から言えるのはそのぐらいです。以上です。

渡辺豊隆指導主事：

ご質問ありがとうございます。先ほどもスライドでお見せしましたように、ちょうど大島高校の生徒たちの受験する大学と、活用しますよと手を挙げられた大学が合致したので、対応せざるを得ないというところが現状でした。さらに、大高の生徒は、志望校と受験校が変わることが多いので、3年夏まで言っていた受験校と実際の出願校が変わるということもありますので、あなたは対応しなくていいよ、あなたは対応しようねということが言いにくい学校の実態というのがありましたので、今年の1年生から、今年は1年生、2年生ですが、JAPAN e-Portfolio に対応できるようなクラウドサービスを導入しております。その際も、JAPAN e-Portfolio というのは文部科学省の委託事業ですので、それについてはニュートラルな状態で入れることにはなると思うのですが、入り口は、某業者が、複数社あるのですけれども、その複数社を比較検討した上で、生徒が1人3,000円ちょっと払って導入するということにいたしました。それは、調査書の記述については、主語が「教員は」なんですけれども、e-Portfolio の主語は「生徒

が」なので、生徒が自分の学校での活動等も含めて、特に奄美大島はボランティアとか、地域活動とか、非常に多岐にわたって学校外の活動があるので、そういうことも踏まえて生徒が記述できるプラットフォームを揃えたいというのもありまして、導入に踏み切りました。

先ほど申し上げたように、JAPANE-Portfolioというのは、出願のシステムの名前ですが、大高としてはe-Portfolioという教育の機能として振り返るとか、そういうところも活用していますので、教育の活動の一環として使いながら、最終的に困らないように、e-Portfolioについても生徒が入力するシステムを整えたというところになります。

まだ検証というところまで行っていませんけれども、昨年卒業した3年生の中にもe-Portfolioを出願時に使って出願したという生徒もおりますので、今後どういう教育の効果、あるいは負担感があるかというのも踏まえて検証が必要かと思っているところです。以上です。

宮本友弘准教授(討議司会)：

廣瀬先生のご発表の中で、e-Portfolio じゃなくてもポートフォリオというのは形成的な評価のツールとして非常に意味があるということだったと思うのですが、現実的に先生から見て、あるいは生徒から見て、どういう有効性が見られていますか。

廣瀬辰平教諭：

ちょっと難しいなと思っているのですが、多分人間って、まず考えたことをずっと頭の中に記憶しておけないと思うので、ある時期にある学びをしたときのものを言葉にして残されているのは、すごく大事だと思っています。あとは、どうしてもあるまとめた時期に、それまでの学びを振り返させることに、進路的なものについてはなるのですが、そうした際にやっぱり生徒はいろんな経験を忘れていて、自分にとって何がいつ起こって、どういうものだったかという

こと、結構忘れていきますので、それを思い出させるというのでも、かなりそれだけでも効果があったかなと思います。

あとは、多分表現していく過程でうまく表現できないとか、伝わらないという経験も生徒はしていくと思うので、その伝わらないというところから、では自分が足りないところ、考えなければならないこととか、そういったことをさらに深めていくというきっかけになると思うので、そういった手応えは、数字で出せるようなものではないのですが、あると感じています。

あとはこれから本当にそれを教員が使うというところまでいかないと、余り意味のないものになって、生徒の作業になってしまうかなと考えています。

宮本友弘准教授(討議司会)：

ありがとうございました。

渡辺先生に実際にe-Portfolioを活用されていく中での負担についての質問がございます。先生の負担、生徒の負担、そういったところは具体的にどんな感じでしょうか。

渡辺豊隆指導主事：

負担もありますが、よさもあります。生徒の変容が見えるというところですね、ポートフォリオのよさはあると思うのですが、ペーパーで出しなさいというのと違って、一覧で見ることのできるのですが、生徒への入力促進というところが、少し教員側にとっては負担もあります。紙の提出を促すのと同じ手間ではあると思うのですが、今書きなさいと言えないから、うちに帰ってからパソコンで入力しなさい、あるいは家でスマートフォンで入力しなさいということがありますので、入力促進というところで少し負担感というのがありますので、それについてはまた学校のほうでも、今大島高校は学校の中にスマートフォン等の持ち込みについては、届け出制で許可していますので、それについてどう活用するかというところについて

も探りながら、入力促進の方法について効果的な方法を探っているところです。ちょっとそこが教員にとっては入力促進の声がけが多くなったかなというところになります。

石上正敏特任教授(討議司会)：

もう1点だけ、e-Portfolio に関して、これはむしろ大学側に質問するという内容かと思うのですけれども、昨年のこの会は主体性評価をテーマとして開催させていただいて、主体性を生徒に求めること自体、その主体性を奪うことになるのではないかというお話があったわけですが、今年はこんなご質問が来ております。e-Portfolio で様々な活動を記録して振り返りを行うことが必要になっていく。また、授業でも話し合いや積極的な発言が求められる。

一方で、真面目に勉強していき、静かに自分の中で物事を解決していくような、いわゆる勉強ができるけれどもおとなしい生徒は、特徴がないというのでしょうか、そういう生徒は進学が難しくなってしまうのかと考えてしまうが、その辺の評価はいかななものなのでしょうかということでございます。お二人、よろしいでしょうか。

大谷奨教授：

そういう馬鹿な話はないだろうと。いわゆる学力、基礎基本とか、判断力とか表現力はあるけれども、主体性がない人が落ちるようなシステムとか、逆に1番目、2番目の学力がないのに、主体性だけある人が合格するようなシステムというのは、ちょっと想像しにくいし、運営する側は、多分多くの国立は考えていないだろうと思うので、そういう心配はしなくてもいいのかなという気はします。

若干、自分の発表とは関係なくて、本学のという話で内々の状況をお話ししますと、先ほどから2年前予告という話になっているのですけれども、仮にうちの大学は今使っていないのです

けれども、使うとなると、実は高校1年生のときから入力しなきゃならないということですから、3年前予告ということを考えなきゃならんということと考えますと、相当決断するには慎重さが求められるだろうということでありまして、実際に入力していただくことはものすごく良いことだと思うし、やっていただければと思うのですけれども、実は先ほどの発表を聞いて、廣瀬先生が主体性等の評価というのは形成的评价じゃないのかというの、私は全面的に賛同する立場にいますので、それをさらに伸ばしていくという意味では、大学が引き取っていきたいとは思っております。

倉元直樹教授：

さっきと違って、今度は東北大学の話から入ります。昨年12月に「基本方針」というものを発表しました。その中に「調査書等の扱い」という項目があります。一言で言えば、まず主体性の評価に関しては、「調査書以外のものは使いません」ということを明言しています。もう一つは、どういうときに使うかという、合否ぎりぎりのラインのところと同点になったときに使います。

実は、この話は、お隣におられる大谷先生の筑波大学と相当話をしてきました。つまり、大学がばらばらの対応をすると、高等学校が調査書の書き方に困ってしまう。当然、利用の仕方というのは、それぞれの大学の考え方があるので、我々の大学では「チェックリスト」として課して、受験生に自分で申告してもらおうというやり方です。その根拠資料として調査書を使う、という建て付けになっていますが、実は、もう筑波大学が3月に調査書の使い方を公表されていますが、その様式にチェックの仕方をピタッと合わせるということを、前々から方針として決めて検討しています。公表はしばらく先になるかなと思います。

⁵ 令和元年7月17日付で東北大学入試センターウェブサイト「令和3年度(2021年度)一般選抜入学試験

における主体性等の評価について(予告)」が公表された(<http://www.tnc.tohoku.ac.jp/images/news/201907>

精神としては、まず私どもはAO入試の割合がかなり大きくて、・・・今、募集人員の3割をAO入試に割くということで改革を進めてきているのですけれども、・・・そこではかなりいろんな形で活動を出してもらって、評価してきたところです。それと一般入試の建て付けとは違うのだと思うのですよね。一般入試、これから一般選抜に名前が変わりますけれども、基本的には、本当に広い意味で門戸開放、万人に開かれるということなので、たまたまそのときの得点が、東北大学に見合ったということで受験していただいても全く構わない。入ってからやることの中心が研究なので、そのために一番何が大事かというと「学力ですよ」ということは一貫して言ってきたことです。いわゆる主体性評価のポイントを稼ぐことのために時間を使われるというのは、一番嫌なことなんです、大学として言えば。

ですから、その辺、「積極的に主体性等の評価も取り入れましょう」というのは国の方針ですし、我々もAO入試という形で、それは今までも表現してきたものなので、一般入試のほうに関して言えば、現場で混乱を与えないように、今まで以上の活動を何か求めるということをしていない、というのは、学内方針として多分もうコンセンサスができ上がっているところで準備をしています。他大学にもぜひ、高等学校側のことを考えると「歩調を合わせましょう」と呼びかけたいところではあります。

石上正敏特任教授(討議司会)：

それでは、話題を変えまして、次に英語の外部試験についてのご質問です。英語の外部試験について、特に経済的な大きな負担について、どうお考えになっているか。また、外部試験の導入が高校の英語の指導にどのような影響を与えているかということです。ご質問は、渡辺先生に、ということだったのですけれども、あわせて廣瀬先生にもお願いできればと思います。

渡辺豊隆指導主事：

英語の外部検定試験についてのご質問ですが、奄美大島の島内で受けられるのは、英検とGTECの2つが認定された試験のうちには、会場が設けられるかと思います。

先ほど申し上げましたように、離島僻地等で例外措置として、この4月に認定されましたので、現2年生は11月以降に受けたものを3年生に受験したものとして変えられるという例外措置も出されたのですけれども、肝心の4技能を測る試験会場が島内にこのようにないのです。結果的にどうしても本土まで行って受けなければいけないということなので、措置的には例外措置ができたのですけれども、なかなかそれを有効に活用できないという現状もあります。なかなか経済的、地理的な格差というところが解消できないかなと思っています。

それと、英語の授業の中身、影響については、これについては検定のための授業とは、大高の場合になっていないので、きちっと学習指導要領に則って授業しているというふうには言えるかと思います。以上です。

廣瀬辰平教諭：

本校の場合は、恐らく本校もGTECと英語検定を使うことになるかと思います。それについては、2年生はその2つを校内で受験するのですが、ただ、まずその試験の準備のための、今回模擬試験、検定試験分の受験料がふえていますので、経済的負担といえ、保護者の方々にはそれ以外の部分でちょっと努力はしていますが、求めることになろうかと思います。本校の場合は、今のところ目立ってお金が払えなくてという状態ではないので。ただもちろん保護者、生徒への負担というのは配慮しながら進めていかなければならないなと考えております。

あとは、全体の中で見えていない配慮すべき生徒がいるかどうかというのは、これから情報

を整理しながら考えていかなければならないと思いますし、11月に保護者向けの進路説明会がありますので、その時点ではある程度見えている部分とか、学校でできる手立てとか、そういったことは話ができるように準備していきたいと思っています。授業については、ちょっと私も英語科ではないのでわからないのですが、ただ以前に比べて、4技能が使われるとなる前から、話したりとか、聞いたりとか、そういう言語活動が多く取り入れられた授業はされているなど見てきました。それが4技能につながるかどうかとなっているかと思いますが、4技能試験が入試に使われるからやっているというような授業ではないと思っています。以上です。

宮本友弘准教授(討議司会)：

ありがとうございました。同じ英語に関連したことで、宮本久也先生に質問がございます。宮本先生のお話を聞いて、この英語民間試験、検定を初め、このままで大丈夫かというような不安を示す声がたくさん上がっています。それで、質問なのですが、高校の教育現場で不安が募り混乱が生じつつあることを文部科学省は承知しているのでしょうか。あるいは、受験生本位に考えるなら、そろそろ高校側から延期あるいは中止を求めるような時期かとも思うのですが、どうお考えでしょうか。少し重い質問なのですが、よろしく願いいたします。

宮本久也校長：

大変難しい質問だと思います。さっきもお話したように、結局英語の外部検定が具体的にどのように行われるかということが、今の段階でもはっきりしないわけです。

だから、それが見えてこない、なかなか動きようがないというところが正直あります。ただ、どんどん時間がたっていくわけで、やはりある程度のところで物を言っていく必要があると思います。ただ今でもこの英語の外部検定活用に関する様々な委員会等で、今私が話しているよ



うなことは、高校側の委員は言い続けています。だから、文科省はじめ関係者の方々がわかっていないはずはない。ただ、結局さっきもお話したように、その対応を全て民間事業者に任せているので、話がなかなか前に進まない。

だから、どこかの段階でこれはきちんとしなくてはならないし、その時期が大分迫ってはきていると思うのですけれども、どこでどのタイミングでやるのかというのは、なかなか難しいですね、非常に。

昨年秋に東京大学から申し入れがあって、ワーキングが文部科学省に設置されたわけですが、12月にワーキングが設置されてから、もう半年近く経っていますが、何の答えも出ていないという状況で、この内容もオープンになっていないのですよね。だからそういうことをはっきりと表に出してもらわないと、結局今不確かな情報だけが広まってどんどん不安が募っているということで、そういう意味でもきちっと出せる情報は早く出してほしいということは今までも言っていますし、これからも言い続けていく気持ちでいます。そういう意味では大学のほうからも声を上げてほしいと思います。審議会などでも大学の委員の方からは、余り声が上がりませんからね。だから、ぜひ色々なところから声が上がってくれば、もう少し状況が変わってくる可能性があると思います。

宮本友弘准教授(討議司会)：

なるほど、声を上げていくということなのですが、それに関して大谷先生のご発表のまとめ

のところで、変更可能性について言っていたと思います。試験日問題のことで、そのあたりのことを踏まえすと、今の状況をどうお考えですか。

大谷奨教授：

個人的にはやはり取り入れるのはどうなのかなと思いつつも、大学として国大協からある程度のガイドラインが示されているとなると、乗らざるを得ないという感じで、我々筑波大学は使わなくても、それを素点として認める。使った人の場合には加点するけれども、200点で打ちどめという形にしたのですけれども、それはこっち側からするとぎりぎりの選択であったということで、かなり消極的なのですけれども、もし中止になったとしても、何か大きな制度設計の変更がなくて済むように、自分たちを守るみたいな形にしてしまったというものがあります。

ただ、実は共通1次のときに、僕らだと中学校や高校だったので、実は今回調べてわかったことが非常に多くて、実は入試期日を変更した、それも高校の強い要望によるものだとかわかったのも、実は最近のことですので、具体的にどういうアクションかというのはイメージしていないのですが、もう決まったことだからとか、無力感という形での対応というのは、ちょっとだめなのかなという感じで、少し心を入れかえようかなと今回勉強している最中に思いました。ただ、私が心を入れかえるのと、組織が変わるかというのは、また別問題ですので、このあたりで勘弁してほしいかなと思います。

宮本友弘准教授(討議司会)：

そのあたりは悩ましいと思います。

倉元先生と大谷先生両方に来ている質問なんです。先生方のご発表で共通1次とセンター試験とあったのですが、これらの改革と現在の大学入試の共通テストの改革の問題点について、共通するものと違うものは何か。今後へのインプリケーションは何かということについて質問

がございます。それについて、では倉元先生からお願いできますか。

倉元直樹教授：

大きな話ですね。正直に言いますと、共通1次導入のときも、そこから大学入試センター試験に変わったときも、教育に関して大真面目な議論をしていたなと僕は思います。今回は、教育だけに関して考えていては全く理解できない、というのが正直なところ。そこが一番大きく違うのではないかなと思っています。だから、今までであれば、もしかすると声を上げて云々といったことが、実際に力として通用してきたのかもしれないんだけど、現場にいる感覚として言えば、それはなかなか難しいよね、というのが正直なところ。

幸い、東北大学という大学は、ボトムアップの議論を結構大事にしてくれるところなので、さっきの話、英語外部試験の件ですけれども、まずワーキンググループみたいなのがすでにあったのです。この問題に関しては、そのメンバーで、随分時間をかけて状況を共有しました。さらには国立大学協会の方針、・・・これは他のことも含めて聞いたのですけれども、・・・「一般入試の全ての受験生に外部試験を課すということに関してどう思うか」というのを高校に調査しました。東北大学に多くの受験生を送り出す高校ということで、我々にとってのステークホルダーですけれども、結論から言うと、国大協方針賛成は8%でした。それは、初年度ですね、「外部試験を求めない」ということを、昨年の基本方針で発表しましたが、その理由にはなったのかなと思います。

ですから、ここから先は個人的な考え方なのですが、やっぱり「受験生保護の大原則」と入試の主体が大学にあるということをどういうふうに考えるかですね。それを一番に考えることしか、今の状況ではできないかなと思っています。というのは、またロジックなんですけれども、英語に外部試験を入れることの根拠は、ポジテ

イブフィードバックですね。「高校教育を変えるため」というロジックなんです。それと様々な状況を考えたときに、その効果がどのぐらいというこの見積もりと、私どもの受験生をきちんと守れるのかという話、どちらが重いか、ということになります。大学として、それをどう考えるかという課題が突きつけられたと思っています。

ということで、ちょっと聞かれたことと違うことを答えてしまったのかもしれないのですが、今回の改革では、おそらく教育の中だけで考えても答が出ない問いを投げかけられているような気がします。

大谷奨教授：

何か昔というか、かつてのものと今の比べてというので、気がつくこと3点ほどあるのですけれども、1つは発表させていただきましたように、共通1次の場合、非常に長い論議で、国民的といっているような検討の場所で論議されたというあたりが、実は今回とは全然違う部分があるかなと思いながら、見ておりました。

それから2つ目は、実はこれは似た部分ということになるのかもしれませんが、2次試験で工夫するというのが、今回も多分求められるような気がするのですけれども、これも発表でお話ししましたように、前回はあっという間に息切れしてしまった。人的資源とか、財源も枯渇して、結局普通の学力試験をすることになったという経験があるのであれば、それがわかっているからということで、前もって手当てできないかということをやっぱり考える必要があります。

それから3点目は、今の倉元先生のお話で気づいたのですけれども、高校教育が変わったから入試も変えなきゃだめだとか、あるいは高校のために何とか大学入試を変えなきゃだめなんだというところは、共通1次も、これもお話ししたように、調査書と共通テストで大学入試というのをしましよとなっていたのが、いつの間にか調査書の話がなくなってしまって、2次の前

に1次をするという大学側の論理に変わっていったというところが、実は見てとれたような気がします。

今日の英語の4技能にしても、実は最初の論議の出発点は、これからは高校で4技能やるから、大学でもしっかり見てくれと、そういう筋であったはずが、いつの間にか4技能を入試に入れることによって高校の教育を変えるという話にいつの間にか変わってしまっていると、いつ変わったのかというあたりは、精査しなきゃだめだと思うのですけれども、結構その上下関係が簡単にひっくり返るというものがあるので、そのあたりはやはり気をつけて見ていかなくてはならないのかなというふうに思います。

石上正敏特任教授(討議司会)：

それでは、次のご質問ですが、入試改革に対する高校現場での教員間の意識の差というか、認識の差というものがあるのではないかと。学校にもよると思いますが、多かれ少なかれ、そういう意識の差、認識の差があるという前提で、それをどのようにして埋めていくか、解消しているのかという点について、高校現場の3名の先生方にお聞きしたいということでございます。渡辺先生、廣瀬先生、宮本先生、お願いいたします。

渡辺豊隆指導主事：

高校の教員の中での入試改革に対する受けとめ、あるいはその対応に対する取り組みの温度差というところかもしれませんが、根本的にはまだ情報が少ないとか、不透明というところがありますので、何か大きく変わるのだなという動きについての認識はあるのですけれども、それに向かってどうしていくかというところの具体的な方策については、なかなかまだ共通実践までは行っていないなというところになります。

多くのことを情報収集しながら、こう変わったときにはこう動こうとかいう中で、進路指導の多様化というところでの準備はしているので

すけれども、外部検定試験の対応については、動きはあるのですけれども、AO入試、推薦入試、学力検査が名前は変わり、学校型選抜、推薦とかですね、こういう形に対する取り組みというのは、色々な準備段階のところかなと思っているところです。

教員の認識については、入試も大幅に変わるというところもあるのですが、繰り返しになりますけれども、入試が変わるから授業を変えようということよりも、先ほどご指摘いただいたように、学校側で頑張っていることをちゃんと評価してほしいという気持ちになれるように、学校現場のほうは授業改善とか、カリキュラムマネジメントとか、その辺も積極的に取り組んでいる最中であります。

廣瀬辰平教諭：

まず、この高大接続改革会議があって、答申が出たときから、理念と具体的な情報とは分けて理解する必要があるなどずっと思っています。教育に対する理念については共感できることもとても多くて非常に勉強になることもありますし、保護者に説明したことは多々あって、それと具体的に入試の仕組みがどう変わっていくかというのは、また別の視点で整理する必要があるかなと思っています。

その上で、まず情報については、いろんな場でのいろんな情報が発信されているので、そういった場に先生方に行っていただくというのが、一番広めるポイントになるかなと思いますが、ただし、それだけだといろんな形でその情報がいろんな解釈がされてしまうので、最後は学校の中でどういう教育をしていくかということに落とし込む必要があるんだろうなと思っています。そのために、基本的には教員間で話すことと、あとは先ほど私もスライドの中で年3回職員研修があると申し上げましたが、そういう場で教員が喋るような、しっかり普段の教育を見直したりとか、その教育がどこに向かうのかを喋る場を設けることで理念も共有しながら、情報を整

理していくことができいくのではないかと思いますので、そういう場を使ってクリアしていきたいなと思っています。

宮本久也校長：

確かにこの認識の差というのはあると思います。一つは、それぞれの学校の体制とか組織力、そこによってこれは大きく違うだろうなと思います。多くの先生方は真面目ですから、つまり目の前の子供の指導にまず注力してしまって、先のことは考えていない、考えられないみたいな方もやっぱり結構いらっしゃるわけです。それから、学校全体が、つまりその今廣瀬先生がお話になったように、例えば定期的にそういう校内研修等を開いて、情報の共有化をするとか、そういうことがしっかりできている学校はかなり危機感もあるし、いろんな対応が組織的にとれていると思うのですけれども、必ずしもそうではない学校も残念ながらまだありますよね。いわゆる蝸壺みたいな学年ごとでその指導が完結していたりとか、あるいは教科の中でなかなか教科を超えてのいろんな情報の共有ができていないようなところもあったりして、だからそういう学校は非常に遅れていますよね。

逆に非常に危機感を持っているところは、早目に情報をキャッチして、校内研修をしたりして、先生方の意識を、認識を共有して動いているところがあって、そこによって多分相当差があるのかなと。私がいつも運営委員会等で話をしていたのは、先生方自身が、この問題を主体的に自分の学校のものとして捉えて、自分でしっかり情報を整理して、咀嚼して生徒に伝えてくださいと。一番まずいのは、業者に振り回されるということなんです。業者のほうがいろんな情報を持っていますから、それが学校に流れてきて、いわゆるバスに乗り遅れるな、というような情報で、ばばっと動いてしまう。そういうことをやってしまうと、本質を見失うということがあるので、そういうことがないように、ということは機会あるごとに話をしていますし、そういう意

識を持っている学校が大分今多くなっているとは思いますが。

宮本友弘准教授(討議司会)：

ありがとうございました。若干ずれるかもしれませんが、渡辺先生と廣瀬先生にお聞きします。そういう色々な意識がある中で、先生方個人の意見でもいいのですが、宮本先生の最後のスライドにございましたように、大学に求めたいこととしては、具体的にどんなことを今ご認識されているのでしょうか。では、廣瀬先生からお願いいたします。

廣瀬辰平教諭：

まずは、ちょっとわかりづらいかもしれませんが、2点で、やっぱり高校と大学で入試を作っていくと言ったら語弊があるかもしれませんが、そういう場としてもっと高校教員と大学教員が喋る場というのが設定されるといいかなと考えています。

もう1点は、やはり情報が早く正確な形で出てくることはすごく望みますので、個別入試がどういうふうに進んでいくのかということを早期にわかりやすい形で、早目に情報提供していきたいという2点です。以上です。

渡辺豊隆指導主事：

高校の現場から大学側にというところですが、今ご指摘あったように、地元、鹿児島大学と高校の教員の協議会というか、連絡協議会という形で説明会だったり、協議会だったりというところを設けています。なので、色々情報をお互いに共有しながら、生徒のために、受験生のために作り上げていただければと思います。

それと、先ほどの回答にもありましたけれども、それぞれの大学が求めている生徒、学生像というのがアドミッション・ポリシーで出されていると思うのですが、大学名を隠してアドミッション・ポリシーを見れば、これはどこ大だというのがわかるかどうか、ちょっとまた難

しいと思うんですね。なので、東北大としては学力、研究力重視という方針は示されておりますけれども、いろんな大学で推薦入試も取り入れたい。だけど、学力も求めたいとか、さらにより上にとかいうのをどんどん積み増しされるというのも高校としては困ります。したがって、学力、主体性、全部を求められるというのは、少し難しいのもありますので、それぞれの大学の機能というのをしっかりと提示していただいて、知(地)の拠点とか、それぞれありますので、そういうところのポリシーというのも教えていただければ、生徒にも指導しやすいかと思います。以上です。

宮本友弘准教授(討議司会)：

宮本先生も、もし具体的にあれば、何かこれだけは求めたいということがあれば、おっしゃっていただきたいのですが・・・ないですか。

では、今の高校の先生2人の求めることを聞いて、大学の先生方から、それにどう応えていくかという意見が欲しいのですが。では大谷先生から。

大谷奨教授：

実は同感とか共感する部分が非常に多くて、私高校の教育とか、学校経営とかに興味があるものですから、大学の紹介とか、宣伝を高校の進路指導の先生方に行くときも、気がついたら学校経営とか進路指導のあり方とか、そんな話によくしてくるのが多いのですけれども、その中で例えばこっちへのフィードバックとか、あるいは高校の実態を知るといった機会になっているのですね。

一番最近の例でショックだったことをお話ししますと、うちの入試では今度総合選抜で調査書を使うということで、余り先生方のご負担にならないようにという形で、どういうふうに調査書が作成されているのかという話を伺いに行ったときに、私はてっきり初任研か、あるいはその途中の研修で調査書の書き方の研修というのがあるのだと思っていたのです。ないですと言

われたときに、えっとなりまして、これはかなり前提を変えて話を進めなければならないというのがその場でわかったりするということがあります。なので、一緒に喋る場所、あるいは情報共有できる場所があるといいというのは、私も全く同感です。

ただ、一方で渡辺先生がおっしゃったように、実は筑波大も茨城県の高등학교の先生の進路指導部と年に1回定期的に懇談会の場を設けているのですが、結局茨城大学と県立医療大学と私たちが大学の説明を一方的にして終わりという形になってしまって、連絡協議会の狙いというもの、情報の共有とか、こういう人が欲しいとか、こういう入試にならないですかという要望を示す場所にならないというので、機会はあっても、それをどういう風に実質化させていくかということは、また考えていきたいと思っております。

倉元直樹教授：

ちょうど今日のこの機会をそういう場として利用していただければということが、私の願いです。以上です。

宮本友弘准教授(討議司会)：

この場がそういうようなコミュニケーションの場になればいいということですね。ありがとうございました。

そろそろお時間が迫ってきたのですが、共通1次、そして入試センター試験ということを見てきまして、そういった歴史的な財産を踏まえながら、やはり宮本先生の最後のスライドにありますように、現在の入試改革が円滑に進む上で、積極的な提言というのを行っていく必要性もあると思います。そういった意味で、最後にまとめとして、それぞれこれから向けての提言とまでは行かないまでも、何かメッセージをまとめとしてご発言いただけますでしょうか、順番に、それでは大谷先生からお願いします。

大谷奨教授：

高校での教育ではなくて、もっと言うと小中高の教育が大きく変わっていくということは、話にも聞いていますし耳にもするというので、当然それを大学が引き継いでいかなければならないということを考えると、先ほどの話に戻ってしまうのですが、大学自身が高校教育をよく知らなければならないだろうと。本当に最初に戻ってしまうのですが、どうしても自分の受験経験、あるいは自分の受けた高校教育から脱した論議というのが大学の中では非常にしづらいという部分があります。あるいは、昔の大学と高校との関係という形で、今でも時々高校は大学の予備教育だからと平然と言う大学人もいるということになりますと、まずそこから変えなきゃならない。どうして変えたらいいかという、先ほど言ったような対話の場とか、話し合いの場、あるいは我々がさらにもっとよく高校のほうに出かけていってお話を伺うということが必要なのかなと思います。

営業となってしまうかもしれませんが、今日おいでの先生方の高校にもお邪魔して、色々お話を伺うという機会をなるべく作っていきたく思いますので、そのときには邪険にしないで話を、胸襟を開いてしていただければと思っております。

倉元直樹教授：

「受験生保護の大原則」ということを言わせていただきましたけれども、その一番大事な「受験生保護の大原則」にのっとって、どういうふうに意思決定をしていくかということを問われているのだということは、多分、本学の入試にかかわる関係者には、ある程度理解してもらえていると思います。それをまず東北大学としてはこれから示していくということになるんだろうなということが一つです。

あと、フロアに向かっての呼びかけということになるかと思います。大丈夫という保障は、私はできないですが、できる限りの努力はさせて

もらいますので、どうか高校の先生方、それから受験生を送り出す立場の方、そこは信頼していただければなということの一つ思います。

もう一つは、他大学様にぜひこの状況を共有した上で、お互いの・・・言葉は悪いですが・・・利益と、それから大学側ができる形で高校側にどういうふうに手を差し伸べていけるかということと一緒に考えさせていただけるとありがたいなとは思っています。こんなところで終わらせていただきます。

廣瀬辰平教諭：

今日はありがとうございました。改めて大学側から発信されるメッセージとか、そういったものをしっかり読み取っていった、生徒におろしていかなければならないなということと、あと私はこれ入試が変わる、変わらないに関係なくずっと思っているのは、生徒をどうやって育てて大学に送り出すのかということに尽きると思うので、そこをブレずに、具体的な情報とか、そういったものをキャッチしていかなければなと感じたところです。今日はありがとうございました。

渡辺豊隆指導主事：

今日のテーマは、制度が変わるときということですので、制度が変わるといえば、ピンチをチ

ャンスにという言葉が出てくると思うのですが、今回のことについて、できるだけリスクを回避したいと。色々な混乱とか、リスクとか、そういうのを回避したいというのがちょっと先に立ってしまって、ちょっとギャンブルはできないなというのが昨年まで進路指導の世話役として考えていたところでした。不安とか、そういうのを煽らず、生徒が少し上向きに頑張れるように、今日のポスターは灯台が書かれていたけれども、一筋の光が生徒にとっても道しるべになるように、これからも頑張っていきたいと思います。本日はありがとうございました。

宮本久也校長：

やはりお互いがお互いを理解して情報共有するというのが、何よりも大事だと思います。ここ数年で本当に子供たちも急激に変わってきています。実際、学校の教育もかなり大きく変わっています。その変わっていく子供たちを何とか良くしていこうという努力をされている学校がかなりたくさん今出てきていると思うし、そういうところをぜひ大学の方々にもわかってもらいたいと思います。逆に言うと僕ら自身も各もあるわけですね。これからの時代を背負う人をどう育てるかというのが、高校にとっても、大学にとっても極めて大事なことで、そういう意味でももっともっとお互いが情報を共有する、



課題も共有する，そういう中で少しでもいい方向に行くように一緒に進んでいくということが何よりも大事ななと思っています．

宮本友弘准教授(討議司会)：

ありがとうございました．そろそろお時間なので，今日はこれで終了にしたいと思います．5人の先生，どうもありがとうございました．

(拍手)

庄司強特任教授(司会)：

5名の先生方，長時間にわたり，大変お疲れさまでした．皆様のご協力のおかげで，予定通りの終了時刻となりました．

平成 33 年度(2021 年度)入試における本学の基本方針について(予告)

平成30年12月5日

東 北 大 学

平成 33 年度入試においては、大学入試センター試験に代わり、大学入学共通テストが導入され、英語 4 技能を測る民間の資格・検定試験（英語認定試験）の利用及び国語・数学の記述式問題が予定されています。また、大学の個別選抜についても、学力 3 要素を踏まえた「多面的・総合的」評価による入試への転換が求められています。

このような入試改革に関し、本学の基本方針がこのほどまとまりましたので以下のとおりお知らせします。

1. 大学入学共通テストへの対応

(1) 英語認定試験(一般選抜)

- ① 本学では英語 4 技能の修得を重視しており、受験に当たっては「CEFR における A2 レベル以上の能力を備えていることが望ましい」ことを出願基準とします。
- ② ただし、この出願基準は出願に当たって英語認定試験の受検とその結果提出を求めるものではありません。本学は英語認定試験の受検と CEFR の A2 レベルの成績を志願者全員に求める「出願要件」とはしません。また英語認定試験成績を CEFR 対照表に基づいて点数化し、これを合否判定に用いることもしません。

(補足説明)

- ・ 本学では、入学後の教育において英語 4 技能の修得を重視しており、グローバルリーダー育成プログラムをはじめとして英語教育に力を入れています。入学者に対してもグローバル人材の基礎となる優れた幅広い資質能力の一つとして、一定水準の英語コミュニケーション能力を備えていることが望ましいと考えています。
- ・ ただし、平成 32 年度に予定されている英語認定試験については、公平公正な受検体制の整備や成績評価などに関しこれまでに様々な問題が指摘されております。平成 33 年度入試に利用するためには、現時点ではこれらの問題が解決する見通しが立っていないと認識しています。
- ・ また、本学が実施した高等学校調査でも英語認定試験を受験生に一律に課すことに対し、賛成が 8%と少数である一方、反対は 4 割を占め、高等学校をとりまく環境で十分準備が整っていないと理解されます。
- ・ このような状況において、平成 33 年度入試で本学志願者に対し出願要件として英語認定試験の受検を一律に課すことや成績を合否判定に用いることには無理があり、逆に受験生の公平公正な扱いを損ねる恐れがあると判断しました。
- ・ なお、平成 34 年度以降の入試については、英語認定試験に関する問題の解消と高等学校側の受入れ状況を勘案しながら検討を重ねていくこととします。

⁶ 東北大学(2019). 『平成 33 年度(2021 年度)入試における本学の基本方針について(予告)』平成 30 年 12 月 5 日.
(<http://www.tnc.tohoku.ac.jp/images/news/H33housin.pdf>, 最終閲覧日令和元年 9 月 17 日)

(2)記述式問題の活用(一般選抜及び総合型選抜(現行 AO 入試Ⅲ期))

①国語の記述式問題の活用については、以下のとおり取り扱いいます。

- 1) 段階別評価を点数化して合否判定に用いることはしません。
- 2) ただし、合否ラインに志願者が同点で並んだ場合、記述式問題の成績評価が高い志願者を優先的に合格とします。

詳細については、大学入試センターによる成績表示方法の決定発表を待って改めて公表します。

②数学の記述式問題については点数表示の成績を合否判定に用います。

(補足説明)

- ・思考力・表現力は重要ですが、本学では新共通テストの記述式問題(80字～120字)程度及びそれ以上の高度な問題が一般選抜の個別試験や AO 入試の筆記試験ですでに出題されており、思考力・表現力等の評価は現状でも十分可能であると考えています。
- ・段階別評価を点数化すること自体が段階別評価の理念に整合しない恐れがあります。
- ・また点数化した場合の点数の開きが本来の成績差を合理的に反映したものとは考えられず、受験生の不公平な扱いとなる恐れもあります。

2. 調査書等の扱い(一般選抜)

①学力 3 要素における「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の評価(主体性評価)については、志願票に調査書と対応した 5 項目程度のチェックリスト項目を設け、志願者がこれをチェックする自己申告方式をとります。

②その活用については、合否ラインで志願者が同点で並んだ場合、チェックリストによる主体性評価が高い志願者を優先的に合格とします。

③チェックリストにおけるチェックの根拠を調査書により確認することとし、その他の資料を求めることはしません。

④チェックリスト及びその評価方法等の詳細については改めて公表します。

(補足説明)

- ・主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を調査書や志願者本人が提出する資料、面接などにより適切に評価することは入学者選抜における重要な要素であると考えています。
- ・一方で、こうした評価によって志願者、高等学校及び大学それぞれに過重な負担がかかることは避けなければなりません。また、主体性評価を過剰に意識した活動が学校内外で増え、本来の学校教育活動が妨げられることがあってはなりません。
- ・こうした問題を考慮し、主体性評価について、本学では簡便なチェックリストによる志願者の自己申告方式をとるとともに、その根拠を学校内の活動を中心とした調査書の記述に求め、調査書以外の資料の提出を求めないこととしました。また、調査書の記載については根拠になる事項が簡潔に記述されていればよく、事項の多寡、記述量は評価しません。

令和3年度(2021年度)一般選抜入学試験における主体性等の評価について(予告)

令和元年7月17日

東 北 大 学

「平成33年度大学入学共通テスト実施要項の見直しに係る予告」(平成29年7月13日公表、以下「予告」とする)において、「一般選抜の課題の改善」として「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」をより積極的に評価するために、調査書等の積極的な活用を促し、どのように活用するかを募集要項等に明記することが指示されました。

東北大学では、予告の公表を受けて検討した結果、「平成33年度入試における本学の基本方針について(予告)」(平成30年12月5日公表、以下、「東北大学の基本方針」とする)において、「調査書等の扱い(一般選抜)」に関する予告を行いました。具体的には、

- ① 志願票に調査書と対応した5項目程度のチェックリスト項目を設ける
- ② 合否ラインに並んだ場合、チェックリストによる主体性評価が高い志願者を優先的に合格とする
- ③ チェックリストの根拠を調査書により確認し、その他の資料は求めない
- ④ チェックリスト及びその評価方法等の詳細は改めて公表する

との方針を示しました。

このほど、「東北大学の基本方針」で言及していた「チェックリスト及びその評価方法等の詳細」について以下のように定めましたので、公表いたします。

1. チェックリスト

○ 志願票に以下の5項目のチェックリストを付し、志願者の自己申告とします。志願者は以下の各記述に関する自らの取組状況を振り返り、「該当する」と考えた場合には末尾の[□]にチェック[☑]を入れてください。

- | | |
|------------------------------|---|
| (A) 高校における学習活動に主体的に取り組んできた | ☑ |
| (B) 部活動・ボランティア活動に主体的に取り組んできた | ☑ |
| (C) 生徒会・学校行事等に主体的に取り組んできた | ☑ |
| (D) その他の活動に主体的に取り組んできた | ☑ |
| (E) 高校時代に取得した資格、獲得した賞がある | ☑ |

(補足説明)

- ・ 自己申告はチェックのみとし、自由記述欄は設けません。

⁷ 東北大学(2019). 『令和3年度(2021年度)一般選抜入学試験における主体性等の評価について(予告)』令和元年7月17日.
(http://www.tnc.tohoku.ac.jp/images/news/20190717yokoku_2.pdf, 最終閲覧日令和元年9月17日)

2. 合否判定

○ チェックリストは合否ラインに同点で並んだ志願者の合否判定を行う際に利用します。

3. 主体性評価チェックリストと調査書記載欄との対応関係

- (A) 高校における学習活動に主体的に取り組んできた：
「7. 指導上参考となる諸事項」(1) 学習における特徴等，(2) 行動の特徴、特技
- (B) 部活動・ボランティア活動に主体的に取り組んできた：
「7. 指導上参考となる諸事項」(3) 部活動、ボランティア活動等
- (C) 生徒会・学校行事等に主体的に取り組んできた： 「6. 特別活動の記録」
- (D) その他の活動に主体的に取り組んできた：
「7. 指導上参考となる諸事項」(6) その他
（「5. 総合的な学習の時間の内容・評価」「8. 備考」も根拠とする場合がある）
- (E) 高校時代に取得した資格，獲得した賞がある
「7. 指導上参考となる諸事項」(4) 取得資格、検定等，(5) 表彰・顕彰等の記録

(補足説明)

- ・ 調査書のいずれかの欄の一つでも該当する記述があれば，自己申告（チェック）の根拠として利用します。
- ・ 調査書の記載内容や記述の多寡は合否判定に影響しません。
- ・ 調査書の記入漏れは，可能な限り本人の不利にならないように評価します。
- ・ 本人の自己申告（チェック）がなくとも調査書に根拠となる記載がある場合には，可能な限り本人の不利にならないように評価します。
- ・ 調査書が発行されない志願者の場合，調査書の記載漏れと同等に扱います。

閉会の辞 東北大学副学長

山口 昌弘

庄司強特任教授(司会)：

最後に、東北大学副学長山口昌弘より閉会のご挨拶を申し上げます。

山口昌弘副学長：

ただいまご紹介いただきました東北大学副学長の山口と申します。

本日は、大変お忙しいところ、わざわざ東北大学高等教育フォーラムまでご足労いただき、また4時間という長い時間にわたってご参加いただきまして、まことにありがとうございました。

私自身は必ずしも国内の入試事情に詳しいというわけではございませんけれども、フロアを含めて、会場の熱気に感銘を覚えた次第でございます。

私自身、3年目の共通1次テストを受けたというところございまして、時を経て、大学の助手になったときには、あるときにセンター試験の試験監督をなさいと仰せつかって、何か名前が変わっただけなのかなと最初は思ったということ覚えております。本日は共通1次試験からセンター試験に至る40年の軌跡につきまして振り返るという機会も持てまして、非常にすばらしかったと思っております。

また、高校の先生方の現場での真摯な取り組み、また大学への要望といったことも承る非常によい機会が持てました。差し迫った入試改革を迎える中で、皆様方の本気度が伝わってくる、そういったイベントだったと思います。講演、現状報告、討論と非常に興味深いお話がございました。まず、そのことに関して御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

平成から令和へと時代が変わっていく中で、高校と大学がさらに力を合わせるということによって、よりよい連携関係を構築できればと、そういったことに対する示唆が今日得られたので



はないかと思うところでございます。

さて、東北大学は理念の一つとして門戸開放ということを掲げております。本学を志望する受験生は、実力さえあれば誰でも入れるということでございます。その中には、受験の機会を保障するということも含まれております。また、入試の最終責任というのは、各大学が負っているということも重要なことだと理解してございます。

今回の高大接続改革に関しましては、本学は本学の理念をしっかりと持ち続けながら臨んでいくということが、改めて重要であるということを確認したところでございます。

私自身は、本学の教育改革、国際戦略を担当し、グローバルラーニングセンター長、それから言語・文化センター長といったことも仰せつかっております。そういった立場から、今回の議論をお聞きしながら、高校と大学の英語教育について思いをめぐらせておりました。

ここで、少しだけ本学の英語教育についてご紹介させていただければと思います。

本学、一昨年度に第1期の指定国立大学法人として東京大学、京都大学とともに指定されました。これはグローバルな社会の中で、国際的なレベルでの競争、そういったものを求められているということでございます。国際的な研究交

流のみならず、グローバルキャンパスの構築、あるいはキャンパスに留学生を受け入れていくということ。また、本学の学生を世界に送り出していくといったことに対して力を入れてきたということも高く評価されたと思っておりますし、また今後そういったことをさらに取り組んでいかなければならないということであると思っております。

現在、35の国と地域、約230校との大学間交流協定を結びまして、この数は国内の大学でも有数でございますけれども、そういったところと交流を進めています。多様な海外研修、留学プログラムを提供しております。当然学内の教育の中では、さまざまな形で英語の4技能を習得するということを重視しております。通常の授業はもとより、正規の授業以外にも、東北大学イングリッシュアカデミーという実践的な英語運用能力を引き上げるようなプログラムを用意しております。こういった英語教育に加えて、本格的に世界で活躍したいと考える学生のために、英語力だけではなくて、将来国際社会の中でリーダーとなって活躍できるような素養を身につけるということを目標にいたしました東北大学グローバルリーダープログラムといった教育プログラムを用意しております。

こういった努力が高校側に評価されたのかどうか分かりませんが、入学直後に毎年全入学者に *TOEFL-ITP*®の試験をしておりますが、そのスコアは年々向上しております。もちろんこれは本学のみならず、日本の各大学においても国際的に通用するような英語力をつけるといった多くの努力が行われているということだと思います。こういった大学の取り組みを理解していただくことによって、高校時代から大学入学後までを見通した語彙力、英語の4技能をバランスよく習得していけると、そう思っているのではないかと感じます。

高校時代に培った英語の基礎力に加えて、入学後のグローバルな環境の中での国際的なコミュニケーション力を身につけて、そういった中

で実社会あるいは世界で通用する英語力が身につけていく。きょうフロアに集まっていた皆様方には、ぜひその点をご理解いただければと思います。

繰り返しになりますが、高校までの教育と入学試験、そして大学における教育について、有機的に連携を深めながら、かつそれぞれが責任を持って進めるということで、国際的に通用する力を持った若者を育てていけるということだと思っております。

最後に、改めまして、本地基調講演をくださった大谷先生、倉元先生、それから現状報告していただきました渡辺先生、廣瀬先生、宮本先生、大変ありがとうございました。

また、たくさんの質問を寄せていただきました会場の皆様にも厚く御礼申し上げます。私からの閉会の挨拶とさせていただきます。本日は大変ありがとうございました。

(拍手)

庄司強特任教授(司会)：

ありがとうございました。

アンケートの回収を受付で行っております。ご協力をお願いします。

以上をもちまして、本日のフォーラムを終了いたします。お忘れ物がないよう、お気をつけてお帰りください。本日はありがとうございました。

講評

講評 1：改革の本質は何か

青森県立青森東高等学校
教諭 三浦 美香代

1. はじめに

入試制度改革は、一昨年度までは正直なところ半ば他人事で、何となくの不安はあったが不明点も多かったため、「なるようになるさ」とあまり意に介していなかった。しかし、昨年度、「それではいけない」と神様が私に喝を入れた出来事が起きた。それは、本校外国語科主任としての命を受けたばかりの春、突然地区外国語科委員長から電話があり、青森県高等学校教育研究大会で分科会の発表が当たっているがタイトルは決まったか、と聞かれたことから始まった。何のことか全くわからず、寝耳に水だった。聞けば、数年以上前からローテーションで本校担当が決まっていたのだが、この1、2年は毎年外国語科主任が変わり、さらに残念なことに、前年度は地区主任会議でローテーションの確認がされなかったために、前任者も知らないまま主任職が引き継がれてしまったようだった。約1か月でタイトルと発表者を決定し、残り1か月半で詳細をまとめ上げなければならなかった。窮地に立たされながら教科会議を何度も重ね、たどり着いたのは入試制度改革に伴う英語外部試験に向けての対策であった。つまり、**Speaking** 指導の強化である。本校は、市内ではいわゆる2番手の進学校であり、これまではどちらかと言えば指導が手薄になっていた分野である。過去の取り組みの反省点を踏まえ、「**Speaking** 指導の試み」として試行錯誤を重ね、短時間でなおかつ効果的に行う方法の一つにたどり着いた。それは、情報処理教室にあるパソコンを利用して、クラスの生徒全員が一斉に **Speaking** に取り組み、音声データを保存する方法である。生徒本人が聞き直し確認するのはもちろん、後から全員分をALTと担当教員とで評価する。まさに、英語外部試験で行われる **Speaking Test** を参考に、本校オリジナルで作成し、評価基準もA

LTと一緒に考えた。結果、昨年度夏、その取り組み状況をまとめたものを何とか発表することができ、その後も継続してその形式の **Speaking** 指導を行っている。

このように、入試制度改革は、生徒にとって過去の制度では不足していた分野の能力を測るために必要であり、高校の現場にとっても、保守的になりがちな指導方法を改善する大きなきっかけとなるため不可欠であると、今となっては実感している。そんな矢先、今回のフォーラムへの参加を本校進路指導部主任から勧められた。まだまだ本校の新たな指導の取り組みも検討過程であるため、入試制度の改革がなぜ必要でどのように行われているのかを改めて学び、未来ある生徒のため現場へ還元していきたいと考え、参加させていただくことを決意した次第である。

2. 基調講演1について

諸先輩方から思い出話として聞かされていた共通1次学力試験だったが、改革の基本構想から、導入に至るまでの試行錯誤の様子、そして導入後の意見や問題点まで、新聞の記事や文献を用いて紹介され、細部までわかる内容であった。特に印象的であったものの一つは、1974年4月の北國新聞社説にあった「“大学入試は受験生のためにあるのであって、大学人自身が主導権を持つのではない”との基調をはっきりと打ち出すべきであろう」という言葉である。実際に1978年の「大学入試を考える」初のシンポジウムでは、どの大学も二次試験の取り組みについて「足切りせざるを得ない」など各々独自の方針を打ち出し、いわば「好き勝手」なことを言っており、高校側の意見として「大学は高校現場の意見を聞かずに入試を進めすぎる」という声があがったようだ。改革の論点がやはり大人中心、大学中心にずれてしまったということだが、実

は、誰のための何のための改革なのかを基調として打ち出しながら、「現状を少しでも改革してゆくための布石として」、高校側と対話的に改革を進めようとしていたということがわかる記事であった。

また、非常に衝撃的であったのは、試験実施まで1年を切った1978年1月時点で、文部省が日程を1978年12月23・24日から1979年1月13・14日に変更することを通知したという事実である。高校側の「高校3年2学期の文化祭行事に圧迫感が加わる」ため「なるべく遅い時期に実施してもらいたい」等の意見も反映した結果だったのであろう。今回の入試改革も、現時点でまだまだ不透明な内容が多く、英語に関しても徐々に詳細が明らかになってきてはいるが、特に民間の外部試験導入に関わる関係上、果たして間に合うのか、現場としては不安感を否めない。高校側がもっと声をあげる等すれば、場合によっては延期も有り得るのだろうか。

3. 基調講演2について

まさに自分がセンター試験導入初期に受験したのだが、なぜ導入され、なぜ長期間続き、なぜ廃止されるのか、わからないことが多かったことに気付かされた。共通一次試験導入時に「基調」としていたはずの「受験生のための大学入試」は、事前出願方式により結果として一発勝負となり「受験生保護の大原則」を侵していたことから、昭和62年度改革により取り入れた受験機会の複数化、いわゆる「AB日程」によって、逆に第1志望の受験生がはじかれてしまう傾向が強くなり、受験生にとっても大学側にとっても不利益となるという「共通一次試験の失敗」へとつながったようだ。そこでこの重大な問題に素早く対応したのが大学センター試験であり、その対応の素早さが約30年もの長期間続く制度の要因の1つであったとは知らなかった。センター試験では、国公立立を通じて大学側もuserとして自由に利用できるようになり、なおかつ受験生の第1志望達成及び各大学の利害調整を図る

ことができる分離分割方式へと徐々に移行した。また、共通一次試験で課していた5教科7科目を撤廃し、自由に5科目選んで利用できるア・ラカルト式にしたのも特徴的である。私自身は、AB日程かつ苦手の理系分野は数学か生物の得点が高かった方を利用できる形式で受験をし、非常に楽をさせてもらった記憶があるが、今思えばそれはセンター試験導入初期の過渡期に受験したためであったのだ。

その後センター試験は、自分の専門教科で言うならば、英語のListening試験が導入され、当初現場では急遽Listeningの指導を取り入れる等大わらわであったが、受験に必要となると教員も生徒も必死になって取り組み、結果的に生徒に不足していた技能の強化が進んだのは事実である。また、筆記の問題も毎年よく作成されており、発音・アクセントから文法そして長文読解まで、基礎的な力がしっかり定着していないと高得点はマークできない良問であったように思う。そのため、なぜ廃止する必要があるのか、正直なところ非常に疑問であるのだが、センター試験のメリットだったはずの私立の参加が、受験者層の下方拡大を招き、特徴だったはずのア・ラカルト方式が複雑な受験パターンや、「地理歴史、公民」から2科目自由選択に変更したことによる試験監督ミスへとつながり、廃止の方向に動いたことは受け入れなければならないのだろう。そして、今新たに新学習指導要領で求められている思考力・判断力・表現力を伸ばし、英語で言うならばSpeaking分野はもちろん、Listening力を更に強化していこうとする時代へと突入したのだ。個人的な意見を言うならば、純粋にSpeakingの導入もListeningの比重拡大も賛成である。むしろ、ListeningもSpeakingも自分が生徒だった時代から受験分野の対象だったなら、経済的に留学が叶わなかった我が家のような環境でも、もう少し苦勞せずに身に付けられた技能なのであろうと、現在の生徒たちを羨ましく思う。ただ、果たして2020年実施に間に合うのかどうかという不安と、センター試

験の英語筆記問題が廃止されるのがもったいないという気持ちは拭い去ることができないのも事実である。

4. 現状報告 1 について

同一の県内なのに端から端までが青森—東京間以上に離れている鹿児島県環境に度肝を抜かれたが、離島の大島高校でも 1 学年 7 クラスもあり、拠点校として地域の期待を背負っている大規模校であることに更に驚いた。そして、今回のフォーラムは「入試制度が変わるとき」というテーマであるため、私自身大学入学共通テストにばかり注目してしまっていたが、渡辺先生がおっしゃるように、同時進行でいわゆる「高等学校基礎学力テスト」の検討が 2015 年度から始まったことは、高校にとってダブルで対応を迫られる非常事態であったことを再認識させられた。現在では「高校生のための学びの基礎診断」として開発された民間試験を学校側が利用していくという方向となり、我が校ではかねてより利用しているスタディーサポートをベースにポートフォリオの方法などを検討している最中である。元を辿ると、この「学びの基礎診断」も高大接続の考えから生まれたもので、やはり新学習指導要領で求められる「主体性」を養う目的で取り入れられているようだ。

5. 現情報報告 2 について

「—今までとこれからを考える—しかし、本質は変わらない」という廣瀬先生の最後の言葉に大きく頷いてしまった。「教育に完全な正解はないため、常に最善を考えることと、手直しを続けることが大切」というのは、全くその通りである。共通一次試験の導入から廃止、センター試験の導入から廃止、そしてこのたびの「学びの基礎診断」導入も新共通テストへの改革も、全てはその都度、それまでの生徒の実態から反省点を見出し、より目指すべき生徒の姿を想像し、その理想に向かって教育ができる最善策をそれぞれの時代の教育者がそれぞれの立場から考え、すり合

わせて実行に移す。教育現場はそのたびに対応を迫られ悩みながら改革に取り組むが、それはすべてその時最善だと思う生徒の在るべき姿と明るい将来のためであり、生徒の人的成長を切に願う証であろう。

6. 現状報告 3 について

このフォーラムに参加させて頂いた当時、特に英語教師としては民間の資格・検定試験の詳細が少しずつしか発表されておらず、不安と焦りを抱えていた。そのため、全国高等学校長協会会長等、数々の教育現場の長を歴任された宮本先生が、この報告で数々の問題点を指摘し、我々の正直な気持ちを代弁してくださったことで、胸のつかえが取れ、気分が晴れたのを覚えている。その後、英語に関する情報は徐々に流れてきており、GTEC の年 4 回の受検日が発表されたことで、我が校も進路指導部を中心に、現在どのような方針で対応するのか、次なる段階の話し合いに入ったところである。また、共通テストでは、リスニングとリーディングが 100 点ずつで出題されることになることが分かり、今後、リスニング力向上を目指した指導がより一層必要になるであろうと予測される。

7. 討議

先の基調講演及び現状報告を踏まえて、参加者が質問を投げかけ発表者がパネリストとしてそれに答える形式は、非常に有意義であった。中でも、高校側からの率直な疑問に大学側が答えたり、逆に大学側から高校側の意見に歩み寄って話して下さる場面は、まさに高大連携がこのような対話から発展していけばお互いの求めるものをすり合わせて生徒の人間性育成にさらに役立っていくだろうと期待感を膨らませるものであった。

特に印象に残ったのはポートフォリオの討議の中で、大谷教授が「廣瀬先生の『主体性の評価とは形成的に評価するということである』という言葉に私は大賛成である」とおっしゃったと

ころである。恥ずかしながら常識の乏しい私にとって、廣瀬先生の発表の際に「形成的評価」という言葉は知識がなかったために気にとまらずに終わってしまっていたのだが、大谷先生のこの一押しにより、あらためて「形成的評価」とは何かを家に持ち帰り調べた。その結果、ポートフォリオ等「高校生のための学びの基礎診断」そのものに対する私自身の考え方も大きく変わるに至った。「生徒に主体性を求めること自体、生徒の主体性を奪うことになるのではないか」という声上がるのもわかるが、この「学びの基礎診断」を通して、生徒が自分の将来のこと、現段階で今自分がどの程度の学力でどういう状況で、将来の夢を叶えるためには何をどのようにやっていけばいいのかということ等を自分自身で深く考えながら高校生活を送っていくのである。その過程で教師が時々生徒の状態を個別に把握し必要があれば手を差し伸べるのだが、そのことを「評価」と呼んでいるということであろう。教師が少し促すことにより、生徒はさらに自ら考えて人間的に成長していくことにつながる。それはまさに主体性が養われているのであり、将来大学、そして社会に出てからも逞しく生きていく力となるはずである。

8. おわりに

勉強させて頂くつもりで参加させてもらったわけだが、実のところ、このレポートは私にとって非常に荷が重かった。実際、いざレポートを書こうと思うと、いかに自分が無知であり、なおかつ受け身の姿勢でこのフォーラムに参加していたかが露呈され、あらためて資料を何度も読み返したり記録していた音声を何度も聞き直したり、不明点を調べたりしながら頭の中を整理した。そして、これまで勤務校では、何度も入試改革や学びの基礎診断への取り組みについて話し合いの場を持ってきたのだが、自分が表面的なことばかりを捉えていて、改革の本質や意図を正確には把握していなかったことにも気付かさ

れた。今回、フォーラム参加及びレポート作成という機会を与えて頂いて、現状への不平・不満を言うのではなく、未来ある生徒たちが持って生まれた能力を、十分に引き出してあげられるように、学んだことを活かしていきたいと決意を新たにしたところである。

講評 2：思考力を育てるためには

岩手県立宮古高等学校
教諭 久保 朱美

1. はじめに

今回のテーマである「入試制度が変わるとき」は、まさに「今、このとき」である。この入試制度改革は、本来の目的を果たすものになるのだろうか？そもそも誰のための入試改革なのか？という疑問は常にある。改革の話が出た当初は、新しい入試制度を生徒達が乗り越えることができるものだろうか？と不安や焦りを感じた。生徒達に求められることが多くなるだけなのではないかと感じていた。県内外の研修会や先生方のお話を伺う中で、ポートフォリオについても、体験を積み上げるのではなく、生徒の成長を生徒本人に気づかせることが大切であり、そのための「考える力」をどう身につけさせるかということをもっと真剣に考えるべきではないかと思い始めているところである。今回、貴重な機会をいただき、改めて何が本当に大切なのかをしっかりと見極めたいと思いながらお話を伺った。

2. 二つの入試改革を比べて

基調講演Ⅰ及びⅡでは、筑波大学の太田教授と東北大学の倉元教授から、二つの大学入試改革のお話があった。お二人の講演をあわせて伺ったことで、今回の入試改革の“不可解さ”を改めて感じずにはいられなかった。また、高校の現場ではどう対応すべきか、気をもむことが多いにもかかわらず、「なぜ」という原点に立って考えてもいなかったことに気が付いた。また、二つの入試改革は、それぞれの時代の社会情勢を背景に生まれただけでなく、新しい試験方法の導入を後押しする技術発展の存在（コンピュータやAI）によって成り立つのだとも感じた。

共通一次試験の導入にあたっては、国民を

巻き込んだ論議がなされてきたことや、高等学校の調査書を選抜の基礎資料にという考えが本来はあったということ、間際になっても高校側の希望を受け入れて試験日程を変更したこと等、慎重に時間をかけて準備されてきたものと改めて知った。一方、大学入試センター試験は、その共通一次試験の懸案事項の解決、偏差値偏重や受験戦争の弊害が叫ばれた中で、国公立大ばかりでなく私大も自由に利用できる共通テストということで導入された。センター試験は、受験生や大学の利益を考慮した対応をとりながら、ある意味、マイナーチェンジをしながら長く続く試験制度となった。確かに科目選択など複雑化した時期もあったが、改良を繰り返してより精度の高いテストに成長したという印象を持っていた。それが突然、「知識偏重である」という批判を受けて、今回の改革につながるわけだが、かなり拙速な印象を受ける。確かに2年かけて試行調査は行われた。しかし、国語の記述試験や英語外部試験活用の是非についての議論も検証も十分とは言えない。特に英語外部試験では数多くの民間資格試験が採用されているものの、受験できる外部試験が限定される地方の高校とその他の高校との地域的格差についての議論も準備も進んでいない。

2014年の高大接続答申では、「我が国が成熟社会を迎え……現状の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は知識の暗記・再生に偏りがちで……主体性を持って多様な人々と協働する態度など、真の「学力」が十分に育成・評価されていない」とされ、そのために新テスト「大学入学共通テスト」を実施すべきだとしている。生徒達の「主体性」とか「多様な人々と協働」する力も「大学入学者

選抜」の基準として評価することになっているが、それらは本当に優劣がつくものなのかという疑問は消えない。

3. 地方の高校の現状と取り組み

現状報告 1, 2 の中で、鹿児島県立大島高等学校での取り組みを発表された渡辺先生と山形県立米沢興譲館高等学校の廣瀬先生の発表を伺いながら、地方の公立高校という共通点はあれ、それぞれの地域事情や学校事情に合わせた取り組みや対策を講じていることを知った。

大島高校での大高マナビゲーションや大高未来塾という地域と結びついた取り組みは、生徒のキャリア教育だけでなく、地域のセンタースクールとしての期待にも応えるものではないかと思う。本校でも震災以降の地域課題を解決するため、高校生の活躍に対する地域からの期待は大きいと常を感じており、大島高校の取り組みに共感を覚えた。一方で、紹介されていた e-Portfolio 活用については、本校との地域的な差（東日本と西日本の差）を感じた。将来は、調査書のデジタル化が進むのかもしれない。しかし、e-Portfolio は、生徒の実績をまとめる手段なのか、それとも形成的評価を行うための手段なのか、活用の方向性をはっきりさせることも必要と考える。ポートフォリオは分量や内容そのものが重要だとは思えない。大切なのは、その活動から生徒が何を学び、考え、そしてどのような行動を起こそうとしているのか、である。自分の考えを自分の言葉でまとめる中で、生徒自身が学びの軌跡を振り返り、考えを深めていくのだと思う。

興譲館高校探究科のカリキュラムデザインの中に、本校が目指す探究活動にもつながる部分があると思いながらお話を伺った。年 3 回実施しているという教員研修や、これまで出口指導で行ってきたことを低学年次から体験的、意図的に育成するための教科横断

的な指導体制など細かい計画を立てていると感じた。昨年度、本校でも教員向けの研修会を開催し、今年度より担当者が中心となって本格的に「探究活動」が始動している。廣瀬先生のお話を伺いながら、「探究」活動はその時間の中に閉じられるものであってはいけないのだという思いが強くなった。特に最近の生徒達の言語表現の“拙さ”を考えると、どのような教科においても、生徒達が主体的に「思考する時間」を作る工夫をすることで、より良い学習者として育てていくことにつながるのではないだろうか。

4. 高校現場が大学に求めること

宮本先生の発表は、まさに全国の高校教員の気持ちを代弁していただいていると強く感じた。改革の方向性が見えていても、具体的対策や準備を進められないことによる不安や焦りというお話があったが、改革の時期が迫ってきている今、「何が正解」なのかという解釈は、各大学や各高校に任せられてしまっているように思う。今回発表された地方の二つの高校も、東北大学の倉元先生や筑波大学の太谷先生のお話を伺っていても強く感じる部分である。英語外部試験の活用については、既に国公立大 79 校が方針を打ち出したという報道もあるが、CEFR の基準の妥当性は解決されているとも思えない。本来、ヨーロッパの外国語学習者の習得状況を示す際のガイドラインだった CEFR が最近の報道では「国際基準」と表記されていることも気になる。以前に文部科学省で行われた SSH の発表、研修会に参加した際、日本版 CEFR の作成を進めているというお話を伺ったように思うが、仮にそれが出来上がっても、活用にあたっては宮本先生がご指摘された「民間事業者に対応を任せている」という最大の問題点は今後どのように改善されるのかということも気がかりである。

5. 誰のための入試改革か

討議の中でも、それぞれの立場からの意見や質問があり、今回の入試改革にあたり多様な解釈がされ得るという印象を受けた。大谷先生や倉元先生のご発言を伺いながら、大学入試において大学側が高校での学習内容を踏まえ、なおかつ大学が求める学生を主体的に選抜する際に「ぶれない」姿勢を示していただければ、生徒も自らの学びたいことを踏まえて大学受験に臨むはずだと考えた。その「姿勢」は、大学によるアドミッションポリシーに明確に表れているはずであり、これまでも各大学の個別試験に、その大学の個性は表れていたのではないだろうか。高校でも、大学入試のための「対策」授業ばかりしているわけではない。高校での教育全体の中で、生徒達が学ぶことに「楽しさ」を感じたり、もっと深く学びたいと思ったり、学んだことを社会に活かしたいと考えた先に「大学で学ぶ」という選択肢が出てきたはずである。

「大学入試が変わる」というニュースの中で、都内の塾が取材されていたことがある。

「思考力」、「記述試験」を意識した個別指導を取り入れているとのことだった。マンツーマンで講師がつき、生徒がホワイトボードの前で講師に向かって数学の証明問題の解答を一生懸命説明していた。「知識偏重にならないように」入試制度が変わるというが、それでも学校外で「対策」的な指導を受けている。この入試改革は、教育現場でもっとしっかり「思考力・判断力・表現力」を身につけさせる学習指導の工夫を行ってほしいというメッセージを持っていたわけではなかったのか？ 場所を変えて「対策」が講じられるのであれば、本来の入試改革の目的は達せられないのではないか。お金をかければかけるほど「思考力・判断力・表現力」を付ける「訓練」を受けられるのであれば、経済的格差によって教育格差を生むことになるのではないか？ 恐らくこれまでの入試改革で

も、それを克服する対策や戦略が生まれてきたことで、改革を迫られたということもあったのかもしれない。しかし、今回の入試改革は、そのような必要性があったのか？ 受験生のためなのか？ それともその生徒達を指導してきた高校教育のためなのか？ まずは「改革ありき」で更に大きな変革をもたらすためのものなのだろうか？

6. 終わりに

2005年にREXプログラムという派遣事業で、アメリカ中西部の高校に Visiting Teacher として勤務したことがある。「No Child Left Behind」いう教育改革が始まって、2年ほど経った時期だったと記憶している。ある時、各教科で国際理解や言語活動についてどう取り組むか話し合うよう学校長から指示され、教科会議を行うことになった。日本語を教えていた私は、「外国語科」に所属していたので、中国語、ドイツ語、フランス語等の先生方と一緒に話し合いをした。

「我々の授業では、『国際理解』も『言語活動』も日常的に行っているから、特別なことはしなくても良い」という結論に至った。しかし、教科によっては、先生方がかなり困惑していた。私自身、当時の学校長の意図をよく理解していなかったのかもしれない。しかし最近になって、あの時アメリカで懸念されていた『言語活動』に関わる問題は、今の日本の学校現場で、まさに起こっているのではないかと思うことが多い。

昨年度、試行調査を受験した本校の生徒達にアンケートを行ったところ、国語の記述試験よりも数学の文章題が難しいとする回答が多く、読解力の低さに危機感を持った。確かに近年、教科として教えている英語の授業ばかりでなく、日常の様々な場面においても生徒達の言語能力が落ちていていると感じることがある。同じ指示を出しても以前の生徒ならば理解していた内容を理解するのに時間

がかかっている。想像力も表現力も拙くなっている。そして、それは思考力の低下にも繋がっているのではないかと思う。

今回のフォーラムで入試改革の在り方を改めて考え、大学、高校それぞれの立場のお話や取り組み等を伺いながら、様々な思いが頭の中を巡った。今回の入試改革の中で、「思考力・判断力・表現力」が大きく取りあげられているわけだが、大学教育を受けるために必要な能力としての「確かな学力」のうち、「知識・技能」をないがしろにして良いということではない。「思考力」にしる「表現力」にしる、基本となる「言語能力」がしっかりしていないと何も始まらないのではないだろうか。10年以上前のアメリカの高校で行われた『言語活動』をどう授業に取り入れるかというあの議論が、その後、教育現場の改革や生徒の変容に繋がったのかどうかをはっきりと知ることはできない。しかし、今、我々の目の前にいる生徒達には明らかに必要なことである。人間は「言葉」を用いて考えるのだと聞いたことがある。言語化がしっかりできることが、生徒の思考力育成に繋がるはずである。

高校現場を振り返って考える時、我々教員が、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」等をそれぞれ「別々の力」と捉えがちではないかと思うこともある。本年度から「探究活動」も始まっているが、「探究」の視点や教科横断的な視点もまだまだ現場では足りないかもしれない。更に、学校全体のあらゆる場面で、教員が意識的に『言語活動』を取り入れる工夫も求められているのかもしれないと改めて感じている。

講評 3：令和の教育に携わる者としての構えとは

宮城県宮城野高等学校
教諭 伊藤 雄治

1. はじめに

新しい入試制度に至る工程表が示され、教育現場ではその制度に向けての準備が進められている。私自身高校教育に関わる者としてアンテナを張ってきたつもりではあるが、施行まで2年を切った今となっても、詳細については不明瞭な部分も多く、不安は尽きない。そんな折、フォーラムへの参加のお話をいただいた。前回のフォーラムに参加した方から、「主体性」についてのやりとりが盛んに行われた、という旨の話を聞いており、興味をもっていた。さらに今回のテーマが「入試制度が変わる時」ということで、今回のフォーラムに参加することで、自身の今後の一歩に大いに参考にできるものがあるのでは、という期待をもち、参加させていただいた。

2. 基調講演1について

2003年にセンター試験を受験した世代としては、「共通一次」については、恥ずかしながら「過去にそういう入試制度があった」という程度の認識しかもっておらず、それでも今日に至るまで特段不自由を感じたことはなかった。しかしながら、今回の入試改革にかけての流れを時系列でお話いただいたことで、新入試において危惧されていることを、より高い解像度で把握することができた。

目的が当初のものからずれていくというのはよくある話であるが、共通一次についても本来的には高校間の評価の格差の補正措置であり、内申書の客観性を高めるためのものであり、二次で小論文や面接を通して専門性や適性をみるものであった。そうすることで、受験戦争の過度のヒートアップを防ぎ、総合的な判断を促すはずが、実際は二次の拡大解釈により、従前と変わらず熱はさらにヒートアップすることにつながった。また、多くの大学が入試を変えず、共通一次を本

来的なあり方で実施をした大学に負担が集中し、息切れが生じてしまった。改革においてははじめから改悪を意図することはない。しかしながら、拙速な準備期間しかなかったり、実態の把握が不十分であったりすると、本来の目的からはどんどんずれていき、結果短命に終わってしまう。新入試の進捗状況をみると、そのあたりの不安は増大する一方である。大谷氏がフォーラムの結びでおっしゃった「高校大学間で対話し、真の高大接続を」という言葉を胸にとどめつつ、共通一次の反省を踏まえ、新入試への準備を進めていきたい。

3. 基調講演2について

受験生保護を第一に考える姿勢と、大学人としての矜持に感銘を受けた。私にとって「当たり前」の制度であった大学入試センター試験を、弾力的かつ秀逸な対応による長寿化と、その一方で生じてきた制度疲労による破綻というフレームで捉え直すことができた。その中で倉元氏がおっしゃった失敗につながる3つの要因「構造的問題に関する無理解」「準備期間の短さ」「史上初の試みへの認識の甘さ」は今回の入試改革にもそのままに当てはめることができよう。知識量のみを問う従来型の学力から思考力・判断力・表現力をもち、主体性をもって多様な人々と協働していく真の学力への転換という新入試の理念には大いに共感する一方で、その実施方法に不明瞭な部分が残ることにより生じる後手の指導、そこから発生する受験生への不利益……。早期に詳細が明確化するに越したことはないが、それが拙速で見落としの多いものであれば本来の目的の達成は遠いものとなる。とにかく現場としては今までの取り組みを軸にしつつ、変化に適応していく構えをとっていくしかないだろう。今回の入試改革が、受験生保護の大原則に則った、安

心・安全な改革になることを願う。

4. 現状報告 1 について

似通った境遇の高校を経験した者としては深く共感することが多かった。地方公立高校はその地域の期待を一身に背負う傾向がある。選択肢がなければその傾向はより顕著だ。大島高校とまではいかないが、私の前任校である宮城県気仙沼高等学校も立地的な問題や統合もあり、幅広い求めに応じつつ、かつ深い対応をする必要があった。スクラップアンドビルドが提唱されて久しいが、一度始めた取組をやめるというのはなかなか難しい。AOや推薦が拡充し、試験が早期化すれば就職希望者とも時期がかぶっていき、煩雑を極める。そのようなリスクな状況の中、渡辺先生の話からは各種改革に対して前向きに自分ごととして捉え、生徒のために情報を収集し、真摯に対応していく強い責任感を感じとることができた。ポートフォリオについては、『入試の1システム』ととるか『学びの機能』ととるかという観点からの紙媒体と e-Portfolio の併用という決断は、大いに参考にさせていただきたい。渡辺先生が結びにおっしゃっていた「自分も動けば動いているものも止まって見える」を心に掲げ、かつ定期的にその取り組みの目的を確認した上で、振り回されないように軸をもち、やみくもに不安を煽らないような進路指導に尽力したい。

5. 現状報告 2 について

煩雑な中であっての一つの活路と、活動の持続性のヒントに富んだ報告であり、感銘を受けた。米沢興譲館高校はSSH事業の運営、さらに新入試への対応ということで教員の負担は察するに余りがある。そのような状況下で中米沢興譲館高校は「進路指導とSSHは別物なのか」という問いのもと、ゼロベースではなく、今までの蓄積をベースにしながら、カリキュラムデザインという手法で負担軽減と学びの深化に取り組んでいるところが素晴らしい。以前、宮城県仙台第三高等学校の公開授業において、教科間の相互関連

を意識した深みのある授業を拝見させていただき、前任校である宮城県気仙沼高校においてもコンピテンシーベースのシラバスをもとにクラスカリキュラムのデザインが検討されていた。どれかをあきらめるというネガティブな発想ではなく、多くをカバーしつつ、負担感軽減をしていく取組は多くの示唆に富んでいた。

また、廣瀬氏の「ポートフォリオは形成的評価であり、自身の学びのメタ認知をさせるものという目的に立ち返り、活動実績の羅列では意味がないという」理念について共感する一方で、世の中の変化が激しく、活動実績について、何をどう取り出し、使うことになるかわからない状況下で、どういう基準で活動をふるいにかけ、綴じていけばいいのだろうかという漠然とした困り感が生じた。

新入試についてはまだまだ不明瞭な部分も多く、現場としても不安は払拭できない。そんな中、廣瀬氏の「発信された情報をしっかりと伝えていく」という姿勢は生徒をよりよい方向に導いていこうという教員の矜持を強く感じた。

6. 現状報告 3 について

普段高校現場で教育を実践しているものとして、新入試に対して抱えている漠然とした不安が、一気に具現化されたような、明快なお話であった。作問については肯定的評価が多いという点については私も同意見だが、自己採点の基準については不安が残る。発問の条件付けで、ある程度解答は方向付けされ、採点基準もしっかり用意されるとはいっても、最終的には教員の負担増が予想され、出願指導時の多忙感はいっそう高まるのではないだろうか。また、試験は公平性が担保されなければならない。その点で言えば宮本氏がおっしゃるように英語民間資格・検定の活用には疑問が残る。英語科の教員からは CEFR の基準の妥当性が疑問との声も聞く。特定の検定が上位の CEFR が獲得しやすいとなれば、その検定の実施が難しい地域の学校などはそれだけで不利にならないだろうか。また、3 年の特定期間の2回のスコアしか見られないとは

いえ、それまでに数を経験した方が有利という意味では経済格差の問題も絡んでくるだろうし、帰国子女の扱いなどの問題もあるだろう。それ以外にも新入試においては調査書等改善の取組など不明瞭なところを学校単位手探りでやっている学校教員の負担感は大きい。高校側の求め、大学側の求めそれぞれの求めの実態をしっかり把握した上での高大接続が必要であるという点には大いに共感するところである。新入試がそれぞれの求めに応じ、円滑な接続をもたらす制度になることを切に願う。

7. 討議

出席者の新入試にまつわる疑問に発表者が応答していくという形式で討議が進んでいった。中でもポートフォリオについての疑問が多かった。私自身ポートフォリオの活動実績については、入試においてどの程度ウェイトを占めるものであるか、学校としての支援のあり方について疑問を持っていたところであった。そういった疑問についての発表者の意見は「表向きの主体性などを表現するための活動に時間を割くのではなく、主体性は研究の土台たる学力で示すべき」といったものであった。言われてみれば確かにその通りであり、入試改革の一側面に踊らされ、軸を見失っていた自分に気がついた。全体として現状への憂いでは終わらない建設的やりとりの応酬であり、また、高校関係者・大学関係者双方が歩み寄りの必要性を説いていたのが印象的であった。今後互いの現状・実態を知る話し合いの場が設定されていくことを期待する。

8. おわりに

変化にはとかくネガティブなイメージがつきまとう。しかし、変化はより良いものにしていくために避けて通ることはできないものである。新入試についても然りで、理念と求める学力観についてはすばらしいものであるが、その対応による多忙感や不明瞭な箇所が存在による不安感から、自分の中でネガティブに捉えてきたことは否めない。

今回の発表者の方々に共通していたのは、新入試のポジティブな部分を積極的に捉え、今できる最善を尽くそうとする姿勢だ。今回のフォーラムに参加を機とし、入試動向に一層高くアンテナを張りながら、生徒のよりよい進路達成のために尽力していきたい。

講評 4：大学入試改革に思うこと

秋田県立横手清陵学院高等学校
教諭 照井 晴美

今回、フォーラムに招待いただいたが、実際に学校現場で直面している課題についてタイムリーに情報を得ることができ、大学、高校双方の立場からの意見や見方を知ることができる機会だと思い、積極的に参加させていただいた。現在の高校2年生から、大学入試センター試験に代わる大学入試共通テストが導入されるが、現時点でもその詳細は不透明な部分が大きい。基調講演では、過去の共通1次試験、センター試験の導入などについて入試改革の背景を知ることが現在の入試改革がなぜ起こっているのかを理解し、そして、どのような方向に進もうとしているのかを知る手がかりになるのではないかと考えて拝聴した。また、現在、日々の業務を行いながら、1年後、2年後に直面する新入試制度への準備を進めていくことには大きな不安もあったため、3名の高校の先生による現状報告も参考にしたいと考えていた。このフォーラムで得たことを整理し、自身の取り組みを振り返り、講評としたい。

1. 基調講演1について

筑波大学教授大谷奨氏の講演を拝聴し、かつて行われていた共通1次試験の導入とその問題点について知る機会を得ることができた。現在行われている大学入試センター試験が廃止されるにあたって、センター試験以前の動向を知ることが、私にとって大変有益なことであった。この講演でのポイントは次のようだったと振り返る。

戦後、各大学が独自に大学入試を行っており、1回の学力検査で合否が決まる、また、いわゆる難問・奇問の出題も少なくなかったことから、高校教育への影響も憂慮されていた。中教審第26特別委員会「高等教育の改革

に関する基本構想試案（中間報告）」に「今後は、中等教育の段階で、その本来の目的に応じた勉学に専念した者の学習成果が公正に評価され、選抜に合格することだけを目的とした特別な学習をしないでも、能力・適性に応じた高等教育機関に入学できるようにすることを目標として、大学入学者選抜制度の改善をはかる必要がある。」とあるように、1発勝負でふるい落とす選抜から、総合的に選抜していく方向に変わること、そのため調査書における高校の格差是正をはかる共通テストが必要であり、大学独自の二次テストとあわせて多角的に選抜していくという方向に変えようとするものであった。1979年から実施された共通第一次学力試験では、難問・奇問を排した良質な出題で基礎的な到達度を判定するとともに、各大学の二次試験では教科数を削減し、学力検査以外の面接、小論文の試験が実施され、推薦入学も導入されるなど、選抜方法の多様化が図られたことは、この改革の成果と言えよう。しかし、共通第一次試験が、一律に5教科利用を原則としたことにより、大学の序列化やいわゆる輪切りによる進路指導の問題が顕在化したこと、受験生にとっては一次、二次という過重な負担となったことなどの批判があった。

このように問題や批判があったとしても、この時代に共通テストが導入されたことは大きな意味のあることだったと感じた。大学入試が難問・奇問を出題し受験競争が過熱することから受験生と高校教育を守り、わが国全体の健全な教育の発展に寄与しようと方向性を定めたことは、現代にも通じる高校教育と大学入試の基本的な考え方になっているのだと思う。このような背景を知って改めて考えると、現在の大学入試改革の動きは、新しい

時代の流れにより生じた新しい時代の教育改革ということだけではなく、過去の入試改革で改善しきれなかった遺産を受けついでいるものなのかという感想を抱いた。

そして、この共通1次導入時代の入試改革に関する議論は、国民各層の理解を求め、受験生保護の立場に立った国民的議論だったという。講演者の大谷氏も、この国民的議論であったことを強調しておられたように感じた。

2. 基調講演2について

東北大学教授倉元直樹氏の講演では、現在までおよそ30年続いたセンター試験について、それが果たした成果と課題とは何か、今、高校教育では何が必要かを考える機会となった。

昭和60年臨教審の第一次答申において、偏差値偏重による受験競争の弊害が指摘され、人間を多面的に評価し個性的な入学者選抜を行うべきとして、国公立を通じて各大学が自由に利用できる新しいテストの創設が提言された。そして、平成2年度入学者選抜から、共通第一次学力試験に代わって、大学入試センター試験が実施された。センター試験は、国公立の各大学が科目数を自由に定め活用できることで特色ある選抜が行われ、いわゆる輪切り、序列化を助長しないことが期待された。センター試験を利用する私立大学は年々増加し、センター試験は30年続く入試制度となった。

このようにセンター試験までの背景を知ると私自身の率直な感想として、大学入試制度のあり方について、偏差値偏重の受験競争を避け受験生保護の立場に立った入試制度を目指したとしても、受験は競争という側面を拭うことはできず、大学側が教育理念にふさわしい学生を獲得しようとし、受験生は志望大学に合格したいと必死になる、その双方の願いがあるからこそ、大学入試に対する過熱はさけられず、その改革は難しい議論である、

雲を掴むようなものではないかという感想を抱いた。

平成24年度センター試験での地理歴史・公民と理科で2科目自由選択となり、試験監督ミスが頻発したことや「倫理・政経」という複合4単位科目の誕生など受験パターンの複雑化、問題冊子や試験室などの物理的問題、高校側の教員確保や対応の困難さなどといった現実問題が露呈してきたことなど、センター試験の複雑化は限界だったということも改めて痛感した。新しい入試改革についてこれまで分からないことが多く、戸惑いが大きいと感じていたが、改革そのものは必然だったと受け入れることができたと感じた。この講演を聞き、大学入試が競争という側面を持つことは避けられないが、その受験競争を公平に評価するためには受験生保護の大原則が根本にあったはずであり、今回の入試改革において、その準備が十分にできないまま公平性を保てないまま見切り発車することはあってはならないと感じた。

3. 現状報告より

現状報告として、鹿児島県立大島高等学校、山形県立米沢興譲館高等学校の2校の具体的な取り組みと、東京都八王子東高等学校長の宮本久也氏から高校全体が抱える問題について報告された。

大島高校は鹿児島県の離島でありながら、全国の国公立大学へ毎年30名から50名の合格者を輩出するという一方で、その数よりも日本各地を進路先として見据えて、その進路志望をかなえる指導をしているということにまず感心した。私がこれまで勤務してきた秋田県内の高校では、どちらかというと地元志向の生徒が多く、県外であっても東日本にとどまっていた。大島高校では、学校全体に活力があり、生徒と地域のニーズに応える学校教育が実践されているという印象を強く受けた。また、大学入試改革のみならず教育に関する情報収集、大学出張講義や先輩の活用

など学校全体での取り組みや研修ができていると感じた。

また米沢興譲館高校では、SSH指定校としての実践をキャリア教育に位置づけ、全生徒、全職員での取り組みに拡大しているということであった。特にSSHの活動が進路指導としても機能している印象を受け、本校もSSH指定を経験した高校として全生徒に探究活動に取り組ませている中で、その取り組み方は参考になると感じた。また、ポートフォリオについては、教師が使い指導に活かすことに意味があるということに共感した。しかし、生徒にどのように書かせ、教員間でどのように共有していくかという実際の場面では、各高校で大きな差があると感じ、私自身さらに理解を深めていきたい点であった。新しい大学入試については、教科の学習に学校行事や部活動での経験、すべての進路行事などを取り込んで、これまで教員がやってきた基本的な指導をさらに太いパイプとして進学に結びつけるという意識を感じることができた。まずは日頃の指導で生徒たちに学びの意義や楽しさを、自信をもって教えたいと感じた。その先に大学入試があるのであって、今後やるべきこととして、問題分析や受験指導に対するビジョンの共有を進めていくべきだと感じた。

東京都立八王子東高校校長宮本氏の報告から、大学入試改革に対して高校側が抱えている不安や疑問の原因を整理していただいたように思う。共通テストに関して試行調査でその方向性は見えてきたが作問上の課題として残っていること、理数系の科目の難易度が高かったこと、記述式の難易度、自己採点の方法に課題があることなどが挙げられる。これらに関して高校側としては、試行調査の情報を得ながら、問題分析をして新しい問題に対応できる思考力、表現力の育成を目指しながらも、それだけに左右されることのない柔軟な指導をしていきたいと感じた。また、英語民間資格の活用と調査書に関する改善につい

ては、その十分な環境整備がなされていないということであり、この点に関しては高校側からは高校の実態として声をあげ、大学側からは大学が求める入学者選抜の方針として、受験生保護を最優先に考えた方針が出され、公平性の保たれた基準が示されてほしいと切に願う。

4. 討議とまとめ

このフォーラムにおいて、会場に集まった高校関係者から寄せられる質問とそれに対してどのような討議が行われるかを楽しみに参加させていただいた。その中で、私自身の疑問でもあり注目していたのはポートフォリオに関してであった。ポートフォリオに関しては、高校の日々の活動の中で生徒の成長を記録し、それを生徒にフィードバックする手段として活用されるべきであって、それが生徒自身の経験の積み重ね、次の学びや活動に対する動機付け、そして表現力の育成と進路決定につながるツールになるべきだと自分自身の考えをまとめることができた。質問として挙げられた「勉強はできるが目立たない、いわゆる“真面目な生徒”は不利になるのか」という疑問に対して、大学側からは「多くの国立大学はそういうことは考えないだろう」という回答があった。また、「高校生活で、主体性をアピールするために時間を使ってくることを大学は嫌うだろう」という意見ももっともであると感じた。「これまでもAO入試では一般入試と違う評価で門戸を開いてきた。大学に入ってやることは研究であるが、高校ではそのための学力をしっかりと身につけてほしいというのが大学の思い」であり、新入試で重視されるという学力については、「従来からも思考力・判断力・表現力を問う問題は個別入試で作ってきた。トータルな入試の設計を大切に、多くの受験生に振り向いてもらえるように改善を繰り返してきたつもり」という東北大学の入試に対する誠意も感じられた。高校教育の根本はこれまでと変わ

らない。これまで以上に、教科を学ぶ意義を伝え、学ぶことに対する意欲を高められる授業づくりをしていきたいと感じることができた。

さらに、この討議を通して、フォーラムの主催者である東北大学関係者や基調講演として講演いただいた筑波大学の太田教授から、大学入試改革や高大連携に対する思いを深く知ることができた。太田氏は「大学側も高校教育を知るべきである、小中高と生徒が学んできたことを大学が引き継いでいくというつながりが必要」とおっしゃっていた。また、このフォーラムも東北大学が高校と大学の相互理解と連携を大切に考え、教育と一緒に考えていく場所として企画されていることに有難く思い、今後もこのような高大連携の機会を大切にしたいと思った。

確かな情報が不足している中で、高校間での取り組みに温度差はあり、入試が変わるから授業を変えるとか、入試に必要なだからこういう指導をしなければならないと考えてしまうこともある。しかし、このフォーラムに参加して、子どもを取り巻く環境が変わっている、子どもが変わっているから教育は変わらなければならない。子どもたちをどう育てていくか、高校で子どもたちをどう育て、どのような生徒を大学に送り出すかを考える時期であるということを忘れてはいけないと感じた。私自身、生徒の指導をする中で子どもの質が変わってきたと感じてきていたはずだったが、入試となると、これまでの指導方法や効果のあった経験が優先されがちで、それができないことに不安を覚えることもあったように思う。今一度、教育とは何か、これからの学校教育に何が必要かを考え、入試改革を前向きにとらえたいと思う。

講評 5：何故いま入試制度改革なのか

山形県立酒田西高等学校
教諭 寺崎 英之

1. はじめに

新テスト元年の受験生が高校2年生となり、いよいよ待った無しの状況となってきた。努力義務とされる2年前予告の刻限も過ぎ、入試制度改革の全容を見通しつつ個に応じた進路指導を・・・と言いたいところではあるが、まだまだ全てがクリアになっているとは言いがたい。今回、このフォーラムへは、改めて入試制度改革全体を見渡し、他の高校の取り組みや大学サイドの変容を確認し、自らの進むべき方向を見つめ直す大きなチャンスになると考え参加させて頂いた。

事前の参加者打ち合わせにおいて、「何故いま入試制度改革なのか」というテーマが投げかけられた。またお二人の先生の基調講演では「誰のための入試制度改革なのか」を改めて問われたように感じた。現状報告の中でも話題にされていたが、目に見える大きな変容、例えば新テストへの記述式の導入や英語の民間試験活用、ポートフォリオの導入といった1つ1つの制度改革の内容への対応を考える時に、「何故いまなのか」「誰のためののか」という前提を踏まえてしっかり議論していく必要がある。しかしながら、平成26年の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革についての中教審答申からはや5年、最初の理念が少しずつ遠ざかってはいないだろうか。現場にいる我々ともっと大きな流れと乖離してはいないだろうか。立ち止まり、見つめ直す良い機会を与えて頂いたことに感謝をしつつ、感じたことを述べさせていただきたい。

2. 基調講演1について

今とは違い4年生大学への進学率が

30%にも満たなかった、一部の学生のための大学入試だった共通一次黎明期。それでも大学入試制度への議論が国会で激しく行われ、高校からの声で試験日程が変更されるなど、国全体で大きなムーブメントが起こった。その時代に比べて、進学率も倍増しより大学入試が一般化した現代において、入試改革の議論も同様に一般化しているかと言うと、決してそうとは肯定し難い現状があるように感じる。大谷氏の講演の中で改めて歴史的背景に触れ、現代の入試制度改革がいかに歪なものであるかを考えずにいられない。驚いたのは“受験生評価のために多様な能力を測る物差し”を求める根本的な動機は同じ、と言う点である。

大学側の思惑、世論、受験生側の声に翻弄され、所々最初の理念が形骸化し抜け落ちながらも、時間的制約がある中で大勢の受験生を画一的な一定の方法で評価し、それでも多様な能力を測る、と言う矛盾を解消するための手段として、共通一次やセンター試験はある程度の役割を果たしてきたのだと思う。では何故、いま、誰のために入試制度改革なのか。まだまだ未成熟な議論の上で物事が進行している感はやはり否めないが、歩きながら考え続けていかなければならないのだろう。

3. 基調講演2について

“受験生保護の大原則”を、どう捉えていくのか。これが「誰のための」入試制度改革なのかを語る上で重要なことなのだと感じた。知識偏重型の教育への批判を大学入試に負わせ、唐突に湧き上がったセンター試験廃止の流れは受験生保護の観点から逸脱していない、とは決して言えない。

倉元氏の講演の中で、確かにセンター試験の制度疲労、学習指導要領改訂への対応や私大入試の多様化への対応による複雑化によって実施側、受験側の負担が増加していった流れを丁寧にご説明頂いた。そして、その経緯と現在の入試制度改革の内容が乖離していることも。外部試験の導入やポートフォリオの導入など、公平性や受験機会の均等性の観点からも受験生保護の大原則からの逸脱は明らかであり、実施前の現在から、受験生のみならず実施主体である大学側にも多大な負担を強いている現状がある。それでもここまで改革が不透明ながら推し進められてきた背景を、倉元氏は“入試の外からの補助線”という言葉で理解可能かもしれない、と述べられた。恐らくそこにも沢山の興味深い話があるだろうと思われ関心は尽きないのだが、残念ながら受験生保護の大原則を満足させる線は繋がるまい。「誰のための」入試制度改革なのかを「受験生のため」（或いは「大学のため」）と我々が声高に話せるようにするためには、我々が新たな補助線を引く努力をしなければならない。

4. 現状報告 1 について

2つの大きな指針を頂いた講演であった。1つは確実に自己分析を行った上で戦略的にツールを活用するということ、もう1つはツールの本質を見失わず、手段を目的にしないこと。どちらも当たり前のことであるが、渡辺氏のお話の中で、ものすごく丁寧に実践していることが感じられた。

1点目に関しては JAPAN e-Portfolio 活用のお話の中で感じたことである。会場で様々な地域の先生方と情報交換させていただく中で、e-Portfolio の導入については慎重な対応をしている学校が多いように感じた。東北地方の大学でまだまだ導入大学が少ないことも理由の一つであると思われるが、まだまだ先行きが鮮明に見えない中で様子

を見ている、という意見も聞かれた。一方で渡辺氏は自校の受験動向の分析から早々と導入に踏み切られた。恐らく導入にあたり、相応の説得材料を用意し入念な議論の後に決断されたことは想像に難くない。

2点目はやはり e-Portfolio について、入試のシステムとしてではなく、学びの蓄積という基本的理念を外さないように活用しているというお話や、入試問題は過去問演習ツールではなく思考力を養うためのツールとして捉えているというお話など、細やかな拘りと熱意がそここに感じられた。入試形態が多様化していく中で、効率と効果の追求に走りがちである。まして、地方の小さな公立高であればどこにいても人員不足は避けられない。しかしむしろそういう状況だからこそ、本質を逃さない指導が不可欠なのだろう。

5. 現状報告 2 について

学びの本質は変わらない、という米沢興譲館高校の伝統と実績に裏打ちされた揺ぎない信念を感じさせて頂いた。それは決して過去にあぐらをかく、という意味ではなく、これまでの取り組みと入試制度改革とを比較検証した上で、本質的な指導に間違いはないとの確信という意味での信念であった。大きな柱を確認し、その後英語外部試験へ向けた4技能指導のあり方の検討やポートフォリオの活用といった入試制度改革の細部への対応を行なっている。生徒たちにとっても、一番安心できる学校の姿ではないだろうか。

講演を伺い、やはり起点になるのは生徒の意欲喚起なのだと再確認させられた。様々なキャリア教育を受験意識涵養の手段にするボトムアップではなく、キャリア教育や教科の学習から更に次の学びを引き出すらせん構造を構築する、という理念はものすごくわかり易く、正に今求められる思考力、判断力、表現力、主体性といった力を身につけるために必要な考え方であろう。受験の手段として

の学びでなく、学びそのものが目的化することで、生徒の意欲は大きく変化する。一方で学びを目的化することが大変な生徒たちも、入試制度改革があろうがなかろうが変わらず存在する。手段か目的かに関わらず学ぶことを肯定できない生徒たちの意識喚起は今後も課題であるし、今まで以上に差が広がることを危惧してしまう。“生徒たちの好き・やってみたいの発掘”を教員がどのように手助けしていくか、入試制度改革に関わらず不変のテーマはやはり不変なのかもしれない。

6. 現状報告3について

大学入試改革に関する現状を、非常に的確にわかりやすくまとめて頂いた。冒頭、“改革の方向性に対する理解は深まりつつあるが準備は進んでいるとは言えない”という言葉が正に正鵠を射ている。そしてまだまだ準備を進める材料が足りない状況が変わらないでいる。このまま、誰も具体的ビジョンが見えないまま入試に突入し、混乱のまま2年、3年と経過し何となくやり方が見えてくる・・・という恐ろしい見通しもあながち冗談ではないのかもしれないと思ってしまう。

ただ、改革の方向性に対する理解、言い換えれば生徒に身につけてほしい力というのが提示されている以上、高校でしなければいけないこと、出来ることはある。手探りで、は変わらないが、我々はすべきことをしなければならない。

一方で、講演の中でこれだけ具体的に問題点が列挙されたにも関わらず、これらの問題点に対し我々現場の教員に出来ることは限られ、宮本氏のように発言できる立場の方が発信し続けて下さっていても、遅遅として状況が変わらないことへの不安は相変わらず解消されない。憂いなく新しい入試に迎える日が1日も早く来ることを祈るばかりである。

7. 終わりに―「何故いま」「誰のための」入試制度改革なのか―

討議でも、英語外部試験やポートフォリオの活用など、具体的な指導に関することや、大学の評価の方法に関する質問が多く寄せられていた。やはり、参加されていた先生方は情報が欲しいのだ。それも生の、そのまま明日の指導の指針となるような情報が欲しいのだと感じた。講演の中でも情報収集の重要性、それも情報誌や業者を通した二次情報ではなく、一次情報に触れることが大切であるという話題もあった。当事者同士の生の声が本当に貴重な情報である。それに触れるいい機会を得たフォーラムであった。

一方で、何故いま、誰のための入試制度改革なのか。

もはやそういった議論をするタイミングはすでに過去のものとなってしまった、もしくは議論をする余地があまりなくなってしまった・・・少なくとも、どうやら最初の理念と今の動きが決してシンクロしていない、大学入試の主体の尊重も受験生保護の大原則も置いてきぼりになっているということが浮き彫りになってしまった気がする。しかし、本来あるべき姿に近づけるべく努力することはできるということが現状報告の中で示されていた。入試を目的ではなく、生徒が多様な力を会得し、学ぶ機会に触れ、人生を切り開いていくための手段とするために、入試制度改革と向き合っていきたいと感じた。

講評 6：入試制度改革の理念を踏まえた受験指導とは

福島県立須賀川桐陽高等学校

教諭 佐藤 章

1. はじめに

現在の高校2年生から始まる大学入試制度の改革に向けて、それぞれの高校の現場では情報を収集しながら実施に向けて動き始めている。だが、大学入学共通テストにおける記述型問題の採点基準（自己採点方法）や英語の民間検定試験の概要など、入学試験の詳細についてはまだ不透明な部分が多い。また、調査書の様式が変わり記載量の制限が撤廃され、それに合わせて主体性の評価に向けたポートフォリオによる活動記録の蓄積が今まで以上に重要になるなど、早急に対応を迫られる事項も多い。

今回の「入試制度が変わるとき」というテーマは、入試改革に向けて高校の現場が抱えている喫緊の課題への対応について大きな示唆を与えてくれるとともに、受験生を受け入れる側である大学の考え方や、入試制度改革の意義を理解した上で高校側が準備すべきことを把握するために大いに参考になると思い、このフォーラムに参加させて頂いた。

2. 基調講演1について

「入試制度の変革」という観点で、共通一次試験の導入時および実施における理念や問題点について振り返る講演であった。共通一次試験の導入の目的は、「高校間の調査書の評価水準格差を是正するための方策」だったが、いつしか調査書に関する議論はなくなり「個々の大学の学力テストに先立つ一次試験」といった、本来の目的からは大きく乖離した運用に変わっていったとのことだった。このことから、入試制度改革の目的を正しく理解し、その目的と異なる運用がされていないか動向を注視すること、そして高校の現場

でできることは何かを常に検討し、実践し続けることの重要性を痛感した。

それでは、今回の入試制度改革の目的とは何であろうか。それは、AO・推薦・一般のどの入試形態にも関わらず、「学力の3要素」（知識・技能、思考力・判断力・実践力、学びに向かう力・人間性）の観点から受験生を多面的、総合的に評価することにあると私は捉えている。つまり、高い目標を掲げ、主体的に学びに向かう姿勢を持つ受験生を大学側は求めており、そのような生徒を高校側は育てるべきであるというメッセージが込められているように感じるのである。

義務教育から大学教育まで、さらには生涯教育といった観点からも、学力の3要素は長い期間にわたり継続して育成されなければならない。高校教育に携わる我々としては、この目的を念頭に置き教育活動を実践することが必要である。英語の民間検定試験に向けた指導やポートフォリオによる活動記録の蓄積など、新入試制度に向けて進めるべき業務は数多くあるが、これらの業務が目的化してしまい教育本来の目的がぼやけてしまうことの無いように気をつけていくべきだと感じた。

3. 基調講演2について

基調講演1に続き、大学入試センター試験の導入・制度変遷・廃止までの一連の流れを振り返り、新入試制度に対する懸念について考察した講演であった。平成の時代とともに31回の長きにわたって実施されたセンター試験がなぜ長期間続いたのか、そしてなぜ今廃止されるに至ったのかを二つの視点から語られていた。

この中で、私は二つの視点のうち特に「受験生保護の大原則」の重要性について大いに共感した。大学入試の運営主体は大学側であることは間違いないが、実際に受験をする、つまり大学入試の主役は受験生である。各大学が入学試験の概要を明確にしない限り、主役である受験生は準備を進めることができず、その結果志望校の選択の幅が狭まることがあり得るのではないか。

大学入学選抜実施要項では、受験生に大きな影響を与える変更は2年程度前に予告・公表すると示されているが、今回の入試制度改革においては大学入学共通テストに関する英語の民間検定試験の各大学における取り扱いが不透明であり（フォーラム後の5/31に文部科学省から詳細が発表された）、また、英語の民間検定試験そのものについても受験生によっては地域格差・経済格差の影響が懸念されるなど、受験生の不利益につながりかねないと感じている。他にも、記述型問題の難易度や採点基準（自己採点可能かどうか）も含め流動的な部分が多く、現実的な受験指導という点では高校の現場は対応に苦慮している。受験生が安心して志望校を決定し、入学試験に向けての準備をスムーズに始めることが可能となる早期の制度設計を切に願うばかりである。

4. 現状報告1について

昨年度まで勤務されていた、鹿児島県立大島高等学校での実践例についての報告発表であった。鹿児島県と福島県は以前より県立高校間の人事交流が行われており、私の勤務校にも鹿児島県に派遣された経歴を持つ教員と、現在鹿児島県から派遣されている教員が勤務しているため、遠い鹿児島県での実践例ではあるものの親近感を感じながら話を伺うことができた。

離島に設置された高等学校という環境の中、公立の中堅校として国公立大学進学から

就職まで幅広い進路希望を実現するために様々な工夫を凝らしているとのことであった。地理的な条件により英語の民間検定試験に対する受験負担が大きいなど、入試制度改革に向けての課題が多い中で、JAPAN e-Portfolio の導入や、学力の3要素を育むための授業改善に向けた組織改革の実践といった、現状で行える準備を着々と進めており大いに刺激を受けた。特に、情報収集においては必ず一次情報を確認し、情報の裏付けを取るという意識に敬服した。高校の現場では、日々の業務に追われて公的機関が発表する情報を速やかに確認できないこともあり、民間企業の方から入試改革の概要を伺うことも少なくない。しかし、それを鵜呑みにせず、正確な情報を確認し、自校の生徒に対して本当に必要なことは何かを見極めた上で判断・対応することが重要であるとの考え方に、生徒や保護者に安心感を与え、学校・生徒・保護者が一丸となって納得できる進路実現を目指すという強い意志を感じた。

教育の本来の目的からは外れるかもしれないが、受験指導は情報戦であるという側面も否定できない。学力の3要素の育成という教育の目的を大切にしつつ、受験という面では情報のクロスチェックと適切な取捨選択を意識的に行い、生徒が安心感を持って受験に立ち向かえるような進路指導を進めなければならないと改めて考えさせられた。

5. 現状報告2について

今回の入試制度改革について、保護者・生徒・同僚教員の誰を対象として話すかで説明の内容を変えているとのことであった。それぞれの立場において必要とされる情報を過不足なく伝えることは、いかなる場面でも非常に重要な視点であると考えさせられた。

新入試制度に関しても現段階で不透明な部分が多々あることは事実である。だが、保護者には現在確定している情報と流動的な

情報とを明確にした上で、学校はあらゆる場面を想定して準備を進めていることを伝え、生徒には入試制度がどう変わろうとも身に付けるべき学力は変わらないこと、そして現在の学習活動を継続することが一番の近道であることを伝え、安心して受験の準備に向かわせることが大切である。そのためにも、我々教員側が情報に踊らされることなく、生徒に身に付けさせるべき学力について共通理解を持ちながら教育活動を展開することを心がけていきたい。

その一方で、教員側は生徒のどのような活動が受験において有利に働くのかを知るとは受験戦略として必要であるとの考えも、生徒の進路実現のために我々が意識しておかなければいけないことだと感じた。全体を通して、生徒に対する受験指導（学習指導・進路指導を含めて）について改めて考えさせられる報告であった。

6. 現状報告3について

全国高等学校長協会会長および大学入学共通テスト検討・準備グループ委員として今回の入試制度改革に携わった立場からの、高校の現状と大学側への提言に関する報告であった。入試制度改革について最も詳しい方の中の一人だけあって、今回の改革において評価できる点や懸念事項をわかりやすく簡潔にお伝え頂いたが、その中でも特に英語の民間検定試験の活用に関する内容が気になった。

高校の現場では英語の民間検定試験については早い段階から地域格差・経済格差による受験機会の不均衡や、実施時期・回数に関する懸念が出ていたが、宮本先生によるとこれらの課題は民間業者に対応を任せているとのことであった。本来、入試制度改革は国や大学・高等学校等の公的教育機関が主導すべきものである。民間企業に業務を委託する場合であっても、管理監督の責任は公的機関

が持たなければならないのではないかと。民間企業の営利活動よりも、大学入試制度に担保されるべき公共性・公平性の方が優先される制度設計をしておかなければ、結果的に受験生が不利益を被ることもあるだろう。

また、高等学校の実態を把握した上で大学には入試改革の方針を立ててほしいとの意見を述べられていたが、まさにその通りであると思う。その実現のために、高校側も情報が提供されるのを待つばかりではなく、大学側との積極的な交流を行い、情報共有を図ることが必要であろう。近年、高大連携の動きが加速されており、大学教授が高校に出向いて出張講義を行うだけでなく、高校生が大学を訪れて大学教授や大学生から講義や実験の指導を直接受けることも多くなっている。このような機会を活用し、積極的に高校側のメッセージを大学側に伝えることも大切だと痛感した。

7. おわりに

今回のフォーラムに参加したことで、先行きが不透明な入試制度改革の中で不安を抱えながらも各学校が工夫して教育活動を実践していることを再認識できた。基調講演にあった過去の大きな入試制度改革の過程を振り返ると、共通一次試験、センター試験ともに時代の変遷により顕在化する高等教育活動への課題に対して、明確な理念のもとに改革を進めていた（その理念が形骸化したかは別として）。

今回の改革における理念は、生徒が学習活動を通して知識・技能を習得するだけでなく、それらを活用して課題解決につなげるための思考力・判断力・表現力を育成し、さらには将来にわたり主体的に学びに向かう力を養成することにあると思う。Society 5.0 という新しい時代を生き抜く生徒たちにとって、これらの力が必要不可欠なことは言うまでもない。その理念を伝える具体的なメッセ

ージとして、大学入学共通テストでの記述型問題導入や英語4技能測定のための民間検定試験導入、そして調査書の記載量制限撤廃およびポートフォリオによる学びの履歴の蓄積重視といった方策を打ち出したのだと理解している。今回の入試制度改革は、次世代を担う生徒の育成という大きな目的達成に向けた我々の教育活動の成果を振り返るチャンスであると考えられないだろうか。教員側が入試に関する最新の情報を収集して受験指導にあたるのは当然だが、入試制度の変化に振り回されることなく、生徒の成長にとって必要な教育活動をぶれることなく実践していくことが大切なのだろう。あわせて、改革の目的から外れた制度利用が起こらないよう、受験生保護の観点から制度の変化を注視していくことも我々の責務であると感じた。

最後に、入試制度改革への対応にあたり大きな示唆を与えて頂いた発表者の5名の先生方と、主催者である東北大学のフォーラム関係者に深く感謝申し上げ、今回のフォーラムの内容を今後の教育活動に反映させていきたいと思う。

アンケート・参加者統計

アンケート集計結果

令和元年5月15日

第30回東北大学高等教育フォーラムアンケート (回収数 179, 回収率 52.6%)⁸

1. 御所属

(1) 高校 : 120 名 (67.4%) (2) 大学 : 42 名 (23.6%) (3) その他 : 16 名 (9.0%)

2. フォーラムのテーマは如何でしたか.

(1) よかった : 148 名 (83.6%) (2) どちらとも言えない : 27 名 (15.3%)
(3) 改善すべき : 2 名 (1.1%)

3. 基調講演者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 129 名 (72.5%) (2) どちらとも言えない : 42 名 (23.6%)
(3) 改善すべき : 7 名 (3.9%)

4. 現状報告者の発表は如何でしたか.

(1) よかった : 137 名 (77.8%) (2) どちらとも言えない : 29 名 (16.5%)
(3) 改善すべき : 10 名 (5.7%)

5. ディスカッションは如何でしたか.

(1) よかった : 141 名 (88.7%) (2) どちらとも言えない : 16 名 (10.1%)
(3) 改善すべき : 2 名 (1.3%)

6. 時間は如何でしたか.

(1) 短すぎた : 19 名 (10.9%) (2) ちょうど良い : 149 名 (85.6%)
(3) 長すぎた : 6 名 (3.5%)

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば, どのような形式, テーマを望まれますか.

(後述)

8. その他, 全般的な御意見, 御感想をお寄せください.

(後述)

ご協力ありがとうございました.

⁸ ダブルマーク, 無回答は個別の集計から除く.

アンケート自由記述

2. フォーラムのテーマは如何でしたか。⁹

- 問題が整理されていた（その他、よかった）。
- 本来は1年前のテーマになるべき（その他、どちらとも言えない）。
- 本当にさし迫った課題をとりあげている（高校、よかった）。
- 変化に対し心の準備がだいぶできてきた（高校、よかった）。
- 変わり目なので最も大きな関心事だから（高校、よかった）。
- 変えるとどうなるか？を過去の経験から教示してくれるようなテーマがいい（大学、どちらとも言えない）。
- 不安の具体的なポイントが明らかになった（高校、よかった）。
- 漠然としており、理解が難しい（高校、どちらとも言えない）。
- 入試制度を振り返ると同時に実際の現場の取り組みを聞くことができたから（高校、よかった）。
- 入試制度を時代の変化ととらえた面がテーマに表れている（高校、よかった）。
- 入試制度よりも入試制度が未来にどうつながるか（生徒にどうつながるか）聞いたかった（高校、どちらとも言えない）。
- 入試制度の変更と背景がよくわかった（高校、よかった）。
- 入試改革に取り組む上でこれまでの改革の理解と課題の把握につながった（大学、よかった）。
- 入試改革にとって参考になる内容だった（大学、よかった）。
- 入試の改革を再認識（その他、よかった）。
- 入試について基調講演での内容が勉強になった（高校、よかった）。
- 入試（高校、よかった）。
- 東北大学としての発信がもっとあってよい。皆それを期待してわざわざ来仙しています（高校、改善すべき）。
- 直面している課題について議論できた（高校、よかった）。
- 直前にせまり、マッチしていたと思います。ありがとうございます（大学、よかった）。
- 大学入試制度の歴史を理解できた（高校、よかった）。
- 大学入試の歴史とこれからについて学べました（その他、よかった）。
- 大学・高校双方の意見が聞けた（大学、よかった）。
- 先を見据えた指針だったため（高校、よかった）。
- 制度の羅列、言葉の羅列が多かった（大学、どちらとも言えない）。
- 新入試についての内容が聞けると思っていたが、ほとんどが共通1次、センター試験の話だった。歴史から学ぶこともあるが…（高校、よかった）。
- 新しい情報や、今後に向けての具体があった方がよかった（高校、どちらとも言えない）。

⁹ 末尾の括弧内は所属、選択された御意見。

- 情報を共有させてもらえてよかった（高校，よかった）。
- 手探り感の現状はよく表現していたが入試がどう変わるかという情報を求めている高校，大学が多い中ではやや抽象的な印象がある（大学，どちらとも言えない）。
- 次の時代がどうなるのかを考えられると思ったので（高校，よかった）。
- 時宜に合ったテーマ設定で，とても良かったです。参加させて戴き，曖昧な所もだいぶ整理できました（高校，よかった）。
- 時期に即していたので（高校，よかった）。
- 時期に合っている（高校，よかった）。
- 最近の事情に精通した先生方の発表と議論がとても勉強になりました（高校，よかった）。
- 今必要とされているテーマだから（高校，よかった）。
- 今年は唯一，それしかない感じ。当分は，その経過観察なのでしょうか（高校，よかった）。
- 今一番の関心事なので（高校，よかった）。
- 今，非常に関心のあるテーマだから（高校，よかった）。
- 今，注目度の高いテーマです（その他，よかった）。
- 今，最も優先順位が高いものでした（高校，よかった）。
- 今，考えなければならないテーマであった（高校，よかった）。
- 今，右往左往しているので。ただ，小規模の大学は，まず経営が先にたってしまう（大学，よかった）。
- 今，一番知りたいことであるから（高校，よかった）。
- 今，まさに高校現場の教員として知りたいことなので（高校，よかった）。
- 高大接続改革の最中，大学・高校双方の考えを聞く機会となった（高校，よかった）。
- 高大接続改革が進行するなかで適切なテーマであった（その他，よかった）。
- 高校側が今求めているものと，ズレがある（高校，どちらとも言えない）。
- 高校現場で一番不安としているテーマであったから（高校，よかった）。
- 高校の現状などが分かった（大学，よかった）。
- 高校・大学両方の現状を知ることができたので（高校，よかった）。
- 高校，大学双方の先生方の率直な意見を伺えた（大学，よかった）。
- 高2世代を中心に焦りが出ている状況に対し，有用な議論だと感じました（その他，よかった）。
- 講演とのマッチング素晴らしいです（高校，よかった）。
- 現状報告で各校の取り組みを知ることができたから（高校，よかった）。
- 現状は見えても出口が見えない（高校，どちらとも言えない）。
- 現状の課題認識を改める機会になりました（大学，よかった）。
- 現状に合っている（大学，よかった）。
- 現場で感じている不安・不満がある程度形になって焦点化できた（高校，よかった）。
- 現在，一番情報がほしい内容であり情報交換できた（高校，よかった）。

- 具体的に共通テストの変更点や方向性を示してほしかった(高校, どちらとも言えない).
- 具体的な話がもっとあると良い(高校, どちらとも言えない).
- 具体性が弱い(高校, どちらとも言えない).
- 教育関係者の関心が高いテーマ(大学, よかった).
- 教育関係者が今一番知りたいテーマだから(高校, よかった).
- 共通1次やセンターの歴史や変遷を知れたが現実に変化するのでこれからのことがより大切であると考えるから(高校, どちらとも言えない).
- 共通1次からの一連の流れがわかって, 謎が解けた. とてもタイムリーかつ, 深い内容(高校, よかった).
- 共通1次, センター試験まで戻ることによって今回の改革の異常さがうきぼりになりました(高校, よかった).
- 去年の段階で設定してもよかった(高校, どちらとも言えない).
- 喫緊の課題で良かったと思います(高校, よかった).
- 各大学, 各高校でもどこも混乱していると分かったこと(高校, よかった).
- 改革を根本的に変える上で, 必要な知識だと思います(大学, よかった).
- 改革への不安が大きい中, 漠然としていた不安が整理されたことでとても良かったです(高校, よかった).
- 改革の経緯がわかった(高校, よかった).
- 改革が行われているということを知れるテーマであった(高校, よかった).
- 過去の政策と今とのつながりが, かけ足すぎてわかりにくかった(大学, どちらとも言えない).
- 過去との比較(類似点, 相違点の洗い出し)が良かった(高校, よかった).
- 英語民間資格検定の活用を含め入試自体が動いているこの時期に合った適切なテーマだった(大学, よかった).
- 移行期の不安, 期待にマッチしていたこと(高校, よかった).
- まだ山積みの問題点(その他, よかった).
- まさに今直面している問題であり, なぜ制度改革が必要なのか, 高校としてどう対応していくべきなのか知りたかったから(高校, よかった).
- まさに今知りたいテーマだったため(高校, よかった).
- まさにタイムリーなテーマだと思います(その他, よかった).
- まさにタイムリーなテーマであると思います(大学, よかった).
- テーマ設定が大きすぎて, 基調講演と現状報告の歯車がかみあっていないように感じる(高校, どちらとも言えない).
- テーマ自体はよいと思います(高校, よかった).
- テーマとしてはタイミング遅し, となるのか(高校, 改善すべき).
- テーマが少し大きいかなと思いましたが. 仕方ないことです…(高校, どちらとも言えない).

- テーマがやや広がった。1つの分野にフォーカスしてもよかったのでは、特に共通テスト（高校、どちらとも言えない）。
- タイムリーなテーマで魅力的でした（高校、よかった）。
- タイムリーなテーマです（大学、よかった）。
- タイムリーなテーマだと思ったが、焦点を合わせるのは大変だったと思う（高校、よかった）。
- タイムリーなテーマだと思う（高校、よかった）。
- タイムリーなテーマだと思いました（大学、よかった）。
- タイムリーではないかと思います（大学、よかった）。
- タイムリーです（高校、よかった）。
- タイムリーでキャッチーです（高校、よかった）。
- タイムリーで、いますぐ考えなければいけないテーマなので（大学、よかった）。
- タイムリー（高校、よかった）。
- タイムリー、具体的で、論点を絞りやすい（高校、よかった）。
- このタイミングで必要な議論（大学、よかった）。
- このタイミングでこのテーマは最適だったと思います（高校、よかった）。
- 「今頃こんな？」という位、不透明な部分が大きい（高校、よかった）。

3. 基調講演者の発表は如何でしたか。

- 話が抽象的すぎる。具体的にどうしていくか、について聴きたかった（大学、改善すべき）。
- 歴史的背景と事実を確認できた（高校、よかった）。
- 歴史的背景、転換点が知れた（高校、よかった）。
- 歴史的な経過と問題点が、きちんと示され理解しやすかった。おもしろかった（大学、よかった）。
- 歴史的な経緯はおもしろいが、それに少し偏っていたのでは？（高校、どちらとも言えない）。
- 歴史的なことはわかって良かったが、これからの話がなかった（高校、どちらとも言えない）。
- 歴史を振り返ることも大切ですが、ここ10年またこれからのことをより詳しく知りたかったから（高校、どちらとも言えない）。
- 歴史をふまえた批評・批判、提言があった（その他、よかった）。
- 歴史をたどっていただいたことで、これまでの流れがよく理解できました（その他、よかった）。
- 歴史から現状まで変化した流れが見えた（その他、よかった）。
- 流れが総括的に理解できた（高校、よかった）。
- 流れが見え、整理することができた（高校、よかった）。

- 未来の話が聞きたかった（高校，改善すべき）。
- 毎年思いますが倉元さんの話を 1 時間以上しっかりとって，事例報告は 30 分ずつにした方が，せっかくの貴重な発表が，より充実するのではと思います（改善すべき）。
- 分かりやすくこれまでの課題をお示し下さった（高校，よかった）。
- 秒読みに入った入試制度の方向性が確認できた（高校，よかった）。
- 背景とともに問題点も浮きぼりに（高校，よかった）。
- 入試制度の概要が理解できた（大学，よかった）。
- 入試制度のドキュメント，ここまでわかりやすいプレゼンははじめてです（高校，よかった）。
- 入試改革への理解が深まった（大学，よかった）。
- 入試改革の流れと目的，その現実と結果をわかりやすく説明していただいた（高校，よかった）。
- 入試改革の背景や何が大切か理解できた（高校，よかった）。
- 入試改革の基本事項，大学・高校の入試に対する基本的な考え方が確認できた（高校，よかった）。
- 入試の歴史は良くわかった（高校，どちらとも言えない）。
- 入試の現代史の勉強になりました（その他，どちらとも言えない）。
- 入試が変わるときに過去の変化を知ることが大切だと考えるから（高校，よかった）。
- 日頃，意識してこなかった事柄を学ぶことができた（高校，よかった）。
- 特に倉元先生の話は参考になります（大学，よかった）。
- 知らないことを学べた。あらためて今回の改革は大丈夫なのか？と感じた（高校，よかった）。
- 大変勉強になったが，歴史・経緯に少し偏っていたか（高校，どちらとも言えない）。
- 大変納得のいく内容のお話が聞けたことや主要な問題提起をしていただけた点は良かったが，高校側に求めることもお聞きしたかったから（高校，どちらとも言えない）。
- 大谷先生の話はずっと聞きたかった（大学，よかった）。
- 大谷先生の話は今の混乱状況を重ね合わせて考えられました（大学，よかった）。
- 大谷先生の話は興味深く聞けました（高校，どちらとも言えない）。
- 大谷先生の精深ぶりには驚かされた。倉元先生の指摘も鋭さを増した（高校，よかった）。
- 大谷先生の鋭い指摘に，いろいろと考えさせられた。教員として知っておかなければならなかったことを（今さらながら）知れてよかった（高校，よかった）。
- 大谷先生のお話で，共通 1 次試験導入までの経緯と結果がきちんと整理でき，また，倉元先生の問題提起は大変興味深かったです（大学，よかった）。
- 大学側として，入試制度のこれからのに関する考えが知れたかった（高校，どちらとも言えない）。
- 大まかな大学入試の変容を把握できました（高校，よかった）。
- 倉元先生の分析と問題提起が数多くの示唆に富んでいて有意義でした（大学，よかった）。

- 倉元先生の疑問・懸念が解決されなかった（大学，よかった）。
- 倉元先生のセンター試験の歴史を踏まえた考察がとても参考になった（高校，よかった）。
- 前半は？後半は◎（高校，どちらとも言えない）。
- 専門外だったので，大変勉強になりました（大学，よかった）。
- 生徒保護の観点は大切ですが，最終的には，志願者は大きな問題だと思います．難しい（大学，よかった）。
- 整理されて，非常にわかりやすかった（高校，よかった）。
- 新入試についての内容が聞けると思っていたが，ほとんどが共通1次，センター試験の話だった．歴史から学ぶこともあるが…（高校，どちらとも言えない）。
- 新入試ありきではない視点もあったこと（高校，よかった）。
- 受験制度変更の理由は理解できたが，それをどういかにすかの観点がない（高校，どちらとも言えない）。
- 時系列でさかのぼって現在をとらえることができた（高校，よかった）。
- 事実を中心にていねいに説明頂いた（高校，よかった）。
- 今後何がどう変わっているのかを具体的に知りたかった（高校，どちらとも言えない）。
- 今後どうなり，どうあるべきかをもっと知りたかった（高校，改善すべき）。
- 今後，大学入試が少しでも良い方向で実施できるよう批判的に見て行くことは大切だと思う（高校，よかった）。
- 今後，学務で参考になるところがあった（高校，よかった）。
- 今回の改革のことだけでなく，歴史的な流れをお話いただくことで，より今回のことが深く考えられるようになりました（高校，よかった）。
- 今の入試史制度変更についてもっと知りたかった（高校，どちらとも言えない）。
- 高校の立場として，後半の報告は有意義にきけたが，前半の発表から受け取るものが少なかった（高校，どちらとも言えない）。
- 後半の高校側の話との関係が題意だけでは見出しにくかったので，その点があればなお良かった（大学，どちらとも言えない）。
- 現状の批判的分析よりも，今後の具体的対応を中心に（大学，どちらとも言えない）。
- 現在の改革の歴史的な背景や流れの理解ができた（高校，よかった）。
- 現在に至るまでの入試制度がよくよみとれる．逆にこの先もよみとれてしまうのでコワイ（高校，よかった）。
- 現在，問題となっている原因が知れた（大学，よかった）。
- 経過の話もよかったが，大学側の対応，考えをお聞きしたかった（その他，どちらとも言えない）。
- 具体的な背景（その他，よかった）。
- 共通1次前から現在に至るまでの歴史がよーくわかった（高校，よかった）。
- 共通1次もセンター試験も，どんな経緯で始まり，運用されてきたのか，知ることができたので（高校，よかった）。

- 共通1次とセンター試験の違いはあるが、比較内容的に重なるので、それぞれ別のテーマの方が良いのでは（高校、改善すべき）。
- 共通1次からセンターへの変遷について、知らないことばかりでした（大学、よかった）。
- 共通1次がなぜセンターに変わり、そして今、何が変わるのかがわかった（高校、よかった）。
- 共通1次がスタートしたときの混乱をおもいだした（高校、よかった）。
- 共通1次 → センター → 共通テストのスムーズでない流れがよく見えた（高校、よかった）。
- 共通1次～センター試験～共通テストの節目、流れがわかった（高校、よかった）。
- 共通1次、入試センターで起きたことが具体化できた（高校、よかった）。
- 共通1次、センター等の変遷が分かり（整理でき）よかった（高校、よかった）。
- 共通1次、センター試験共に、歴史的背景や実施にともなう現象などよくわかった。一方で新テストについてわからないことも多すぎて混乱したところがあった（高校、どちらとも言えない）。
- 共通1次、センター試験まで戻ることによって今回の改革の異常さがうきぼりになりました（高校、よかった）。
- 共通1次、センター試験への歴史の変遷、問題点、今後への不安が良く分かりました（高校、よかった）。
- 共通1次、センター試験の歴史を知ることができて興味深かった（高校、よかった）。
- 共通1次、センター試験の歴史を知ることができて、良かったです。具体的な結論（意見）を提示していただけるとありがたいです（大学、どちらとも言えない）。
- 共通1次、センター試験の歴史が、これからの入試とどうつながるのかが聞けなかった（高校、改善すべき）。
- 共通1次、センター試験の流れがつかめました。急な変更は受験生を困らせると思いました。本当にどうなるのかと不安です（高校、よかった）。
- 共通1次、センター試験と続く課程や問題など分かりやすく説明して頂き、論点の整理ができた（高校、よかった）。
- 共通1次、センター試験、大学入試共通テストの変わり目が理解できた（高校、よかった）。
- 共通テストまでの歴史的背景がわかって良かった（高校、よかった）。
- 基調講演Ⅱは、後半時間が足りなくなって少し端折ってしまったことが残念です。もう少しじっくり聞きたかった（高校、よかった）。
- 確かに重要なことだが、未来志向の話ではない（高校、どちらとも言えない）。
- 皆さんがこれからを見据えて話されていると思いました（その他、よかった）。
- 改革時にどのような流れがあったのかが、よく分かり、今の改革について理解が深まった。とても良かったです（高校、よかった）。
- 改革までの経緯・背景を知ることによって、改革内容についての見方が変わった。ポイントが

理解できたように思う（大学，よかった）。

- 改革の目的を見失わないようにしていきたい（高校，よかった）。
- 過去－現在の流れがより理解できた（その他，よかった）。
- 過去を振り返る視点は，今回のテーマにとっても合っていたと思います（その他，よかった）。
- 過去をふり返ることの大切さを感じました（高校，よかった）。
- 過去の歴史の推移をまとめて理解することができた。しかし，本質的な問題の解決がなされていないことも理解できた（高校，よかった）。
- 過去の入試改革を知ることによって，今の改革を見る視野が広がりました（大学，よかった）。
- 過去の検証で，新テストの具体性がみえない（高校，どちらとも言えない）。
- 過去の改革の様子から現状と似ていると感じました（高校，よかった）。
- 過去の改革での失敗例を知ることができた（その他，よかった）。
- 過去のふりかえりよりも次どうなるかを知りたかった（高校，どちらとも言えない）。
- 過去から現在を考える良い機会となった（高校，よかった）。
- よくわかる内容でした（高校，よかった）。
- もう少し，ふみこんでもらえれば（高校，よかった）。
- どのように今まで入試が改変されたかを知れた（高校，よかった）。
- テストに関する政策動向を批判的・歴史的にとらえ直してもらったこと（大学，よかった）。
- センター試験の歴史が分かったこと（その他，よかった）。
- これまでの流れを知れて良かった（高校，よかった）。
- これまでの流れがよくわかりました（高校，よかった）。
- これまでの変化，概要が理解できた（高校，よかった）。
- これまでの入試改革の流れがわかりました（大学，よかった）。
- これまでの入試改革のお話を伺いながら，不安が強くなりましたし，多少，混乱もしましたが（高校，よかった）。
- これまでの入試の変遷がよく分かって興味深かったが，今後に向けても具体が見えづらかった（高校，どちらとも言えない）。
- これまでの入試についてと，その当時の大学の対応等が興味深かった（高校，よかった）。
- これまでの経緯を知ることができた（大学，よかった）。
- これまでの経緯について，知ることができた（高校，よかった）。
- これまでの経緯とその問題点がわかったため（高校，よかった）。
- これまでの共通テストから入試制度を見て考えることができて良かったです（高校，よかった）。
- この時期に今回のテーマとすることが分かりませんでした（大学，改善すべき）。
- ここでの振り返りの意義は何？（高校，どちらとも言えない）。
- お二人とも分かりやすい（高校，よかった）。

- 共通 1 次経験 → センターから教員をしているので、その変遷がよくわかった。同様な取り組み、悩みを共有できていると感じた。また、自校に欠けている視点もあり、参考になった（高校、よかった）。
- （よかった）倉元先生のラフな話が分かり易かったこと。（どちらとも言えない）こうした方針がいい！という現実の話がほしかった（大学）。

4. 現状報告者の発表は如何でしたか。

- 廣瀬先生、渡辺先生、教員集団に対するリーダーシップには脱帽する。宮本先生、経験豊富で説得力がある（高校、よかった）。
- 話のポイントが絞れなかったようで、強調したい点が理解できなかった（高校、どちらとも言えない）。
- 論点が散漫（大学、どちらとも言えない）。
- 良かったが、時間が短く、最後かけ足になってしまったのが残念。もっと聴きたかった（高校、どちらとも言えない）。
- 良い発表でした。少し時間が足りなかった気がします（大学、よかった）。
- 様々な高校現場の方の話をきけたことがとても良かったです。高大の情報共有に向けて、実行していきたい（大学、よかった）。
- 様々な高校の取り組み、改革の課題が理解できた（高校、よかった）。
- 様々な観点で、述べられていてよかった。ただ、高大接続に振り回されている様子がもっと共有できればよかった（高校、よかった）。
- 様々な学校の現状と課題についてよく分かりました（高校、よかった）。
- 様々な学校の現状が知れた（高校、よかった）。
- 迷いの部分と取り組み（その他、よかった）。
- 本質のギロンをしたいのか、ヒハンをしたいのか。発表者によって偏りあり（高校、どちらとも言えない）。
- 幅広い視野となった（その他、よかった）。
- 発表者を絞るべき。発表側も伝えきれていない。時間に追われており、詳細な内容にふみこんでいない（高校、改善すべき）。
- 発表時間が短すぎる。1人当たりをもっと長くってほしい。テーマも、もっと絞り込んだ方がよい（高校、改善すべき）。
- 発表はよかったと思うが、時間がそれぞれ短く感じた（高校、改善すべき）。
- 内容は良かったが、1人当たりの時間が短くかけ足の印象。もう少し丁寧に聞きたかった（高校、どちらとも言えない）。
- 内容はたいへんよかったが、お一人ずつの持ち時間がやや不足。2名（30分×2）など（高校）。
- 内容が多く時間が足りないように感じた（高校、どちらとも言えない）。
- 特に廣瀬先生のご報告が非常に参考になりました。納得のいくことが多く良かった（高

校，よかった）．

- 特に大島高校（高校，よかった）．
- 特に宮本先生の発表は，現在の問題点を明確に捉えており良かったです（高校，よかった）．
- 渡辺先生，廣瀬先生に関して，時間が短いわりに内容を詰めこまれていたので主張があまり頭に残らなかった．宮本先生くらいのレジュメがちょうどよかった（その他，どちらとも言えない）．
- 渡辺先生，離島というハンデを全く感じさせない教育（高校，よかった）．
- 地方公立高校の具体例が現状を確認できたこと（高校，よかった）．
- 地方の高校の取りくみなど，参考になる部分が多くありました（大学，よかった）．
- 地方の公立高校の生徒と保護者の立場に立った対応が良くわかった（高校，よかった）．
- 地域・経済格差の具体例（困っていること）をもっと聞きたかった（その他，どちらとも言えない）．
- 知っていること，すでに行っていることの反復だったので，私にとっては（2）でした．内容はとてもよいと思います（高校，どちらとも言えない）．
- 短すぎて，各校のバックグラウンドがみえてこない．とくに大高は資料なしでどうにもならない（高校，どちらとも言えない）．
- 単純に，他校がどんな状況なのかを知れたので（高校，よかった）．
- 大島，米沢，両校の取組，非常に参考になった（高校，よかった）．
- 大学現職としてのスタンスで語ってほしかった（高校，どちらとも言えない）．
- 他校の現状が把握できてよかった（高校，よかった）．
- 前 2 つの報告は「入試制度の変革に際しての」地方高校の実情の報告になっていない（高校，改善すべき）．
- 先生方が制度論の根にある理念に対し，どうお考えなのかを知る良い機会でした（その他，よかった）．
- 人数を絞って，時間を長くした方がよい（高校，どちらとも言えない）．
- 人によって良し悪しがある（高校，どちらとも言えない）．
- 新テストに向けての様々な取り組みが紹介され参考になった（高校，よかった）．
- 焦点がどこにあったのかよく分からない話が多かった（高校，改善すべき）．
- 少し時間が短かったので，もっと丁寧なお話を聞きたいと思いました．自校との違いも多く，改善にいかせるかなと感じて聞いていました（高校，どちらとも言えない）．
- 少し，早かった．理解できない部分も…（高校，よかった）．
- 事例がきけて刺激になりました（高校，よかった）．
- 実態に応じた対応が参考になった（高校，よかった）．
- 自校の課題が明確に見えました（高校，よかった）．
- 自校に応用できるヒントが得られました（高校，よかった）．
- 時間が短く，事実と意見（主張）が十分にわけられて話されていない（高校，どちらとも

言えない).

- 時間が短く、具体的実践例が少なかった (高校, どちらとも言えない).
- 時間が短い (大学, どちらとも言えない).
- 参考になる取り組みだった (高校, よかった).
- 参考になる取り組みが聞けた (高校, よかった).
- 最初に主催者側より, どういうことでこの三校を選び, それぞれの話のポイントあたりの説明があるとよかった (大学, よかった).
- 最後の宮本先生の話はまさにその通り!! 高校も大学も受験生への悪い影響を最小限にするための提言をもっとすべき!! (高校, よかった).
- 今後につながる指針を得たため (高校, よかった).
- 今後とりくむべきことの参考になった (高校, よかった).
- 今までできることを考えるうえでとても参考になりました (高校, よかった).
- 高大連携の観点から, 高校の意見は重要 (大学, よかった).
- 高校側の努力, 不安が具体的に分かったこと (その他, よかった).
- 高校側の考えや意見が大変参考になった (大学, よかった).
- 高校先生方の現状が正しく伝えられていると思う (その他, よかった).
- 高校現場の声が聞けたよかった (大学, よかった).
- 高校現場の状況がよく理解できた (その他, よかった).
- 高校現場の危機感がよく分かった (大学, よかった).
- 高校現場での様々な取組や先生方の思いを知ることができた (大学, よかった).
- 高校現場が大事ということ, 現場が問題を抱えていることを聞けた (大学, よかった).
- 高校の側の受け留めが実感できた. 但し, 個別実践の報告をこえる全体像が示せる報告者が加わると, あるいは基調講演があるとなお良かった (大学, よかった).
- 高校の状況が把握できた (大学, よかった).
- 高校の指導方法の工夫について知ることができました (その他, よかった).
- 高校のまじめな対策に感じた. 宮本先生の不安 ⇒ 現実になりつつある. 大学も具体的にどう対応していくか迷っている (大学, よかった).
- 高校での問題が具体的であった (その他, よかった).
- 高校での心配の様子がわかった (大学, よかった).
- 高校が真剣に取り組んでいるようすがよくわかりました (大学, よかった).
- 現状報告 3 が高校現場の声! (高校, よかった).
- 現状をもう少し具体的に聞きたかった (20 分は短い) (高校, どちらとも言えない).
- 現状が聞けて (大学, よかった).
- 現場の声をして同調できることだらけだった (高校, よかった).
- 現場の声に共感できた. また具体的事例が本校でも活用できそう (高校, よかった).
- 現場の声が一番重要 (大学, よかった).
- 現場の取組の工夫を知ることができた (高校, よかった).

- 現場の取り組みを発表させるには、時間が短すぎた。もう少し学校としての取り組み内容、思いを聞きたかった（高校、改善すべき）。
- 現場の実態を知ることができた（高校、よかった）。
- 現場の課題を共有でき、解決へのヒントを得られた（高校、よかった）。
- 現場のお話が最も興味深いので時間配分（お一人の持ち時間）を多くしてください（その他、改善すべき）。
- 具体的に事例を知ることができた（高校、よかった）。
- 具体的な話が聴けた（大学、よかった）。
- 具体的な取組を進めている学校があり参考になった（高校、よかった）。
- 具体的な取組を中心にお話を聞きたかった。時間が限られているので取組のみにしぼってほしかった（高校、どちらとも言えない）。
- 具体的な取り組みが聞けて、参考になった（高校）。
- 具体的な取り組み、高校で不安、混乱が起こっていることを発表していて共感できた（高校、よかった）。
- 具体的な事例でよかった（高校、よかった）。
- 宮本先生は第三者的でよろしくなかった（その他、どちらとも言えない）。
- 宮本先生の話は論点がまとまっておりわかりやすかった。大島高、米沢興譲館高の状況がまずまずわかり参考になりました（大学、よかった）。
- 宮本先生の話が知りたいことを言ってほしいことをズバリ述べてくれていて、ありがたかった。本当にその通りだと思います（高校、よかった）。
- 宮本先生の話がわかりやすく、貴重な経験となった（高校、よかった）。
- 宮本先生の発表＝まとめ方が素晴らしい（高校、よかった）。
- 学校のスタンスが感じられて参考になりました（高校、よかった）。
- 各都道府県・場所・生徒の実態によって対応が異なる。多くの事例を知っておきたい（高校、よかった）。
- 各高等学校の考え方や状況が理解できた（高校、よかった）。
- 各校及び高大接続改革委員の宮本先生の意見がきけてよかった（高校、よかった）。
- 各校の特色と共に、共通性も見いだせ、参考になった（高校、よかった）。
- 各校の取組を具体的に把握できたのが良い（高校、よかった）。
- 各校の取組、また生徒の力を伸ばすための教員の考え・意見（高校、よかった）。
- 各校の取り組み等を聞くことができて良かった（高校、よかった）。
- 各校の取り組みを知ることができた。もっと時間があれば詳しく話が聞けたので残念でした（高校、よかった）。
- 各校の取り組みや考え方、想いがわかり参考になった（高校、よかった）。
- 各校の取り組み、悩みなど参考になることが多くありよかった（高校、よかった）。
- 各校の実践事例が興味深かったです。こちらの時間がもっとあっても良いと思いました（高校、よかった）。

- 各校の現状，悩みがわかり，共有できた（高校，よかった）。
- 各校のキャリアデザイン・進路指導がとても参考になった（高校，よかった）。
- 各現場の様子がよく分かった（高校，よかった）。
- 各学校の現状と取り組みがわかった（高校，よかった）。
- 各学校での取り組みを知ることが出来たので（高校，よかった）。
- 何が問題で，今，何を準備しているかわかった（高校，よかった）。
- 下記の私の考えが決して異質なものでないことを確認できた。ただし，生徒たちが不安に思っていることも確かなので，どのように対処していけばいいかさらに学校全体で議論を進めたい（高校，よかった）。
- よかったですが，発表者を2人にしぼってもよかったかと思います（高校，よかった）。
- やや時間不足の感（大学，どちらとも言えない）。
- もう少し独自性を焦点化し，どう対応してどう成果を出しているのかを発表してほしいかった（高校，どちらとも言えない）。
- もう少し時間を長く（高校，改善すべき）。
- もう少し時間が欲しい（もしくは事例を2つにする）（大学，改善すべき）。
- どの発表者（立場，場所）も苦労，不安を抱えていることを再認識させられた（高校，よかった）。
- とても参考になった（大学，よかった）。
- それぞれの立場（地域）のお話でしたので興味深かったです（高校，よかった）。
- それぞれの視点ですばらしいと思います（高校，よかった）。
- それぞれの現状報告が大変参考になったが，もう少し時間があってもよかった（高校，よかった）。
- それぞれのスタンスの確認ができた（高校，よかった）。
- スライドの切り替えが早く，少し見づらかった（大学，どちらとも言えない）。
- かけ足すぎて，頭に入らない。宮本先生の話は分かりやすかった（大学，どちらとも言えない）。
- おひとりが話す時間が短くて，話が途中になっていたように思いました（大学，どちらとも言えない）。
- 20分という時間が短すぎて，満足のいく話が聞けなかった（高校，改善すべき）。
- 同様な取り組み，悩みを共有できていると感じた。また，自校に欠けている視点もあり，参考になった（高校，よかった）。
- （よかった）宮本先生の高校現場の状況の報告。（どちらとも言えない）発表内容と資料が一致してほしい（改善すべき）資料がほしい。新制度に対して高校側の具体策がほしい。皆，時間が短い（大学）。

5. ディスカッションは如何でしたか。

- 率直な質問，率直な回答でよかった（高校，よかった）。

- 率直な意見交換をきけたこと（大学，よかった）。
- 率直な意見を聴くことができて，参考になった（高校，よかった）。
- 様々な立場から意見を聞くことができて面白かった（高校，よかった）。
- 様々な立場からの話し，回答を聞くことができ良かった（高校，よかった）。
- 様々な意見が活発に議論されてよかったです（大学，よかった）。
- 様々なことが深く学べた（高校，よかった）。
- 予備校等の研究会と何ら変わるところはない．ただ，共有できることは多々あるので意義は確かにある（高校，どちらとも言えない）。
- 明確な回答がないものもあるので…（高校，どちらとも言えない）。
- 非常に参考になりました（高校，よかった）。
- 非常に参考になりました（高校，よかった）。
- 発表時間が限られていたので，いろいろな話が聴けて良かった（高校，よかった）。
- 発表時からさらに踏みこんだ意見や考えを聞くことができた（高校，よかった）。
- 発表の内容をほり下げられた．必要ですね（高校，よかった）。
- 認識の差について率直な意見交換だった（大学，よかった）。
- 特に同じ高校の立場，そして大学側の立場の方々から，ざっくばらんな声を聞くことができて，とても参考になりました（高校，よかった）。
- 討議になっていないのでは？ → 質疑応答でしょ（高校，どちらとも言えない）。
- 的確なファシリテーションで，全体が引きしまった後味よいフォーラムになりました（その他，よかった）。
- 大谷先生が，学力の（高い）大人しい生徒が進学できなくなるわけではない，そんな馬鹿なことはないとおっしゃったことが印象的でした（高校，よかった）。
- 大学側の現場の人がほしい（大学，改善すべき）。
- 大学と高校両者の具体的な話を聞くことができてよかった（高校，よかった）。
- 大学と高校先生側の視点，スタンスの差異がよく分かる（その他，よかった）。
- 大学と高校の考え方がちがいきすぎる．立ち位置がちがう（その他，よかった）。
- 大学・高校側とその立場で話を聞くことができ満足（高校，よかった）。
- 大学・高校双方の立場の考えを聞くことが出来てよかった（その他，よかった）。
- 大学・高校のよりよい情報交換の場となった（高校，よかった）。
- 大学，高校共に情報共有することの大切さを感じた（高校，よかった）。
- 多様な視点からの答えが聞け有意義だった（高校，よかった）。
- 多岐にわたり濃い時間でした（高校，よかった）。
- 多くの先生方が疑問に思っていること聞くことが出来た（高校，よかった）。
- 他大学の様子がわかると良かった（高校，よかった）。
- 新しいものに対する不安は，みんなもっています．具体的な情報を共有できて良かったです（高校，よかった）。
- 色々な生の声が聞けた（高校，よかった）。

- 情報の共有を大切に取り組むことの大切さを学んだため（高校，よかった）。
- 準備してきたことではなく，本音を聞けたと思うので（高校，よかった）。
- 取り上げた質問が良かったと思います（大学，よかった）。
- 質問に答える場となっていた（大学，どちらとも言えない）。
- 質問に回答する形で議論が深まった．テーマを区切ってもっと時間を取りたい（高校）。
- 質問が多くの人が思っていることとわかり，不安が軽減しました（高校，よかった）。
- 質問が個人的には出せませんでしたが，他の先生方の意見，質問を聞いて，そういえば同じことを考えていたなと思いました（高校，よかった）。
- 司会の振り方がうまかったです（高校，よかった）。
- 参考になる話が多くあった（高校，よかった）。
- 参加者のギモン等が知れた（大学，よかった）。
- 高大での連携の重要性を感じた．ピンチはチャンスだと思う（高校，よかった）。
- 高校側，大学側互いに意見を言い合えたと考えます．とても勉強になりました（高校，よかった）。
- 高校側，大学側の意見がバランスよく聞けたが，できれば受験生か受験を経験した学生の意見も聞きたかった（大学，よかった）。
- 高校の教育理念と入試のしくみが一致しないことは多々ある．高校現場で理念を共有しながら入試制度も全教員と共有し，学校に落とし込む作業は当たり前だがむずかしい．それをちゃんと言う高校は教育（人を育てること）がちゃんとしていると思われ素晴らしいと思った（大学，よかった）。
- 高校と大学の先生のやり取りや面白かったです（その他，よかった）。
- 高校・大学それぞれの課題の共有ができた（大学，よかった）。
- 高校，大学双方の先生方の率直な意見を伺えた（大学，よかった）。
- 御登壇いただいた先生方，おつかれさまでした（高校，よかった）。
- 個別試験がどう変わるかについて，2つの大学から答えが頂けたのが良かったです（高校，よかった）。
- 現場の本音（その他，よかった）。
- 現場（会場）の質問を司会者がとてもうまく整理されていて濃い時間だった（高校，よかった）。
- 具体的な話がきけてよかった（高校，よかった）。
- 具体的な内容が聞けた（大学，よかった）。
- 具体的な課題が整理できました（高校，よかった）。
- 具体的なお話を聞くことができ良かった（高校，よかった）。
- 共通の問題を認識できた（大学，よかった）。
- 共通の願いが感じられた（高校，よかった）。
- 共通テスト導入にかかる問題点，対策が理解できた（高校，よかった）。
- 共通テスト以外の様々な改革に関する大学側の思いを聞くことができたため（高校，よ

かった).

- 共感できることが多々ありました. 具体策が見えないのが悩ましいですが (高校, よかった).
- 疑問, 不安がいくらか解消した (高校, よかった).
- 基調講演とあわせて報告がつながった (大学, よかった).
- 基調講演, 現状報告の問題点が掘り下げられた (高校, よかった).
- 基調講演, 現状報告などで具現化されなかったものが具体的にイメージできるようなものであった (高校, よかった).
- 簡単なものから大変深い話まで幅広く本音が聞けて良かった (高校, よかった).
- 学校の職員間, 保護者, 生徒への”言葉”のヒントをいただけたこと (高校, よかった).
- 各パネラーから聴きたい話が聴けてよかったと思います (大学, よかった).
- 各ご報告の内容が深まりました (その他, よかった).
- 会場質問にこだわらなくてもよいのではないか (その他, どちらとも言えない).
- 何が起きているか戸惑うことが多かったが, 学校によっては高校も大学も真剣に議論し動いていることがわかった (高校, よかった).
- より具体的になった (高校, よかった).
- より議論が深まりました (高校, よかった).
- よかったが時間が足りない (高校, よかった).
- もっと時間を長くして (高校, よかった).
- もっと時間があればよかったが… (その他, どちらとも言えない).
- もう少し長い時間欲しかったです. このように自分が思った質問をすぐフィードバックしてくれるところが非常によいと思います (高校, よかった).
- もう少し時間が長いとよい. 1人40分ぐらい (高校)
- もう少し, 本音でぶっちゃけても良かった (高校, どちらとも言えない).
- また最新情報を伺いたい (大学, よかった).
- ポートフォリオや4技能について聞けてよかった (高校, よかった).
- ポートフォリオは, やはり大事だと思うのですが, 「懐疑的」という意見は, どういうことなのかという方を知りたかった (高校, よかった).
- ポートフォリオの活用と一般入試における「主体性評価」は二の次という正直な意見 (高校, よかった).
- パネラー同士の議論も欲しいと思いました (高校, どちらとも言えない).
- パネラーの先生方の意見が多く聞けたので, 良かった「生の声」が良い (高校, よかった).
- ディスカッションまで至っていない (高校, どちらとも言えない).
- それぞれの立場での問題点をベースに, 肉声 (本音) 聴けて良かったです (高校, よかった).
- それぞれの立場からの意見を伺えて全体的な課題が浮き彫りとなった (高校, よかった).

- それぞれの考えの一端がわかった。安心した（高校，よかった）。
- ズバリ，産業界の構造，業者の介入が招いた改革だということは言ってしましましょう（高校，よかった）。
- いろんな問題意識が共有できた。高大話し合いの必要を感じた（大学，よかった）。
- black box が大きいというのがわかった。文科省から出た文章を呼んでいると整理されているように感じた（大学，よかった）。
- 2021 年入試に向け具体的なことがまだ分かっていないこともあり，内容が少しぼやけていたように思う（高校）。
- 「ポートフォリオ」「主体性」「英語」の 3 つについては，ひとまとめにせず，それぞれの各論についてもちゃんと分けてとりあげてほしい（改善すべき）。

6. 時間は如何でしたか。

- 本当はお一人お一人の発表をもう少しききたいところですが，長時間になると集中力も切れますので…（高校，ちょうど良い）。
- 内容が盛り沢山で（高校，短すぎた）。
- 現状報告者の発表を長くとっていただきたいと思う（高校，短すぎた）。
- 現状報告を長めにしてほしい（高校，短すぎた）。
- それぞれの時間をもう少し長目にとっていいのではないかな。もっとお聞きしたい。全体がのびないような工夫が必要だが（高校，短すぎた）。
- あと 1 時間あっても良い（大学，ちょうど良い）。
- 1 つ 1 つは短すぎた（高校，短すぎた）。
- （短すぎた）報告者 （長すぎた）基調講演者（大学）。

7. 今後も「東北大学高等教育フォーラム」を行うとすれば，どのような形式，テーマを望まれますか。

- 来年も新テストに向けて（高校）。
- 文科省の役人を参加させると良い（大学入試センターの人も）（高校）。
- 入試制度の変化が大学教育をどう変えていくのか，学生の質がどう変わっていくのか，早くても 3 年後くらいかとは思いますが，高校教員としては気になります（高校）。
- 入試制度についてさらに取り上げて欲しい（高校）。
- 入試制度が変わるとき No.2 をお願いします（1 年経つとかなり進むと思われるので）（高校）。
- 入試制度，設計を行っておられる側の意見を聞きたい（また，英語試験の民間業者）（高校）。
- 入試改革後，高校に求めること（高校）。
- 同様の形式でよい（高校）。
- 同テーマ（高校）。

- 大変勉強になりました。自分自身や高校側で現在抱えている不安・混乱は、どこ現場でも同じであり、生徒の将来のため、我々は現在できることを精一杯やっていかなければならないと痛感しました。ありがとうございます（高校）。
- 大学入試共通テストと民間の英語資格試験の活用について（その他）。
- 大学側が高校側に求める学力、学びのあり方などについて、東北大に加えて他大学でも、どのような個別学力試験、AO 入試などを今後、行って生徒の力を試していきたいのか（高校）。
- 大学間連携（大学）。
- 大学の全学教育改革（Society5.0 実現のための文理融合した教養教育（読解力向上を含む）等の在り方について）（大学）。
- 大学の求める高校生！ → ウラの意味（大学進学をしない高校生がいても良いのでは？）（高校）。
- 総合的多面的評価（その他）。
- 生徒の思考力を各教科でどう育てるか。教科横断的な取組みなど（高校）。
- 制度変更があった場合、その検証（大学）。
- 進行する高大接続改革の現状を踏まえながら、課題を洗い出し現場はどう対応すべきか、また、国への提言のもとになるような話になるといいと思います（大学）。
- 新入試制度を維持願いたい（大学）。
- 新時代に向けての新たな人材の育成について（高校）。
- 新しい制度に対して、例えば東北大学としては具体的にどう対応していくのか知りたい（大学）。
- 将来の教育の変化と東北地区のスタンス（現状）について（高校）。
- 示唆的なテーマが多い。2日間の日程には出来ないか（高校）。
- 次年度も今回の「テーマⅡ」で行って戴いても良いと思います（高校）。
- 次第に新しい入試制度の情報が出てくると思うので、そのまとめた話が聞けるものを開きたいです（高校）。
- 私立大学の演者もいるとよいと思いました（大学）。
- 私立の立場から見ると、国立が入試を多様化していくことがどのように学部で受け留められているのか、学生に還流されているのか気になる（大学）。
- 施行前後一年一年をしっかりと追いかけた内容であってほしいと思います（高校）。
- 思考力をどのように育てるか ～授業の実践を通して～（大学）。
- 参加者間でもディスカッションをしてみたい…（高校）。
- 今般の「入試改革」の継続的検証、現行と次回の学習指導要領の批判的検証（高校側に特に実践検証）（高校）。
- 今後も継続して、このような会を開催していただきたい。内容はどのようなものでもよいです（高校）。
- 今回と同様でいいのでは（高校）。

- 高等教育政策の新しい動向と理念，その実践例，対応例（大学）．
- 高大接続プログラムのあり方（大学）．
- 高大接続から人材育成の在り方，授業・教育の在り方でフォーラムを開催してはいかがでしょうか．または，社会課題への向き合い方など教育の立場から話を聞いてみたいです（高校）．
- 高大接続，入試関係のテーマ（その他）．
- 高校の立場から言えば，全国の様々な高校の実例がきけてありがたい（高校）．
- 高校の教育内容が大学での学びや研究に深く繋がっていくためにはどう繋がる必要があるか（高校）．
- 高・大双方の入試に関わる担当者が集まって直に意見交換できる機会は少ない．このような機会・時間を増やしてもらいたいと思います（高校）．
- 高・大接続に関する社会的ニーズであるテーマを引き続き扱ってほしい（高校）．
- 高・大での意見交換がさらに活発になるといいと思います（高校）．
- 後半は所属種別による分科会（小グループ）の形での討論が良いのでは？（高校）．
- 個別大学の個別試験に”思考・判断・表現”の問題をどう取り入れるのか．是非具体的に討論・発表していただきたい（その他）．
- 現状が望ましい．今後ともよろしくお願いします（高校）．
- 現在の高校生に求められる能力とそれを現場のカリキュラムにどう落としこんでいくべきか（高校）．
- 継続して入試改革についてお願いした（大学）．
- 形式は今回のものが良かった．テーマは1年後にはもう少し具体的になっていると思う新入試についての講演（高校）．
- 基調講演，テーマ精選で1本，現状報告とディスカッションに時間を割く（高校）．
- 各立場の問題に対する具体的な解決事例（大学）．
- 英語教育の進め方などの話題にも興味があります（大学）．
- 英語について．この場で英語の授業の内容を問うのは場ちがいだと思う．回答できるはずがない．現場はなんとか対応しつつあるのに徒に不安をあおるような面があった．もっと現場を見るべき（高校）．
- より大学と高校側の意見を述べ合い，討論する場があってもいいのではないかと思います（高校）．
- もう1回，今回の改革でしょうか．直前スペシャルとして（高校）．
- もう1～2年は，新テストにかかるテーマが続いてほしい（高校）．
- テーマをもっと具体的にしぼる→発表内容の精選（高校）．
- テーマ，高大接続改革については，不透明な点が多く，継続的に掘り下げていただきたい（高校）．
- これから必要な「書く力」（表現力）（高校）．
- これからの社会で必要とされる学力・人間力（高校）．

- ごめんなさい、思いつきません（高校）.
- この形の継続と内容充実（高校）.
- ここしばらくは新入試制度で良いのではないかと、初心者にもわかるようかんたんな背景説明が必要（高校）.
- Society5.0 に向けて日本の教育の理想と現実課題、課題解決型ワークショップ（高校）.
- 共通テスト（入試制度改革）が高校に求めるもの、大学が求める深い学び（高校）.
- ディスカッションなど、インタラクティブな協議の場、質疑応答が良かった（大学）.
- 「思考力」とは何か？（その他）.
- （産業界から様々な要請がある中）大学は研究機関と職業教育機関のどちらに重きをおくべきか（高校）.

8. その他、全般的な御意見、御感想をお寄せください.

- 様々な考えるきっかけがありました。ありがとうございました。学校に戻り、本校の先生方と共有したいと思います（高校）.
- 毎年楽しみにしております。今後ともよろしくお願いします（高校）.
- 毎年楽しみにしています。ありがとうございました（高校）.
- 本日はどうもありがとうございました（高校）.
- 文科の担当者と呼んでやるのはどうですか？（高校）.
- 入試について大学・高校の双方の現場の関係者が意見交換する機会は有用でした。議論の成果が広く報告されることを期待します（大学）.
- 登壇者の人選のちみつさにはいつもうなされます。「受験生保護の大原則」については今年度、高校訪問に来る大学さん全てに説いています。卓説に感謝しています（高校）.
- 大変勉強になりました。また勉強にきたいと思います。ありがとうございました（高校）.
- 大変勉強になりました。ありがとうございました（高校）.
- 大変勉強になりました。ありがとうございました（高校）.
- 大変勉強になりました。有り難うございました（その他）.
- 大学側がかなり高校の現場を見て情報共有に積極的なことが分かり、また、このような場に参加したいと思いました（高校）.
- 大学の先生方と話をできる場をもっと作りたいです（高校）.
- 全体的に大変勉強になりました（その他）.
- 生徒、保護者の心を改革をすすめようとしている方に考えていただきたい、と強く思った（高校）.
- 初めて参加させていただきましたが、大変勉強になりました。ありがとうございました（高校）.
- 資料がひとつづりになっている方が思う。バラバラなので扱いづらい。現状報告とディスカッションを合わせてもいいかと思う（高校）.
- 参加して良かったです。ありがとうございました（高校）.

- 昨年に引き続き 2 回目の参加でしたが、大変有意義なお話を聞けたと思っています。本当にありがとうございました（高校）。
- 今回の貴学の入試方針にはこのようなフォーラム等の積み重ねがあった上でのことと拝察します。素晴らしい取り組みだと思います（高校）。
- 今からでも遅くないので、英語の外部検定と国・数の記述式導入の延期を強く主張して下さい。生徒が犠牲にならないように（高校）。
- 国公立大でも G.L 大学では状況も違うであろうし、都市、地方間の違い、さらに私大（都市、地方）それぞれの視点があるのも良いかもしれません。毎回大変勉強になります。有難うございます（高校）。
- 高大の歩み寄りの大切さに気付いた。高校内で悩むだけでなく、大学へ足を運ぶことの大切さを認識した（高校）。
- 高校の先生方が真摯に学生に向き合っている印象があった（大学）。
- 午前中から行い、現状報告の 1 人あたりの時間をもう少しのばしてほしい（高校）。
- 現状報告者の時間を多くとってほしい。駆け足で趣旨が伝わりづらかった（高校）。
- 現在の問題は政治を変えるしかないのでは、という思いを新たにしました（高校）。
- 共通 1 次からセンター試験となった当時の考えや様子が興味深く、その当時も急な変更や、その後に影響を与える「おもわく」などがあったことを知った。来年度の新入試についてもっと各校の取組が知りたい（高校）。
- 共通の課題が明らかになっていたので良かったと思う。ただ、大学、高校も手さぐりであることには変わりはない。そういった問題を同じ場で話し合えたことは良かった。継続して欲しい（高校）。
- 貴重な時間を用意いただき、ありがとうございました（大学）。
- 規模等を考えると、新大学入試はまだまだ問題がありそうです。現状報告をされた先生方の話にもありましたが、私も本質的に大学側が求める人物像が大きく変わるとは考えにくく、しっかりとした基礎学力を身につけ、総合的に充実した学生生活を送るよう生徒たちに話しています（高校）。
- 基調講演の時間を短く、現状報告の時間を長くしてもらいたい（大学）。
- 基調講演、実践発表ともにボリュームを減らして、より深い発表、議論になっていただけた方が理解が深まると思います（高校）。
- 改革は悪いものを改めるために行われると認識して今いますが、過去の評価をなくして、かえって混乱させるだけという疑問は消えませんでした。ありがとうございました（高校）。
- 会場がとても良かったです（高校）。
- 英語の民間試験活用（だけ）が最も不安要素であることを再認識しました（高校）。
- 以前、京大の教育フォーラムに参加したが、複数大学、複数高校での小グループディスカッションが設定される場がありました。時間的な都合もあるが、そこから全体ディスカッションという流れも良いと思いました。高校と大学とが連携して 1 人 1 人を育てる

ことが最も大事だと考えます。その為のやり取りが進行していくとよいかと思っています（高校）。

- フォーラムに参加して、何をめざした入試制度改革なのか、疑問が大きくなった。高校・高校生のたいへんさに気づく機会になった（大学）。
- とても良かったです。ありがとうございました（高校）。
- この会の様子が、すべての大学に伝わることを望みたい。東北地区のリーダーとして少なくとも東北地区の大学を集めるよう仕掛けて頂けないでしょうか（高校）。
- このイベントから学ぶことがとても多いです。今後も教育課題をテーマに企画願いたいと思います（高校）。
- ここ数年、毎年参加しています。今回も参加して良かったです（会場も）来たくても来れなかった同僚にしっかり伝えたいと思いました（高校）。
- いつも楽しみにさせて頂いております。ありがとうございます（その他）。
- いただいた情報をもとに自校の生徒の実情に照らして思考していきます。様々なヒントをいただき、ありがとうございました（高校）。
- いい勉強になりました。ありがとうございました（その他）。
- ありがとうございました（大学）。
- ありがとうございました（高校）。
- ありがとうございました（高校）。
- ありがとうございました（高校）。
- 「現状報告」3名の20分という時間が短すぎると感じました。基調講演よりも高校の実態をより詳しく知りたかったです（駆け足だったので質問の整理も難しかった）（大学）。
- 「ディスカッション」の時間を多くとって、テーマを明確にして行うような形式の方が良いのでは（高校）。

参加者統計

1. 参加者総数: 371 名

(講演者・招待参加者: 14 名, 大学: 95 名, 高校: 195 名, スタッフ等: 17 名, その他: 50 名)

2. 参加者地域別

宮城県内: 143 名

宮城県以外の東北地方: 118 名

(青森県: 17 名, 岩手県: 32 名, 秋田県: 15 名, 山形県: 25 名, 福島県: 29 名)

東北地方以外: 110 名

(北海道: 8 名, 茨城県: 6 名, 栃木県: 3 名, 群馬県: 3 名, 埼玉県: 1 名, 千葉県: 2 名, 東京都: 33 名, 神奈川県: 2 名, 新潟県: 7 名, 富山県: 1 名, 石川県: 1 名, 山梨県: 2 名, 長野県: 5 名, 静岡県: 6 名, 愛知県: 3 名, 岐阜県: 3 名, 京都府: 4 名, 大阪府: 4 名, 兵庫県: 1 名, 島根県: 1 名, 岡山県: 1 名, 広島県: 3 名, 香川県: 1 名, 愛媛県: 2 名, 高知県: 1 名, 福岡県: 4 名, 鹿児島県: 1 名, 沖縄県: 1 名)

多くの方々に御参加いただき、ありがとうございました。

第 30 回東北大学高等教育フォーラム運営スタッフ

統括責任者	石井光夫	
企画責任者	倉元直樹	
事務局	宮本友弘	泉毅

当日スタッフ

縣拓充	石上正敏	檜田豪利
鎌田裕子	熊井弘子	庄司強
末永仁	田中秀樹	秦野進一
林如玉		

IEHE TOHOKU Report 80

第 30 回東北大学高等教育フォーラム報告書

新時代の大学教育を考える [16]

入試制度が変わるとき

発行：2019 年 10 月

編集：石井 光夫，倉元 直樹，宮本 友弘，泉 毅

発行者：東北大学高度教養教育・学生支援機構

Institute for Excellence in Higher Education, Tohoku University

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

Tel: 022-795-7551

Email: ieheoffice@ihe.tohoku.ac.jp

印刷所： 有限会社 明倫社